

大峰ヶ台丘陵の遺跡

朝 美 澤 1 次

客谷古墳群B地区

朝 日 谷 1 号 墳

1994

松 山 市 教 育 委 員 会

財 団 法 人 松 山 市 生 涯 学 習 振 兴 財 团

埋 藏 文 化 財 センター

大峰ヶ台丘陵の遺跡

朝 美 澤 1 次

客谷古墳群B地区

朝日谷1号墳



1994

松山市教育委員会

財團法人松山市生涯学習振興財團

埋蔵文化財センター



1 全 景 (南より)



2 1号墳 (南西より)



1 2号墳全景（南西より）



2 2号墳近景（南より）



1 子持勾玉（1号墳周溝出土品）

序

わたしたちの住む松山市では、近年の景気動向にもかかわらず宅地開発や公共事業が日白押しの状況となっております。そして、これらの開発事業に並行して、数多くの埋蔵文化財がその姿を現わし、写真や図面などの記録資料として後世に伝えられております。

その文化財は、わたしたちの祖先がわたしたちに残してくれた古代人の貴重な知恵であり、今日の科学技術の基礎ともなった意義あるものです。また、忘れてはならないのは、これらの文化財は国の宝であり、わたしたち共有の文化遺産でもあることです。

こうした理念にたって調査した結果を記した今回の報告書は、松山市教育委員会が松山市や民間業者から委託を受けて、昭和63年から平成元年にかけ松山平野西部に位置する大峰ヶ台丘陵の3遺跡について発掘調査を実施し、財團法人松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センターがまとめたものです。

本書が、埋蔵文化財の保護のための資料として、また松山市の歴史を研究する資料として広くご活用いただければ幸いです。

本事業の実施にあたりご協力、ご指導を賜りました関係各位に対し、深くお礼を申し上げます。

平成6年3月31日

財團法人 松山市生涯学習振興財團

理事長 田中誠一

例　　言

1. 本書は、松山市教育委員会（松山市埋蔵文化財センター）が、昭和63年9月17日より平成元年8月1日までに実施した客谷古墳群B地区（松山市南江戸6丁目）、朝美澤（さお）遺跡（松山市朝美2丁目）、朝日谷古墳群1号墳（松山市朝日ヶ丘1丁目）についての埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 遺構の測量は松村　淳、高尾　和長、山本　健一、水本　完治、大森　一成、小笠原善治、福山　宏志が行った。遺構の撮影は松村　淳、小笠原善治、近藤　茂が行った。
3. 遺物の実測・トレースは松村　淳、持永　皆子、上西　真弓、生鷹　千代、山下満佐子、松山　桂子、三木　和代、平岡　直美他で行った。遺物の撮影は大西　朋子が担当した。
4. 遺構の名称は住居址及び掘立柱建物址：S B、土壙：S K、溝：S D、自然流路：S R、トレンチ溝：Tとした。
5. 方位は磁北を使用した。
6. 遺物実測図と遺構測量図は、スケール下に縮尺を明記した。
7. 遺構及び遺物の製図は松村　淳が主に行い、梅木　謙一、水口　あをい他の協力を得た。
8. 本文の執筆は松村　淳、梅木　謙一が主に行い、客谷古墳群B地区及び朝日谷1号墳出土の須恵器については平岡　直美が行った。
9. 編集は梅木　謙一が行い、水口　あをいの協力を得た。
10. 本書に関する図面・遺物は、松山市埋蔵文化財センターで収蔵保管している。
11. 調査及び報告書作成に際しては、愛媛大学 下條　信行、同　村上　恭通、九州大学 宮木　一夫の各先生に御指導をいただいた。

本文目次

第1章 はじめに	〔松村・梅木〕
1. 調査に至る経緯	1
2. 刊行組織	1
3. 環境	3
第2章 朝美澤遺跡1次調査地	〔松村・梅木〕
1. 調査の経過	7
2. 層位	10
3. 遺構と遺物	10
4. 結び	37
第3章 客谷古墳群B地区	〔松村・梅木・平岡〕
1. 調査の経過	47
2. 北部の調査	50
3. トレンチ調査区	85
4. 結び	93
第4章 朝日谷1号墳	〔松村・梅木・平岡〕
1. 調査の経過	105
2. 層位	107
3. 遺構と遺物	109
4. 結び	122
第5章 調査の成果と課題	〔梅木〕 127

挿図目次

第1章 はじめに

第1図 松山平野北部の主遺跡分布図（縮尺1/50,000）	2
第2図 大峰ヶ台丘陵の遺跡分布図（縮尺1/25,000）	4

第2章 朝美澤遺跡1次調査地

第3図 調査区位置図（縮尺1/800）	9
第4図 区割図（縮尺1/400）	
第5図 上層図（縮尺1/100）	11
第6図 A地区遺構配置図（縮尺1/200）	12
第7図 A地区SB1測量図（縮尺1/100）	13
第8図 A地区SB1出土遺物実測図（縮尺1/3・1/4）	14
第9図 A地区SD1・2・3出土遺物実測図（縮尺1/2・1/3・1/4）	16
第10図 A地区包含層出土遺物実測図（1）（縮尺1/3・1/4）	17
第11図 A地区包含層出土遺物実測図（2）（縮尺1/3）	18
第12図 B地区遺構配置図（縮尺1/100）	19
第13図 B地区SK配置図（縮尺1/80）	21
第14図 B地区SK4測量図（縮尺1/20）	
第15図 B地区SK4出土遺物実測図（縮尺1/2・1/4・1/8）	22
第16図 B地区SK1測量図・出土遺物実測図（縮尺1/20・1/2・1/4・1/6）	24
第17図 B地区SK2測量図・出土遺物実測図（縮尺1/20・1/6）	25
第18図 B地区SK3測量図（縮尺1/20）	26
第19図 B地区SK3出土遺物実測図（1）（縮尺1/4）	27
第20図 B地区SK3出土遺物実測図（2）（縮尺1/4）	28
第21図 B地区SK6測量図（縮尺1/40）	
第22図 B地区SB1測量図（縮尺1/40）	30
第23図 B地区SK5測量図・出土遺物実測図（縮尺1/40・1/4）	31
第24図 B地区SB2測量図（縮尺1/40）	32
第25図 B地区用水池出土遺物実測図（縮尺1/3・1/4）	33
第26図 B地区柱穴・褐色土出土遺物実測図（縮尺1/3・1/4）	35
第27図 B地区試掘調査出土遺物実測図（縮尺1/3・1/4）	36

第3章 客谷古墳群B地区

第28図 遺跡分布図(縮尺1/5,000)	48
第29図 調査地位置図(縮尺1/3,000)	49
第30図 造構配置図(縮尺1/400)	50
第31図 1号墳測量図(縮尺1/200)	53・54
第32図 1号墳土層図(縮尺1/100)	
第33図 1号墳遺物出土状況(縮尺1/30)	55
第34図 1号墳測量図(1)(縮尺1/40)	56
第35図 1号墳測量図(2)(縮尺1/60)	57
第36図 1号墳玄室出土遺物実測図(1)(縮尺1/3)	58
第37図 1号墳玄室出土遺物実測図(2)(縮尺1/3)	59
第38図 1号墳玄室出土遺物実測図(3)(縮尺1/2)	60
第39図 1号墳羨道出土遺物実測図(縮尺1/3)	61
第40図 1号墳周溝出土遺物実測図(縮尺1/3)	63
第41図 1号墳周溝・出土地点不明遺物実測図(縮尺1/3・1/2)	64
第42図 1号墳周溝出土遺物実測図(縮尺1/3・1/2)	65
第43図 2号墳造構配置図(縮尺1/200)	66
第44図 2号墳土層図(縮尺1/100)	
第45図 2号墳A石室遺物出土状況(縮尺1/30)	68
第46図 2号墳A石室測量図(1)(縮尺1/30)	69
第47図 2号墳A石室測量図(2)(縮尺1/60)	70
第48図 2号墳A石室出土遺物実測図(1)(縮尺1/3)	71
第49図 2号墳A石室出土遺物実測図(2)(縮尺1/2・1/3)	72
第50図 2号墳B石室測量図(1)・遺物出土状況(縮尺1/2・1/40)	74
第51図 2号墳B石室測量図(2)(縮尺1/60)	75
第52図 2号墳B石室出土遺物実測図(縮尺1/3)	76
第53図 2号墳丘部出土遺物実測図(縮尺1/3)	77
第54図 SK 1測量図(縮尺1/40)	79
第55図 SK 2測量図(縮尺1/40)	
第56図 SK 3測量図(縮尺1/40)	80
第57図 SX 1測量図(縮尺1/20)	
第58図 SX 1出土遺物実測図(縮尺1/4・1/8)	81
第59図 SX 2測量図・遺物出土状況(縮尺1/40)	82
第60図 SX 2出土遺物実測図(縮尺1/8・1/3)	83

第61図	S K 4・5測量図(縮尺1/100)	84
第62図	トレンチ測量図(1)(縮尺1/200)	86
第63図	トレンチ測量図(2)(縮尺1/200)	87
第64図	WT 9測量図・出土遺物実測図(縮尺1/2・1/100)	89
第65図	ET 9測量図(縮尺1/100)	89
第66図	出土遺物実測図(1)(縮尺1/3)	91
第67図	出土遺物実測図(2)(縮尺1/3)	92

第4章 朝日谷1号墳

第68図	調査地位置図(縮尺1/2,000)	106
第69図	造構配置図(縮尺1/400)	108
第70図	1号墳土層図(縮尺1/100)	108
第71図	石室測量図(1)・遺物出土状況(縮尺1/30)	111
第72図	石室測量図(2)(縮尺1/30)	112
第73図	石室測量図(3)(縮尺1/40)	113
第74図	石室出土遺物実測図(1)(縮尺1/3)	115
第75図	石室出土遺物実測図(2)(縮尺1/3)	116
第76図	石室出土遺物実測図(3)(縮尺1/6・1/3)	117
第77図	石室出土遺物実測図(4)(縮尺1/3)	118
第78図	石室出土遺物実測図(5)(縮尺1/2)	119
第79図	SK 1測量図(縮尺1/40)	120
第80図	SK 2測量図・出土遺物実測図(縮尺1/20・1/4)	121

写真図版目次

卷頭図版　客谷古墳群B地区

- 卷頭図版 1 1 金縫（南より） 2 1号墳（南西より）
2 1 2号墳全景（南西より） 2 2号墳近景（南より）
3 1 子持ち勾玉（1号墳周溝出土品）

第2章 朝美澤遺跡1次調査地

A地区

- 図版1. 1 A地区調査開始状況①（東より） 2 A地区調査開始状況②（手前：環状線調査地東より）
図版2. 1 A地区全景（西より） 2 A地区SB1（北東より）
図版3. 1 A地区SD2（北より） 2 A地区SD3（南より）

B地区

- 図版4. 1 B地区全景調査前遠景（西より） 2 B地区調査前近景（西より）
図版5. 1 B地区完掘1（南より） 2 B地区完掘2（東より）
図版6. 1 SK4①（北より） 2 SK4②（北より）
図版7. 1 壺棺墓群検出状況①（東より） 2 壺棺墓群検出状況②（北より）
図版8. 1 SK1①（南より） 2 SK1②（東より）
図版9. 1 SK2①（東より） 2 SK2（壺棺）②（南東より）
図版10. 1 SK3①（北東より） 2 SK3②（南より）
図版11. 1 SK3③（北より） 2 SK3④（南東より）
図版12. 1 SB1（東より） 2 SB2（南東より）

出土遺物

- 図版13. 1 A地区SB1出土遺物
図版14. 1 A地区包含層出土遺物
図版15. 1 B地区SK1出土遺物(54・56) SK3出土遺物(59・60)
図版16. 1 B地区SK4出土遺物(41・43・46・48) SK5出土遺物(61・62) 試掘調査出土品(87・94)

第3章 客谷古墳群B地区

- 図版17. 1 調査地遠景（南より） 2 調査地近景（南より）

1号墳

- 図版18. 1 1号墳調査前（南西より） 2 1号墳トレンチ（東より）

図版19. 1 1号墳石室検出土状況①(南西より) 2 1号墳石室検出土状況②(北東より)

図版20. 1 1号墳羨道遺物出土状況①(北東より) 2 1号墳羨道遺物出土状況②(南東より)

図版21. 1 1号墳周溝①(北西より) 2 1号墳周溝②(南より)

図版22. 1 1号墳玄室①(南西より) 2 1号墳玄室②(南西より)

図版23. 1 1号墳完掘①(南西より) 2 1号墳完掘②(南西より)

2号墳

図版24. 1 2号墳調査前(南より) 2 2号墳トレンチ(南より)

図版25. 1 2号墳A石室検出状況(南西より) 2 2号墳B石室検出状況(西より)

図版26. 1 A石室羨道①(南より) 2 A石室羨道②(東より)

図版27. 1 A石室玄室遺物出土状況①(南より) 2 A石室玄室遺物出土状況②(北より)

図版28. 1 A石室完掘①(南より) 2 A石室完掘②(南東より)

図版29. 1 B石室櫛床①(南より) 2 B石室櫛床②(南より)

図版30. 1 B石室奥壁(南より) 2 B石室遺物出土状況①(南より)

図版31. 1 B石室遺物出土状況②(東より) 2 B石室遺物出土状況③(南より)

図版32. 1 B石室完掘①(南より) 2 B石室完掘②(東より)

図版33. 1 A・B石室①(南より) 2 A・B石室②(東より)

図版34. 1 SK 1①(北西より) 2 SK 1②(北東より)

図版35. 1 SK 2①(南より) 2 SK 2②(東より)

図版36. 1 SK 3①(東より) 2 SK 3②(南より)

図版37. 1 B石室・SX 1・SX 2(南東より) 2 B石室・SX 1(東より)

図版38. 1 SX 1遺物出土状況①(南より) 2 SX 1遺物出土状況②(西より)

図版39. 1 SX 1遺物出土状況③(南より) 2 SX 1掘り方(南より)

図版40. 1 B石室・SX 1・SX 2(南東より) 2 SX 2検出状況(南より)

図版41. 1 SX 2遺物出土状況①(西より) 2 SX 2遺物出土状況②(東より)

図版42. 1 SX 2完掘①(北より) 2 SX 2完掘②(東より)

図版43. 1 2号墳全景①(南西より) 2 1・2号墳全景(南より)

図版44. 1 WT 2(東より) 2 WT 3(東より)

図版45. 1 西側斜面(東より) 2 ET 7(西より)

出土遺物

図版46. 1 1号墳玄室出土遺物(1・3・6・7) 羨道出土遺物①(85)

図版47. 1 1号墳羨道出土遺物②(83・84) 周溝出土遺物(87・93・95・96) 出土地点不明(99)

- 図版48. 1 1号墳玄室出土遺物・鉄器
- 図版49. 1 1号墳玄室出土遺物・装飾具 (19~82) 周溝出土遺物・子持ち勾玉 (97)
- 図版50. 1 2号墳A石室玄室出土遺物
- 図版51. 1 2号墳B石室玄室出土遺物
- 図版52. 1 S X 1 出土遺物
- 図版53. 1 S X 2 出土遺物
- 図版54. 1 S X 2 出土遺物 (144) 2号墳出土遺物 (137) 調査地内出土遺物 (147・154~156・163~168)

第4章 朝日谷1号墳

- 図版55. 1 調査地東斜面①(北より) 2 調査地東斜面②(東より)
- 図版56. 1 石室検出状況①(北東より) 2 石室検出状況②(南東より)
- 図版57. 1 遺物出土状況①(南西より) 2 遺物出土状況②(南東より)
- 図版58. 1 人骨出土状況(北東より) 2 直刀出土状況(南西より)
- 図版59. 1 棺台①(南西より) 2 棺台②(北西より)
- 図版60. 1 玄門附近の遺物出土状況①(南西より) 2 玄門附近の遺物出土状況②(北東より)
- 図版61. 1 碓床検出状況①(北東より) 2 碓床検出状況②(北東より)
- 図版62. 1 碓床上の出土遺物①(北東より) 2 碓床上の出土遺物②(南西より)
- 図版63. 1 奥壁(南西より) 2 左側壁(南東より)
- 図版64. 1 奥壁・左側壁(南より) 2 奥壁・右側壁(西より)
- 図版65. 1 墓壙①(南より) 2 墓壙②(北東より)
- 図版66. 1 石室出土遺物①
- 図版67. 1 石室出土遺物②
- 図版68. 1 石室出土遺物③・装飾具
- 図版69. 1 石室出土遺物・鉄製品

巻末図版 朝日谷1号墳

- 巻末図版1 1 遺物出土状況①(南西より) 2 遺物出土状況②(北東より)
- 巻末図版2 1 渓道・墓道①(南西より) 2 渓道・墓道②(北東より)

表 目 次

第1章 はじめに

表1 調査地一覧

第2章 朝美澤遺跡1次調査地

表2 A地区S B 1出土遺物観察表（土製品）

表3 A地区S D 1出土遺物観察表（石製品）

表4 A地区S D 2出土遺物観察表（土製品・石製品）

表5 A地区S D 3出土遺物観察表（土製品）

表6 A地区包含層出土遺物観察表（土製品・石製品）

表7 B地区S K 4出土遺物観察表（土製品・石製品）

表8 B地区S K 1出土遺物観察表（土製品）

表9 B地区S K 2出土遺物観察表（土製品）

表10 B地区S K 3出土遺物観察表（土製品）

表11 B地区S K 5出土遺物観察表（土製品）

表12 B地区用水池出土遺物観察表（土製品・石製品）

表13 B地区柱穴・褐色土出土遺物観察表（土製品）

表14 試掘調査出土遺物観察表（土製品・石製品）

第3章 客谷古墳群B地区

表15 1号墳玄室出土遺物観察表（土製品・鉄製品・装飾具）

表16 1号墳羨道出土遺物観察表（土製品）

表17 1号墳周溝・地点不明遺物観察表（土製品・石製品）

表18 2号墳A石室出土遺物観察表（土製品・石製品・鉄製品・装飾具）

表19 2号墳B石室出土遺物観察表（土製品・装飾具）

表20 2号墳出土遺物観察表（土製品）

表21 S X 1出土遺物観察表（土製品）

表22 S X 2出土遺物観察表（土製品）

表23 WT 9出土遺物観察表（装飾具）

表24 調査地内出土遺物観察表（土製品・石製品）

第4章 朝日谷1号墳

表25 石室出土遺物観察表（土製品・鉄製品・装飾具）

表26 S K 2出土遺物観察表（土製品）

第1章 はじめに

1. 調査に至る経緯

広域な面をもつ大峰ヶ台丘陵は、松山市が指定する「32・33 大峰ヶ台弥生遺跡・大峰ヶ台古墳群」にあたる。現在までに、当丘陵における発掘調査の例は少ない。しかし、昭和49年、頂上部付近にて弥生時代中期の高地性集落を検出した他（松山市教育委員会 1974）、丘陵社群中では古墳時代中期から後期の岩子山古墳（人物、動物埴輪出土 1975 名木二六雄）や、御産所古墳群11号墳（検体数7体までの人の骨が確認されている 1976 森 光晴）の調査例があり、多くの遺跡が存在していることが明らかとなっている。

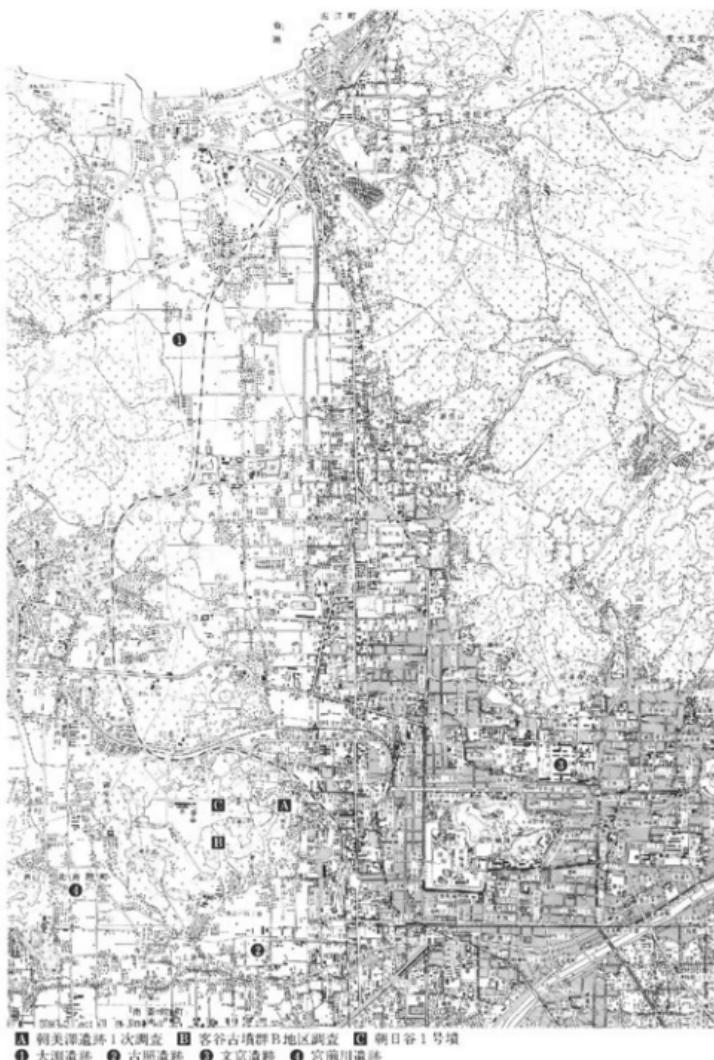
近年、大峰ヶ台丘陵の主稜を拠点とした松山市総合公園の整備がなされることとなり、これに基づいて松山市教育委員会は、随時分布調査を行った。分布調査の結果より、関係機関（松山市公頃課、道路課、市教委）は遺跡の取り扱いについて討議し、遺跡が消滅する地域に対し本格調査を行うこととした。

なお、昭和63年度～平成3年9月30日の間は松山市教育委員会文化教育課・松山市埋蔵文化財センターが主体となり野外調査及び室内調査を行い、平成3年10月1日以降は財團法人松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センターが調査主体となり室内調査及び報告書刊行事業を実施した。

2. 刊行組織〔平成6年3月1日現在〕

松山市教育委員会 教育長	池田 尚郷
生涯教育部 部長	渡辺 和彦
次長	三好 優彦
文化教育課 課長	松平 泰定
(財) 松山市生涯学習振興財團 理事長	田中 誠一
事務局長	渡辺 和彦
事務次長	一色 正士
埋蔵文化財センター 所長	河口 雄三
次長	田所 延行
調査係長	田城 武志
調査主任	栗田 正芳（文化教育課職員）
担当	梅木 謙一
	松村 淳

はじめに



第1図 松山平野北部の主遺跡分布図 ($S = 1 : 50,000$)

3. 環 境 (第1・2回)

松山平野には、南部に天山、東山、星ノ岡の三山と、中央北寄りに勝山、西に大峰ヶ台の各独立丘陵が存在している。

大峰ヶ台丘陵は松山平野西部に聳え、和泉砂岩と領家花崗岩を母岩とする標高133mの独立丘陵である。丘陵は主陵と枝状丘陵からなり、南西方向に大きく拡がり、西端部に至っては海岸線3kmにまで達している。海拔133mを測る頂上部には座標軸が設置され、これより眺める視界は松山平野随一の景観が望める。東方には市街地中央にある独立丘陵勝山が聳える。

広域な面積をもつ大峰ヶ台丘陵は、埋蔵文化財の包蔵地として古くから知られ、昭和49年の丘陵部頂上付近の調査では、弥生時代中期の高地性集落が発見されている。昭和57年度の丘陵支群中の調査では、粘土による木棺直葬の岩子山古墳、重葬が提起された御産所11号墳、埴輪出土の斎院茶臼山古墳など、古墳時代前期から後期に至る古墳が検出されている。

一方、丘陵を含めた周辺地域は都市化が進み、これに呼応して調査も増加している。朝美澤遺跡からは弥生時代前期土器が出土し、南江戸桑田遺跡からは江戸期の墳墓が検出されている。これらの遺跡は大峰ヶ台丘陵裾部を外周する宮前川の流域に位置しており、弥生時代から連続と続く古代社会の一端が窺える地域である。

丘陵の頂上は台地状を示し、伊予温古錄に「澤村の内南江戸村八幡社の北、山上に在り」とみられ、中世城郭花見山城の居城館跡も推定されている。丘陵中腹部には東から西へと寛永期創建の宝塔寺、八幡神社、国宝大宝寺等が鎮守の森をつくっている。昭和に至り丘陵部は、陸軍の要塞地に利用され砲陣地の残骸もみられる。

[参考文献]

- 松山市教育委員会 1974 「古照遺跡」
- 栗田 茂敏 1989 「大峰ヶ台遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報II』松山市教育委員会
- 松村淳、栗田茂敏 1989 「客谷B地区古墳群」『松山市埋蔵文化財調査年報II』松山市教育委員会
- 名本二六雄 1975 「岩子山古墳」松山市教育委員会
- 西尾 幸則 1983 「斎院茶臼山古墳」松山市教育委員会
- 森 光信 1976 「御産所11号墳」松山市教育委員会
- 上田 真 1991 「南江戸闇日遺跡」松山市教育委員会
- 宮崎 泰好 1989 「北寺院地内遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報II』松山市教育委員会
- 栗松佳久、丹下道一 1989 「南江戸桑田遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報II』松山市教育委員会

表1 調査地一覧

遺跡名	所 在	面積	期 間
朝美澤(1次)	朝美2丁目4-30	500m ²	昭和63年8月17日～同年10月25日
客谷古墳群B地区	南江戸6丁目1586他	900m ²	昭和63年2月22日～同年8月17日
朝日谷1号墳	朝日ヶ丘1丁目(山林)	1,300m ²	平成元年4月1日～同年8月1日

はじめに



第2図 大峰ヶ台丘陵の遺跡分布図 (S = 1 : 25,000)

第2章

朝美澤遺跡

—1次調査地—



アサミ サオ
第2章 朝美澤遺跡1次調査地

1. 調査の経過

(1) 調査の経緯

朝美澤道路は、人峰ヶ台丘陵の東麓部の一画に位置する。調査は、松山西部環状線（本町～宝塔寺線）建設に伴う緊急調査である。昭和63年、松山市道路建設課及び住宅課より当該地における遺跡確認の申請がなされ、松山市教育委員会は昭和63（1988）年8月、試掘調査による確認を行った。その結果、弥生時代から中世に至る遺物包含層が検出され、遺跡の存在が確認された。この状況を踏まえ、関係機関は協議の末、昭和63年8月より2ヶ月間の調査期間をもうけ本格調査を実施することとなった。調査地は、西部環状線用地によって東側（B地区）と西側（A地区）に二分される。なお、環状線用地（幅30m）は、財愛媛県埋蔵文化財調査センターが調査を実施している。

(2) 調査組織

調査地 松山市朝美2丁目4-30

遺跡名 朝美澤遺跡1次調査

調査期間 昭和63年8月17日～同年10月25日

調査面積 500 m²

調査協力 松山市道路建設課・同住宅課

調査担当 松村 淳

調査作業員 山本健一（現、財松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター）

福岡宏志、近藤 茂、松友利夫、松岡欣弘、松木正義、森 隆、藤家厚美

[備考] 本調査は、既に『松山市埋蔵文化財調査年報II』（1989 松山市教育委員会）にて「澤遺跡」として概要報告している。本報告に際し、遺跡名を「澤」から「朝美澤」に変更した他、内容にも一部変更した点がある。

(3) 歴史的環境

大峰ヶ台丘陵は標高133mで、埋蔵文化財包蔵地として知られている土地である。昭和40年後半における頂上付近の調査では、弥生時代中期の高地性集落が発見されている。丘陵裾部を外周する宮前川流域の朝美1・2丁目遺跡では弥生時代後期の「重口縁壺」が出土し、また宮前川渡設に伴い弥生時代後期後半の高床式建造物のねずみ返し（松山市 1986年）が発見されている土地である。

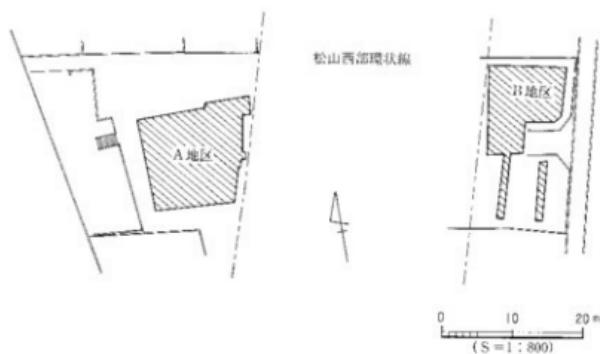
当地域は総合公園整備事業や西部環状線の建設などにあいまって、景観も大きく変化のきざしを見せている。それに呼応して発掘調査も増加し、大峰ヶ台丘陵を拠点にした周囲1km以内を概観しても、弥生時代前期土器出土の朝美澤（さお）遺跡2次調査地（梅木・宮内 1992）、弥生時代後期の土器が多く出土した辻遺跡（栗田 茂敏 1989）、古墳時代前期土器出土の古照G遺跡（古照遺跡3次、松村・宮崎 1988）、古墳時代後期の群集墳である大峰ヶ台客谷古墳群（宮崎 泰好 1989）、室町時代から江戸時代に至る集落跡である北斎院地内遺跡（宮崎 泰好 1989）、江戸時代の群集墓である南江戸桑田遺跡（重松・丹下 1989）など多くの遺跡が確認されている。さらには古黒遺跡もこの範囲内に含まれる。東面する丘陵の山麓部には寛永期創建とされる宝塔寺が現存し、今回の調査地はその眼下に当たっている。

当地域は、澤（さお）、辻等ホノギの残る地域性から、山の峰に近く清水の豊富さが窺えるが、氾濫被害の多発地域であったかも知れない。

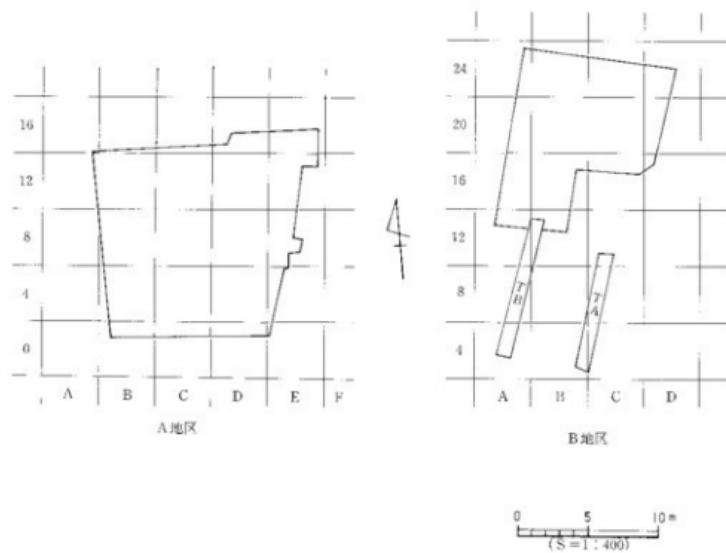
【文 献】

- 松山市史料集編集委員会 1986 「松山市史料集第2巻考古編II」
- 梅木 謙一・宮内 搶一編 1992 「朝美澤遺跡、辻町遺跡」 馴松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター
- 栗田 茂敏 1989 「大峰ヶ台遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報II』松山市教育委員会
- 松村 淳・宮崎 泰好 1989 「古照G遺跡（3次）」『松山市埋蔵文化財調査年報II』松山市教育委員会
- 宮崎 泰好 1989 「客谷B地区古墳群」『松山市埋蔵文化財調査年報II』松山市教育委員会
- 重松 佳久・丹下 道一 1989 「南江戸桑田遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報II』松山市教育委員会

調査の経過



第3図 調査区位置図



第4図 区割図

2. 層位

本調査地は前述のように、西部環状線によって東西に二区分される。調査に際しては西部環状線を基準にし、山手にあたる西側をA地区、下手の東側をB地区とし調査を行った。A・B地区はとともに住宅を崩した跡地であり荒廃が著しい土地であった（第3図）。

〔1〕 A地区

A地区的区割り（第4図）は、西壁を軸にして任意に一辺4mの方形グリッドを設定し、南北方向に0から順次4・8・12の数字を付し、東西方向にはA・B・Cのローマ字を付記した。従って区称はA4区、B8区、C12区というようになる。

A地区は、全体に西から東に向かって傾斜を示すが、東側では南がやや高地となる。北壁の層位（第5図）は、I層表土、II層褐色砂質土（粗礫混り）、III層暗褐色土、IV層地山である。現状では地表下50cmまでが住宅の基礎工事などで擾乱されていた。II層褐色砂質土とIII層暗褐色土には弥生時代から中世の遺物がみられた。

造構は、西城ではII層褐色砂質土、東城ではIII層暗褐色土にて検出されたが、本来はII層中及びII層上面から掘り込まれたものと思われる。造構埋土は、褐色土が主流をなしている。

なお、A地区的廃土置場は西側斜面と北側に隣接する住宅の手前までを定めた。

〔2〕 B地区

B地区的区割りは、A地区と同形式をとることとした。B地区は北西部を頂点にして、漸次東南に傾斜している。B地区（第4図）は、戦後の廃材処理により造成され、工事は地山に及んでいる。また、西壁部（第5図）では、I層下部に茶褐色土が堆積している。茶褐色土は上部の造成による汚染が進みやや黒色を帯びているものとなっている。なお、B地区的廃土置場は、調査地内の南部分を用いた。

よって、本遺跡の基本層位は、I層表土、II・III層は自然堆積土（包含層）、IV層は地山となる。

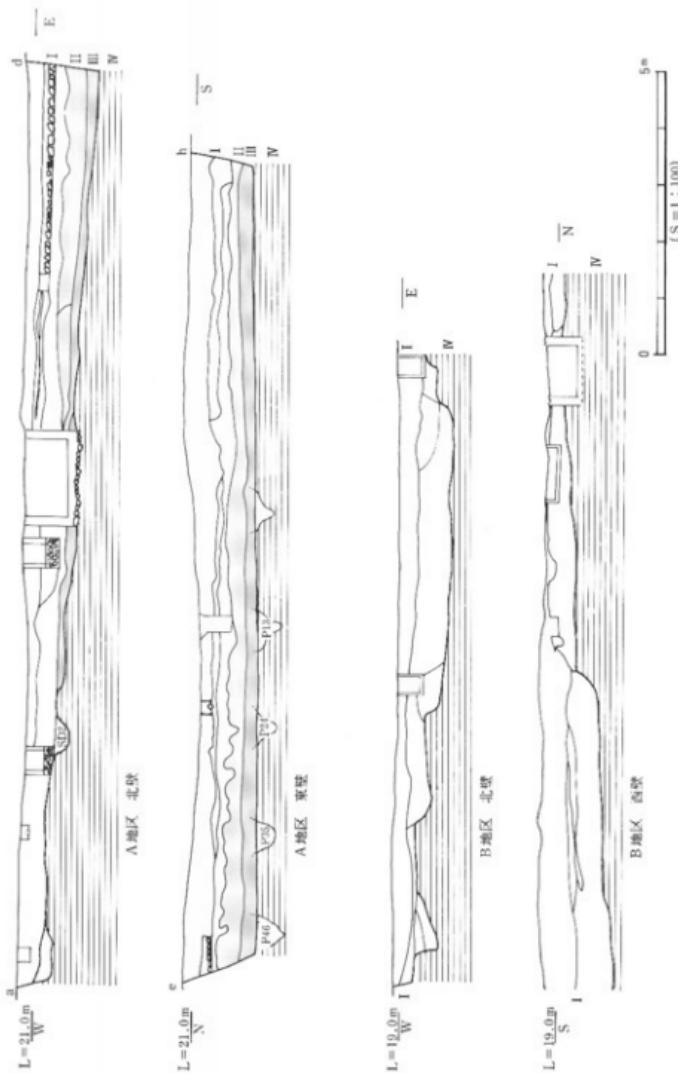
3. 遺構と遺物

〔1〕 A地区

A地区で検出された遺構は、11世紀代の据立建物1棟（S B 1）、溝3条（S D 1～3）櫛列2条（S A 1～2）、柱穴38基である（第6図）。

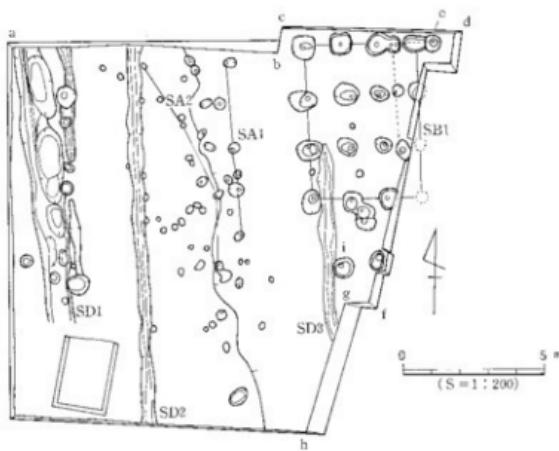
S B 1は調査区北東隅（D 8～D16、E 8～E16）で検出され、建て替えか、別棟かの柱穴が共伴する建物である。溝3条はともに南流を示す。中央部検出のS D 2は3条の内最長で、区画の性格が想定されるものである。S D 3はS B 1内にみられ、排水路と思われる溝である。櫛列2条は、C区に点在する多数の柱穴中、規模や配列が同じものを検討し想定したものである。

道標と道路



第5図 十層図

朝美深遺跡 1 次調査地



第6図 A地区造構配置図

1) 掘立柱建物

S B 1 (第7図、図版2)

S B 1 は、総柱建物で柱穴14基を検出したが全様を検出するには至っていない。桁行、梁行ともに3間分を検出し、東部分が未確認となる。建物は南北棟で桁行柱間1.8m、梁行柱間1.3mを測る。柱の堀り方は径80cm前後で、掘り方中段位にて径20~25cmの柱痕を検出した。東部の柱穴の一部には根巻き石が検出された。

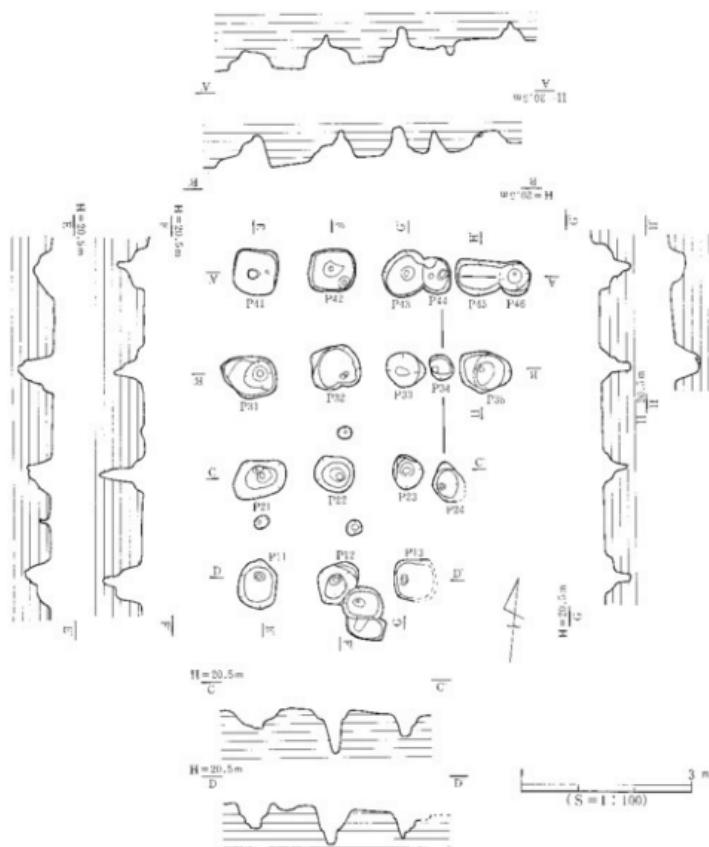
なお、S B 1 の内部には、S B 1 と同方位をとり、南北に配置する柱穴3基と、この柱穴列より東に方位をとる1基の柱穴が検出された。この構造物は、桁行が2間(1.7m, 2.0m)で、梁行柱間は1間分(S B 1 と同計の1.3m)が検出されている。検出位置などから、建て替えによる柱穴群と考えられるが、S B 1 に対して規模も小さく定かでない。

この他、S B 1 の西側には柵列状の小穴や、南北に走る溝S D 2 がみられる(図6)。

出土遺物(第8図、図版13)

S B 1 の遺物は須恵器5点、土師器5点、丸瓦1点が柱穴より出土している。

1~5は須恵器。1は壺蓋、2は広口壺、3~5は高环である。1は壺身・壺蓋いずれにもとれるが蓋と解釈したもので、天井部は粗雑に回転ヘラ切りがされる。2は肥厚した口縁端部は面どりする。外面には部分的に自然釉がみられる壺の口縁部である。3の高部は壺底部が水平に延び、壺部の立ち上がりは若干角張るものである。内外面に自然釉がみられ光沢を呈する。4は口縁部は緩やかに外反する。5は脚柱部が僅かに残る高壺で、内面には巻上



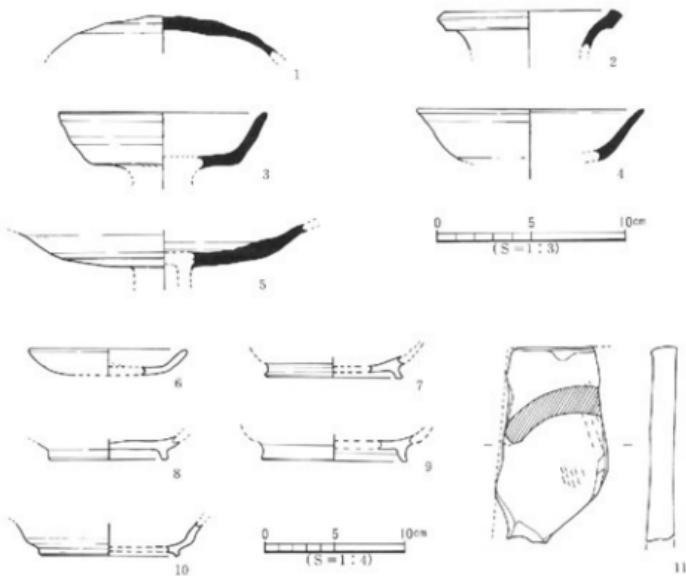
第7図 A地区SB1測量図

け痕がみられ、外面下位にはナデによる鈍い稜がつくられる。

6～10は土師器。6は小皿、7～10は椀の底部片である。6の底面はナデられ、立ち上がり内外面はナデを施す。7～10はいずれも高台付椀である。7には赤色顔料（？）の残存がみられる。8は高台部が直立気味、9は「ハ」の字状に広がる。10は环部の立ち上がり下位が外方に張り、屈曲がみられる。

11は円のカーブから丸瓦が考えられる。表面には繩目叩き後ナデを施し、内面には細目の布痕が全体にみられる。桶巻き技法の瓦である。

以上の出土物11点が据立柱建物SB1の出土遺物である。建物の時期は、高台付椀より11世紀代以降のものと考える。



第8図 A地区SB1出土遺物実測図

2) 溝

S D 1 (第6図)

S D 1 は調査区西端で検出した。深さは14cmと浅く、溝底は起伏が多くみられ、東外部まで及んでいる。東部検出の円形状の凹みは柱穴とは判断し難い。S D 1 は自然流路と推定している。遺構内からは使いこまれた粘板岩の砥石（第9図）とキセルの二点が出土している。

出土遺物（第9図12）

12は粘板岩質の砥石である。携帯用と思える小形で、半截された側面に使用痕が認められる。図示されない銅製のキセル金具は長さ7.5cmで、先端部の雁首と接合部材は欠如する。

以上2点がS D 1 の出土である。出土物から推定される溝の年代は、江戸時代が推定される。

S D 2 (第6図)

S D 2 は検出長13m、深さ30cmで、南と北に延長する溝である。比高差は5cmが測られ、わずかに南流がみられる。S D 2 は、後述する柵列（S A 2）との位置的関係から判断し、S B 1 に伴う溝であることが考えられる。S D 2 の時期は、S B 1 に伴うと考えると11世紀代以降のものと推定される。

出土遺物（第9図13・14）

S D 2 では白磁碗、砥石、擂鉢の細片が出土した。13は白磁の高台碗で器高4.3cm、口径8.7cmが計られる。骨付けを残し、釉を施す。14は使いこまれた砂岩質の砥石で、最も薄い中心部で折損する。重さは302gである。擂鉢は小片で図示されないが、S字状の口縁端部をもち、U字状の注口部分がわずかにみられる小片で、備前焼である。

S D 3

S D 3 (第6図) は、S B 1 と接する位置にあり、南流する溝である。検出長は3.5m、幅20~30cmを計る。出土遺物は混入が考えられるもので、須恵器环と弥生土器の底部が作出している。溝の性格は位置的にみて、S B 1 に伴う排水路が想定される。

出土遺物（第9図15・16）

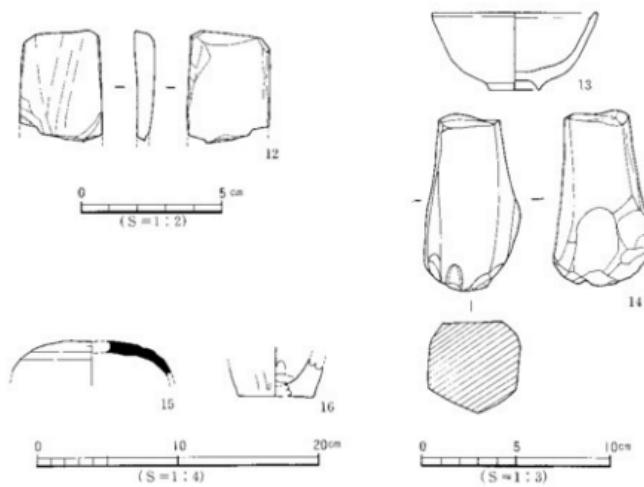
S D 3 からは15の須恵器环、16の弥生土器底部が出土している。いずれも小片である。

3) 柵列

柵列は2条（第6図）を想定した。

S A 1 S B 1 に並行し、柱穴3基からなる。検出長は6mを測る。

S A 2 柱穴4基で、5~5.5mを測るものである。



第9図 A地区SD1・2・3出土遺物実測図

4) A地区包含層(II・III層)出土遺物(第10・11図、図版14)

17~40はA地区のII及びIII層出土の遺物である。

17~22は弥生土器、23~27・29は土師器、28は瓦器、30は石製品、31~40は須恵器である。これらの遺物は、A区の北東部D12・E12区及びE16区の各グリットにて多く出土した(層は確定できず)。

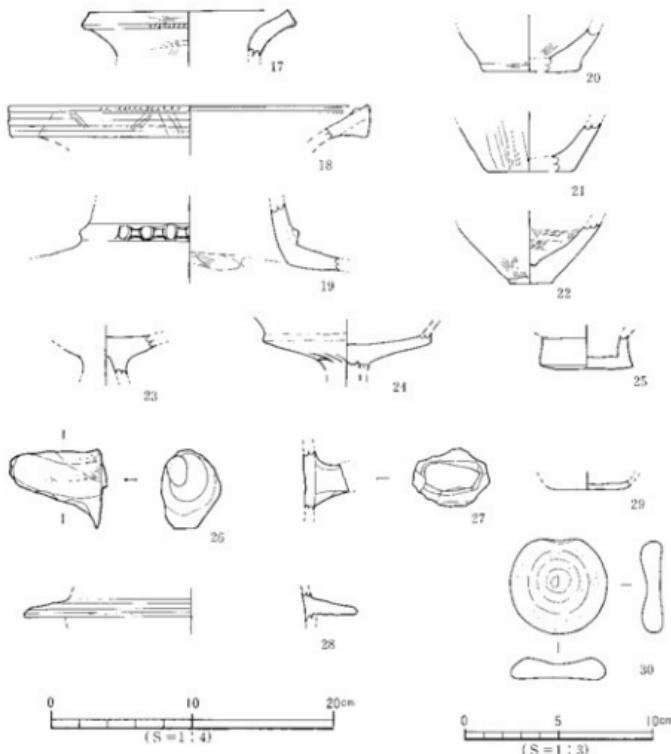
17は口縁下端部に刻目を施す壺形土器口縁部片である。18は口縁上端部に刻目を施し、端面には山形文が施される。口縁内面には断面半円形の紐状突帯を巡らす。19は壺形土器片で、頸部突帯には押圧文を施す。胎土には砂粒が多く含まれる。20・21は平底の壺形土器底部である。22は鉢形土器と思われる底部片で、内部には工具による成形痕が看取される。

23・24は上師器高環の底部で、円筒の脚柱部は中空が示される。23は黄橙色、24は赤色を示し、24の基部外側には渦巻状の工具痕が残存し、上部は刷毛目調整される。23の外側にも刷毛目調整が看取れる。25は台形を呈す内面中空の高台部片である。底部は回転ヘラ切りされる。内面には指頭痕が看取される。26・27は瓶の把手で、26は黄褐色、27は赤色を呈す。26は指頭調整され、27はわずかに刷毛目調整が施される。28は瓦質の羽釜鋸部である。

遺構と遺物

29の上部器底は糸切り底である。素地から黒色土器と思われる。二次焼成による黒色の色調とは思えないものである。30は円盤状の石製品で、一方に抉りがなされる。径5.1cm、厚さ1.1cmで、中央部は凹み、0.7cmの厚さが測られる。

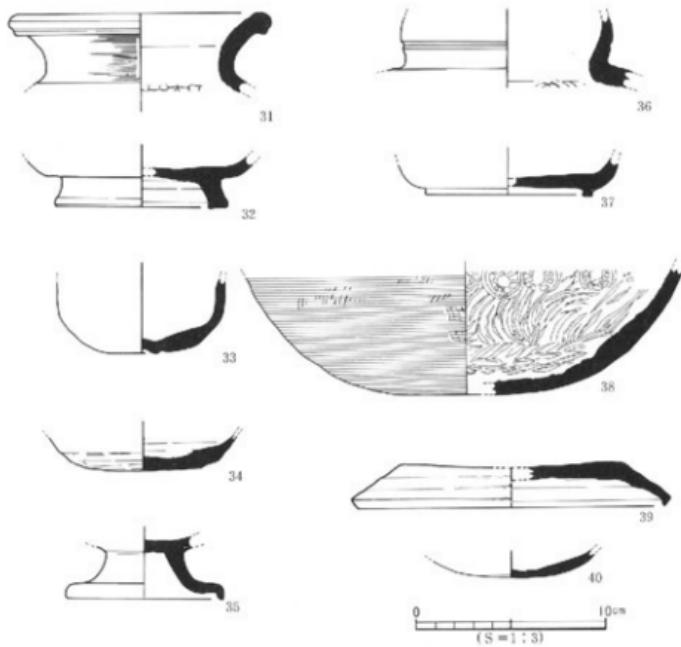
31は口縁端面に凹線1条が看取れる広口壺である。32は壺の高台部で、高台は内傾し端部は若干膨らみが看取れる。33は楕円形の环で、口縁部は外反しながら立ち上がる。34は底部へラ切りの坏である。調査は雜で、内面は褐色、外面は暗褐色を示す。35は高环の脚部で、「ハ」の字状に聞く脚部は下位で水平に広がり、裸端部は直角に折り曲げられる。



第10図 A地区包含層出土遺物実測図(1)

朝美澤遺跡1次調査地

36は弧状を呈する口縁部をもつ壺片で、頸部には1条の凹線を巡らす。胴部内面には当て具痕が看取れる。37は壺の高台片で、端部は内傾し若干膨らむ。38は壺底部で丸底を呈す。球形の胸部外面には搔きめを施す。内面には「車輪状」當て具痕がみられる。39は壺蓋で、天井部の中心部は低く、口縁端面は内傾気味に直立する。天井部はヘラ削りがみられる。40は細片で、黒色を呈する壺である。

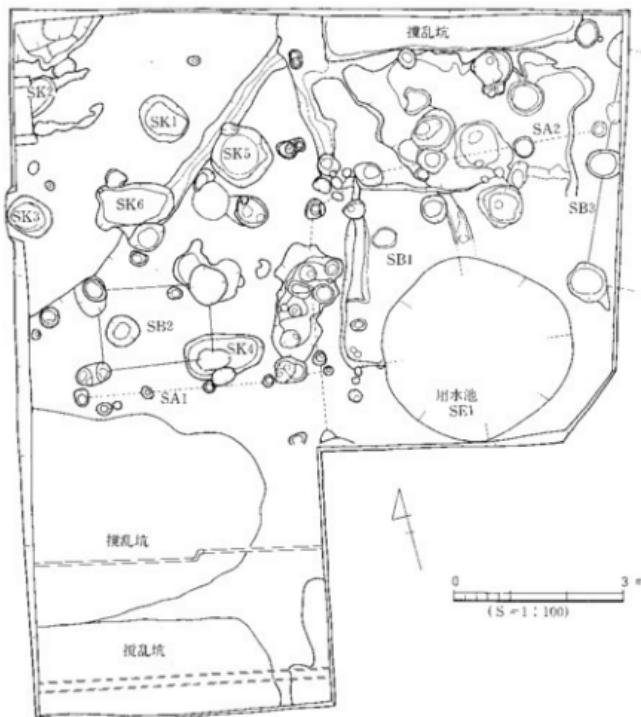


第11図 A地区包含層出土遺物実測図（2）

〔2〕B地区

B地区は、A地区より東に約30mの地点で標高が約2m下る位置にある。調査地は段状を呈し、上段部は（北西部を頂点）一段高く台状となり、下段部は東から南に向かって、扇状に緩傾斜地となる。

B地区では、弥生時代から近世に至る遺構が検出され（時期確定に至らない遺構もある）ている。弥生時代の遺構は、中期の土壙1基（SK4、第14図）、後期の壺棺墓3基（SK1～3、第13図）と、壺棺墓に接し検出された遺物をもたない土壙1基（SK6）がある。古墳時代の遺構は6世紀代に比定される土壙（SK5）と、同時期と思われる竪穴式住居址1棟（SB1）がある。その他、時期確定に至らない遺構には、掘立柱建物2棟（SB2・3、第12図）、柵列2条（SA1・2）、柱穴30基があり、さらに現代の用水池も検出されている。



第12図 B地区遺構配置図

1) 弥生時代中期

SK 4 (第13・14図)

SK 4は、調査地の南側中央（下段部、B20区）にて検出された。なお、SK 4の上部でSB 2を検出している。平面は隅丸の長方形を示し、東西1.4m、南北0.7m、深さ15cmが測られる。基底部直上には厚さ5cmの貼り床状の土壤が検出されている。この土壤部分は焼土、焼土を含む暗褐色土、灰褐色土で形成されている。なお、床面には焼土が検出されている。遺物は弥生時代中期の縁形土器、壺形土器の破片の他、折損した石錐1点（材質：サヌカイト）、作業石2点（材質：花崗岩）が出土している。土器は土壌内やや北寄りに、石錐は基底部中央の床面上に、作業石2点は東部で東西方向に並んで出土している。

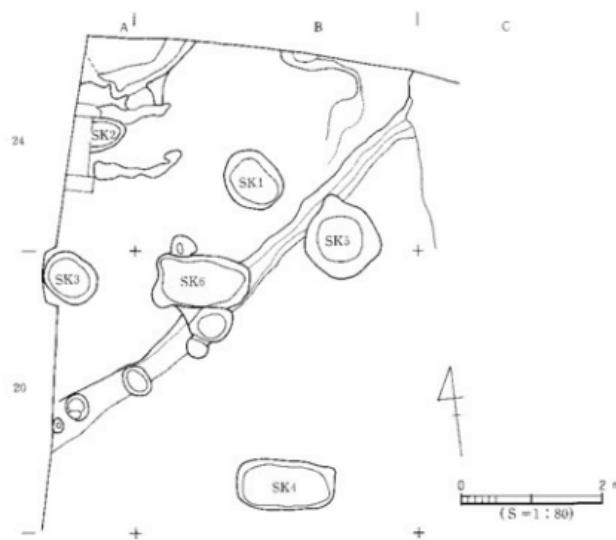
出土遺物（41～53）

41～49は弥生時代中期の土器である。50は弥生時代前期の縁形土器である。41の鉢形土器は器高25.5cm、口径24.5cm、底径15.2cmを測る（復元完形品）。口縁端部には2条の沈線文がみられる。口縁端部内面にも1条の沈線文がみられる。外面上位は刷毛目調整を施し、下位はヘラ磨きされる。内面上位は横ナデ、中位から下位はナデ、下位はタテ刷毛目調整を施す。器面全体が黒ずむことから煮沸に使用されたものであろう。42は縁形土器口縁部の小片である。赤褐色を呈し内外面とも刷毛目調整される。43の胴部には粘土の貼り合わせ痕がみとめられる。45は胴張りがみられる縁形土器である。口縁部は直角に近く曲げられる。胴部下位にはヘラ磨きを施す。内面は撫でられ、模の残着がみられる。46は壺形土器の口縁部である。口縁部は下方に垂下し、口縁部端面には不均等に斜格子目文が施される。頸部には2条の沈線文を巡らし、内面はヨコ刷毛目調整が施される。47・48は縁形土器底部である。47は僅かに上げ底をなす。端部は若干張り出す。内面はナデられ、外面には焼成時の黒斑がみとめられる。48は焼成後に穿孔が穿たれる縁形土器である。内外面ともに小さい剥離がみられる。外面はヘラ磨き、内面はナデが看取されるが遺存状況が良くない。49は若干の上げ底を呈する壺形土器である。外面はヘラ削り後、タテ刷毛目調整を施し、内面は指頭成形後刷毛目調整を施している。50は貼付突帯を施し、突帯上面には刻目を施す。

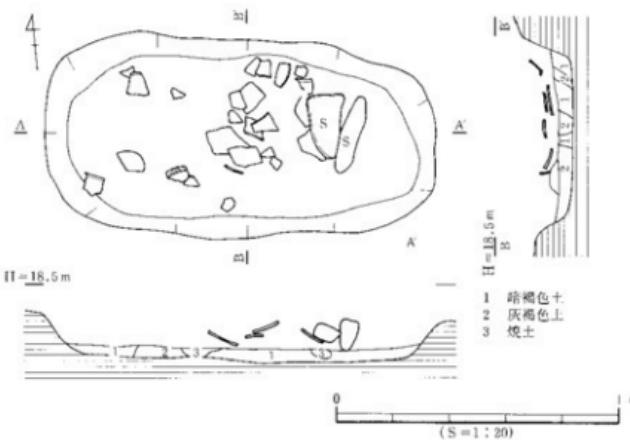
51～53（第15図）はSK 4出土の石製品である。51は材質サヌカイトの石錐である。先端部と背部の両端が欠ける。剥離面は両側縁にみられるが、背面の剥離は少なく扁平部分が残される。鋭利さが欠け、摩耗気味である。重さ2.7gを計る。52は作業台、53は中心部に円形の凹みがみられ石皿が考えられる。52・53はいづれも花崗岩質である。

以上の出土品より、50は流入品とし、SK 4の時期は弥生時代中期のものと比定される。

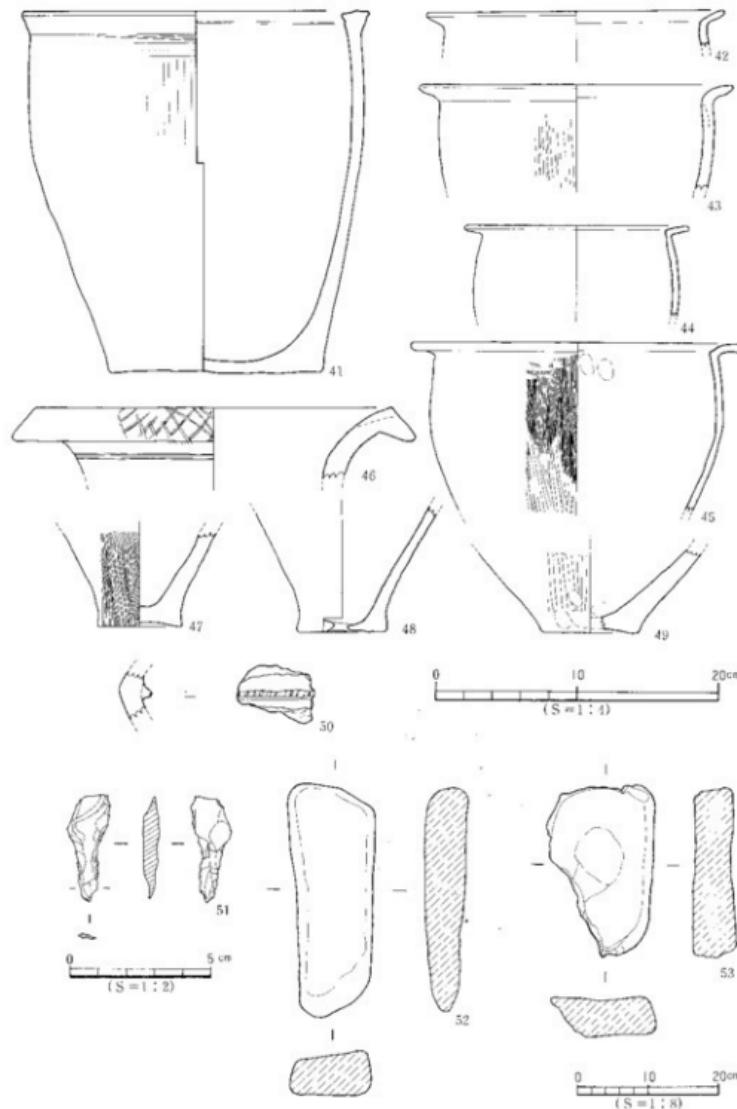
造構と造物



第13図 B地区SK配置図



第14図 B地区SK 4測量図



第15図 B地区SK 4出土遺物実測図

2) 弥生時代後期

SK 1

SK 1 (第16図) は、平面が楕円形であり、長径85cm、短径70cm、深さ30cmを測る。内部からは棺身となる壺形土器と土製勾玉の他、甕形土器の口縁部片が出土している。棺身となる壺形土器は、底部を下にし、斜倒状に据えつけた状況にあった。土壙の基底部直上には流入土とは異質の粘質土がみられた。この土は、壺棺の固定と安定とを配慮したものと考えられるものである。棺内部からは、折損した土製勾玉が1点出土している。

出土遺物 (第16図、図版15)

54は口頭部を欠如する壺形土器体部である。卵形の胴部は大型で、残高は器高61.4cm、胴部最大径50.0cm、底部径11.0cmが測られる。外面下位は刷毛目調整で、中位はナデを施し、上位はヨコ刷毛目調整が施される。内面の肩部と底部は指頭押圧され、その他胴部は刷毛目調整を施したと思われるが、磨滅の為明確さに欠ける。56は棺内部出土の土製勾玉で先端部を欠く。欠損部は円孔部にあたり、円孔の有無は不明である。器表面はヘラ削り後刷毛目調整がみられる。焼成時の黒斑が残る土製品である。55は甕形土器口縁部片で、縦4.5cm、横2.7cmの細片である。復元値から口径14.4cmを測る。蓋部として使用したものであるかは断定できない。口縁端面は面どりし、刷毛目調整を施し、外側はヨコ刷毛目調整が施される。内面には粗い刷毛目調整とヨコナデを施す。

SK 2

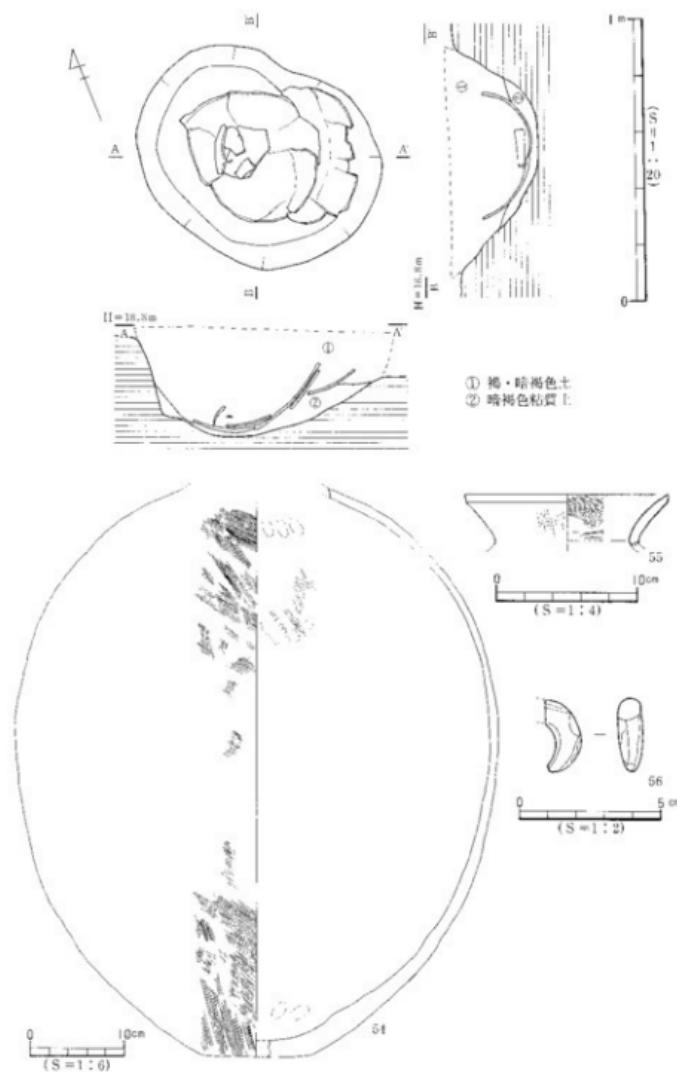
SK 2 (第17図) は、現代のコンクリート製水槽によって破壊され多くを残存しない。従つて土壙の平面形は、円形か梢円形かは想定の域をでない。

残存する土壙の数値は、長径70cm、短径45cm、深さ15cmが測られる。土壙内部からは壺形土器の大型破片が出土している。これらの破片は当初1個体と考えられたが、復元により2個体分の壺形土器であることが判明した。よって、組み合せ式の壺棺であったと考えられる。SK 2には、土壙棺以外の遺物は出土していない。

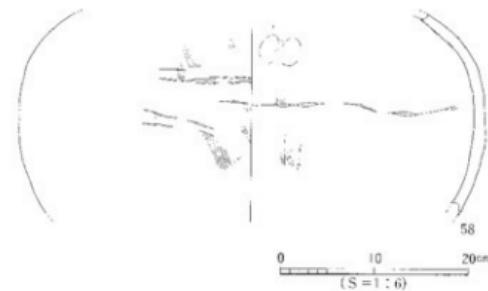
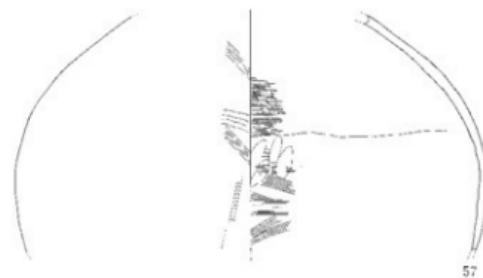
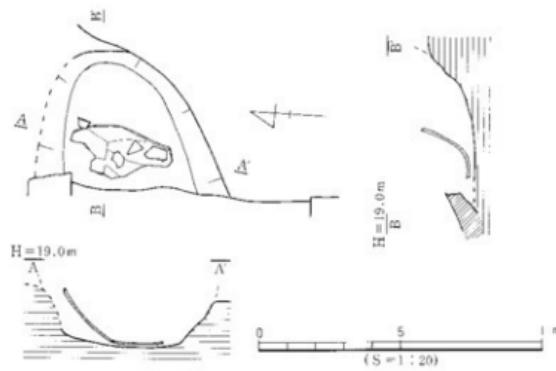
出土遺物 (第17図)

57と58は別個体の胴部片で、胴部の1/2が残存する大型破片である。胴部最大径は57が50.0cm、58がほぼ同径の49.5cmが測られる。57の外面は叩き後刷毛目調整を施す。外面には部分的に顔料と思われるものが残されている。内面にはヨコ刷毛目調整を施す。58の外面は叩き後刷毛目調整で叩き痕が消され、内面はタテ刷毛目調整される。57と58は、幅広の粘土帶を使用しているところに共通点をもつ。

朝美深遺跡 1次調査地



第16図 B地区 SK 1測量図・出土遺物実測図



第17図 B地区 SK 2測量図・出土遺物実測図

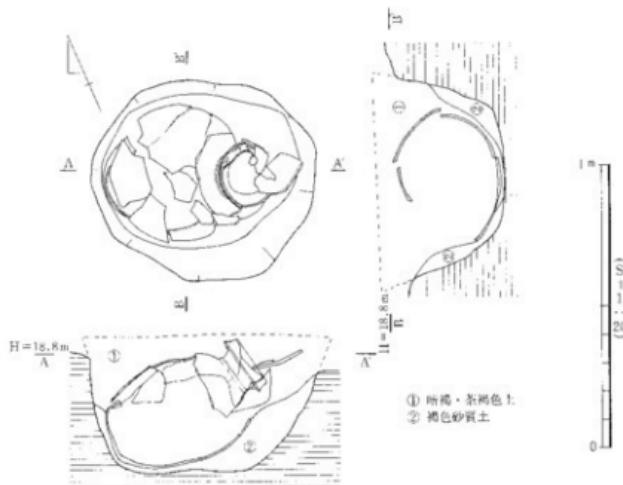
SK 3

SK 3 (第13・18[4]) は、SK 2 の南 2.0 m に位置し、SK 2 の長軸線上に当たっている。3 基の壇枠の内、最も遺存度が良いものである。平面形は円形で、長径 80 cm、短径 70 cm、深さ 45 cm を測る。枠身は傾斜角度を保つため土が詰められている。円形の掘りこみ内には、枠身となる複合口縁壺のほか、胴中位部を欠如する壺形上器の肩部片と底部片が 1 個体分（第20図、同一体と思われる）出土している。枠蓋に使用されたものと考えている。

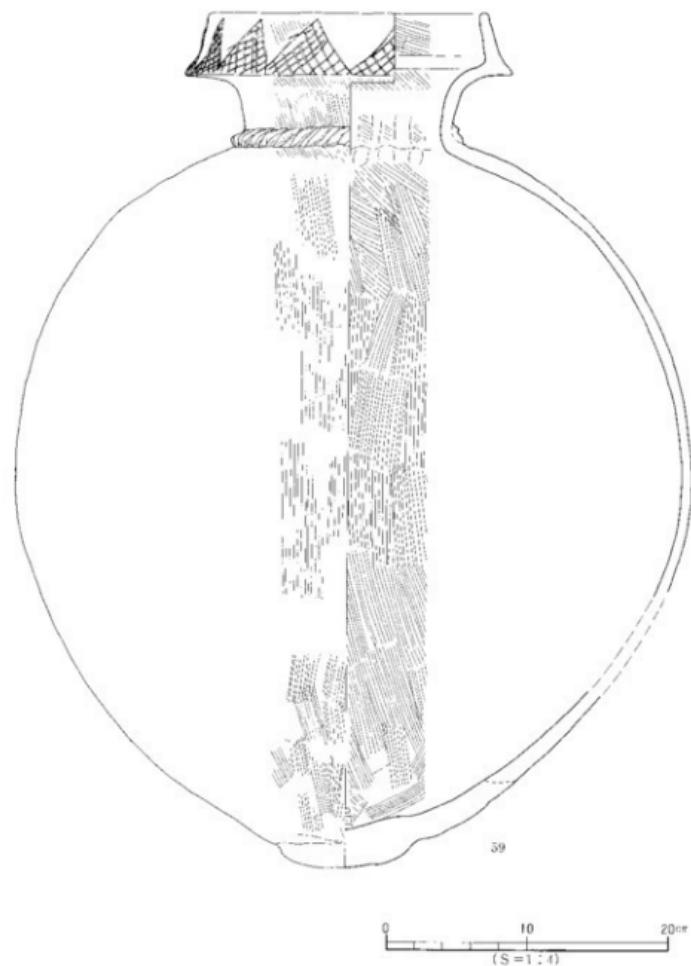
出土遺物 (第19・20図、図版15)

59 は所謂複合口縁壺で、器高 60.5 cm、口径 19.7 cm、胸部最大径 46.5 cm、底部径 9.5 cm が測られる。内傾し立ち上がる口縁部は外面に斜格子目文の充填による山形文を施す。頭部下位には貼付突帯を施し、上面には深く大きい刻目を施す。底部は乳房状に丸く膨らみ、不安定さがみられる。胴部外面はタテ刷毛目調整後磨きがなされ、内面は粗雑な刷毛目調整を縱方向に施す。装飾性に富む壺である。

60 は同一体になるものと思われるものである。当初より口頭部を欠如したものと思われる。底部は僅かに丸みを呈し、胴部外面には刷毛目調整後、ヘラ磨きされる。内面上位は指頭押圧後、刷毛目調整を施し、下位はタテ刷毛目調整がなされる。頭部径 17.2 cm、最大胴径 34.2 cm、底径 8.3 cm を測る。

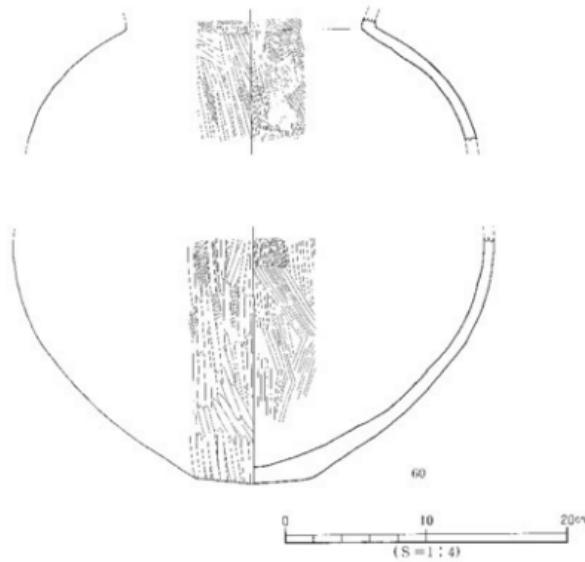


第18図 B地区 SK 3 測量図

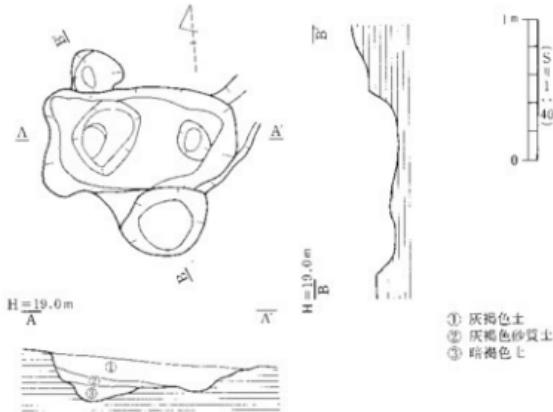


第19図 B地区SK3出土遺物実測図(1)

朝美澤遺跡 1 次調査地



第20図 B地区 SK 3 出土遺物実測図 (2)



第21図 B地区 SK 6 測量図

SK 6 (第21図)

SK 6 は B20区で検出され、前述の壺棺墓群と同じ地点に立地する。平面形は長方形で、東西1.34m、南北0.7m、深さ20cmを測る。南北の壁体の外辺には柱穴状の掘り込みを検出したが、周辺部の柱穴とは結ばれない。出土遺物はなく、この掘り込みの性格を掘ることは困難であるが、基底部に大小2基の掘り込みがみられるところから、人工的な構築物の一部であることが窺える。埋土は3層に分けられ、1層灰褐色、2層灰褐色砂質土、3層暗褐色土である。

3) 古墳時代

古墳時代に比定される遺構には、竪穴住居址 S B 1 と土壤 SK 5 がある。

S B 1 (第22図)

竪穴式住居址 S B 1 は C20区で、南北3.2m、東西2.0m分が検出された。遺構の東部及び中央部は現代の用水池により削平されている。よって、床面は1/2の残存にすぎない。南部の壁高は6cm、西壁は10cmが測られる。西壁から内部に向かって1段下る部分がみられる。柱穴は西壁のP 2、床面南のP 1、床面東部のP 3の計3基の他、P 4も主柱穴と考えられ、柱構成は4本以上になる。床面の南端では焼土の盛上がり（高さ5cm）が検出され、焼土に混じり土師器壺の細片が出土している。焼土の検出状況では、造りつけカマドとは認められず、炉的なものがあったと考えられる。出土土器からこの住居址の年代は6世紀代と推定している。

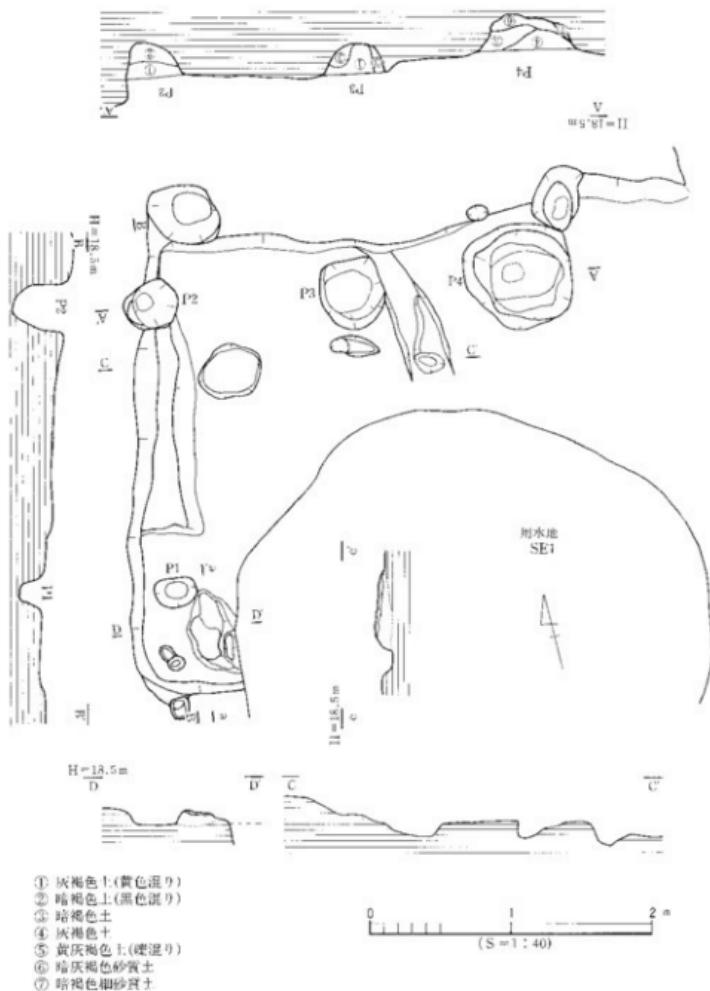
SK 5

SK 5 (第23図) は、壺棺墓 SK 1 の東 (B24区) にて検出された。平面形はほぼ円形を呈し、径1.0mが測られる。深さ35cmの上壠内からは、浮離した状態で図示する土師器短頸壺の肩部片と脚部欠損の土師器の高杯片が、砂岩礫数点に混じり出土している (第23図)。

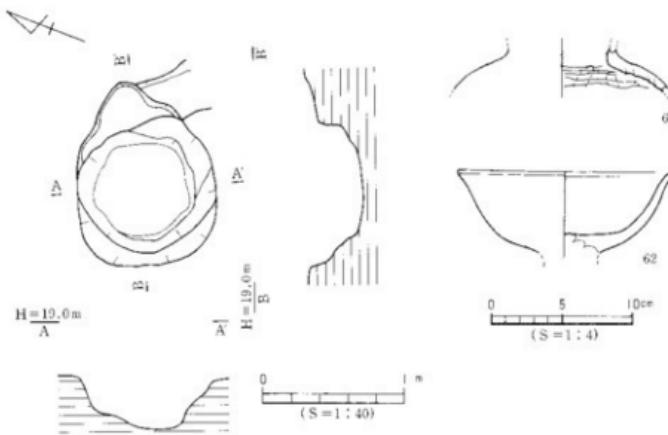
出土遺物 (第23図、図版16)

61は、口縁部と胴部は欠損する。色調は赤色を呈し、外面上位はヨコ刷毛目調整で、下位には撫でを施す。内面は粘土紐接合部にはタテ方向の指頭痕が残される。接合痕は顕著に残存し、蓋壁は平滑にならず段状になっている。62は内面黒褐色の高杯の坏部である。膨らみをもつ肉厚の底部は、上方に向かって器厚を減じ、口縁部は外傾し立ち上がる。外面上位にはタテ刷毛目調整後、ヨコナデを施す。口縁部内面にはナデを施す。

朝美深造跡 1 次測量地



第22図 B地×S B 1測量図



第23図 B地区 SK 5測量図・出土遺物実測図

4) その他

SB 2

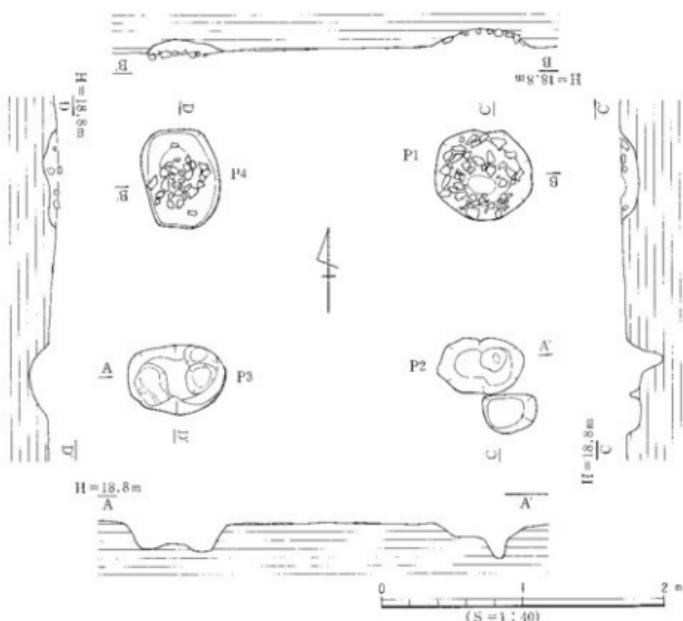
掘立柱建物 SB 2 (第24図)はB20区、SK 4の上面で検出され、柱穴4基からなる。東西2.2m、南北1.5mが測られるものの、東側の一辺は1.2mとやや柱間が狭くなる。さらにP 2の南には、建て替えとも思われる柱穴が検出されたが、判断が難しい柱穴である。柱穴の平面形は円形と楕円形がみられ、P 1とP 4には根詰め石が検出されている。柱穴内部からは出土遺物はみられず、年代や性格などは不明である。

また、SB 2の南面では並行するかのように東西列の柵列が見られ、掘立柱建物と柵列との共存関係を推考している。

SB 3

掘立柱建物 SB 3 (第12図)は、D20区～D24区にかけて検出され柱穴3基をあてた。建物の大半は調査区外の東部に拡がるものである。柱間は2mを測る。時期・性格ともに判断されない掘立柱建物である。

朝天塚遺跡 1次調査地



第24図 B地区 SB 2測量図

S A 1 (第12図)

S A 1は、SK 4・SB 2の南西に位置する。方位は東西列で、柱穴は5本が検出された。柱穴間は1.1mの均等値を示す。柵列の北面にはSK 4やSB 2が位置しており、これらに関連する遺構である可能性もある。

5) 現代

S E 1 (第12図)

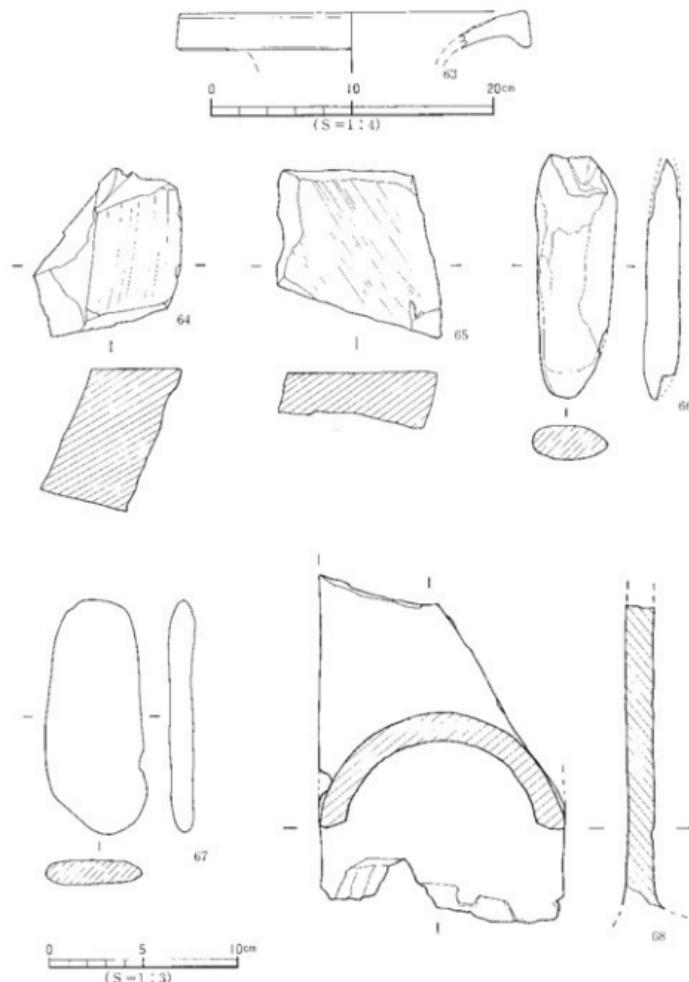
用水池S E 1は現代のもので、防火用(大戦中)の貯水池が考えられる。壁部は崩壊し、原形をとどめていない。地表下1.5mに湧水がみられる人工池である。なお、柵列S A 2はこの池をとり囲んでいる。

出土遺物(第25図)

63は弥生土器の壺形土器の口縁部である。磨滅がみられる細片で、口径25cmが測られる。口縁端部は垂下がみられる。64・65は頁岩砥石で、使用条痕がみられ砥石と判断される。66・67は緑色片岩で磨製の石器である。刃部は見当たらず丸く扁平で、何らかの工具と解釈され

遺構と遺物

る。68は瓦頭部を欠く軒丸瓦で、桶巻き技法がみられる。平安時代比定の瓦である。



第25図 B地区用水池 (SE 1) 出上遺物実測図

S A 2 (第12図)

S A 2は東から南へとカギ状に曲折する構造で、柱穴間1.1mから1.6mを測り、7間分を検出した。用水池S E 1の構造と判断される。

柱 穴

柱穴内出土遺物 (第26図)

69~72は、柱穴（性格不明）内の出土品である。69はS P 18の出土品である。弥生時代前期の壺形土器で、口縁端面に刻目を施す。外面は磨滅し、内面にはヨコ刷毛目調整がみられる。70はS P 24の出土品である。頭部に貼付突帯を施し、突帯上面に斜格子文が刻まれる。外面には粗雑な刷毛目調整がみられる弥生後期の壺形土器である。71はS P 15の出土品である。弥生時代後期の壺形土器の底部である。72はS P 10の出土品である。内面にシボリ痕を残す高环脚部片である。

B 地区の褐色土出土品 (第26図)

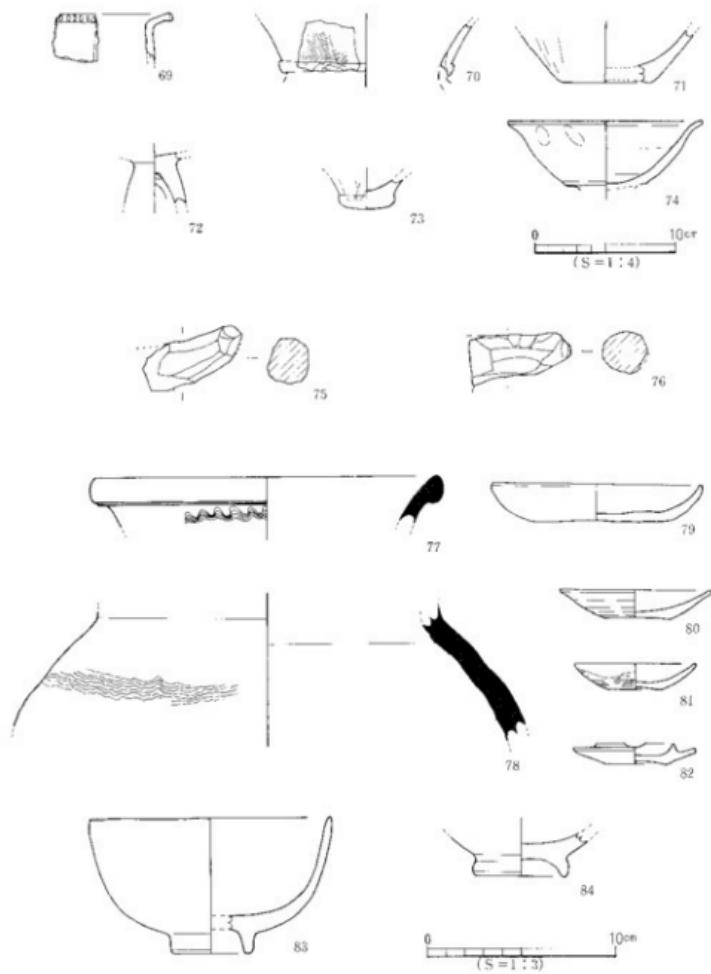
73~84はB地区の褐色土より出土した遺物である。73は鉢形土器、74は高环環部、75~76は瓶の把手、77~78は須恵器壺、79は土師器皿、80~82は施釉陶磁皿、83~84は施釉陶磁碗である。

73は鉢形土器の底部である。外面は指頭押圧が残る。74は脚部欠損の坏部で、脚柱部と坏部の境に棱がみられ、坏部は内弯し、口縁部は外方に開く。外面には指頭が残る。75はヘラ削り痕と指頭がみられる。76はヨコ刷毛目調整が施される。77~78はとともに細片である。77の口縁端部は丸く膨らみ、下端部には凹線がみられる。頭部には波状文が施される。78は壺の肩部で、僅かに頭部の立ち上がりが残存する。外面には粗雑な波状文を施している。79は底部糸切りの土師器皿で、外面には回転ナデの痕がみられる。口縁端部は丸く細い。80~82は灯明時使用の陶器皿である。ともに内面施釉で81に限り外面上部に釉がみられる。80の口唇部には黒斑、81には油漬の残存がみられる。82は内部に芯受け？がみられ注口状を呈する。83~84は青磁碗である。84は高台部、83は1/2の残存である。両者はともに内外面施釉が施される。84は重ね焼きがなされ、疊着け部に釉の剥離が認められる。

試掘調査出土遺物 (第27図、図版16)

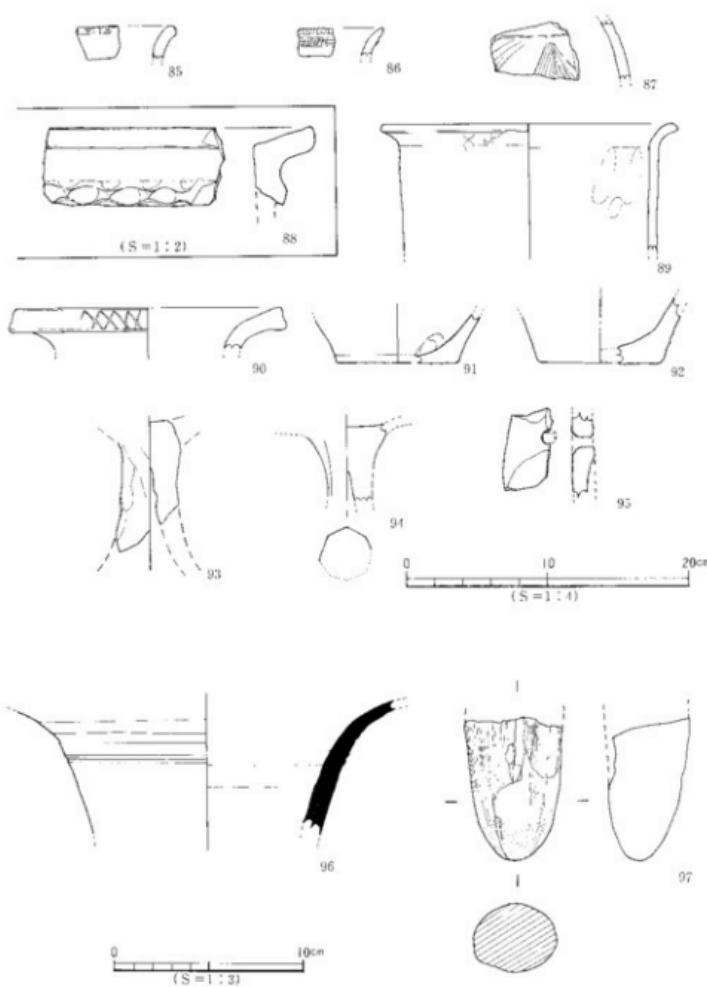
85~97は、本調査前の試掘調査にて、B地区の廃土置場とした地点より出土した遺物である。85は口縁端面に刻目文を不均等に施す。86は壺形上器で口縁端面と突帯上面に刻目文を施す。87は壺形土器胸部で、上位には1条の沈線文を巡らし、下位には複線の弧文を施す。外面はヘラ磨きされ、内面はナデがおこなわれる。88は口縁部が「F」字形を呈する壺形土器片である。突帯上面には押圧文を施す。89は無文の壺形土器である。頭部外面には指頭圧が残る。内面には下から上に向かって、指頭ナデを施す。

遺構と遺物



柱穴 69~72
褐色土 73~84

第26図 B地区柱穴・褐色土出土遺物実測図



第27図 B地区試掘調査出土遺物実測図

90は壺形土器の口縁部片で、口縁端面に斜格子目文を施す。口縁端面は若干の凹みを呈する。外面はヨコナテを施し、内面には磨きがみられる。91は底部の器壁も薄く、立ち上がりも大きく聞くことなどから鉢形土器の底部と思われる。外面は刷毛目調整後へラ磨きがみられ、内面は指頭押圧後刷毛目調整される。92の壺形上器底部は胎土中に1cm大の粗礫が多く、器面は剥離が著しく調整は不明である。93は弥生時代後期の支脚で、上部には2本の支え手がつくと思われる。粗雑な作りである。94は八面体の高環脚部片で、奈良時代に比定される脚柱部である。95は焼成前の円穿をもつ高環形上器脚部片である。96は須恵器の中型鏡である。外傾度の強い頸部の上位には、2条の沈線を巡らしている。97は折損した磨製の石器である。端部は細く、断面は円形を呈す。端部には放射状に括がる使用痕がみられる。従って何らかの工具を推定している。

4. 結 び

今回の朝美澤遺跡の調査では、2つの地区に対して調査を実施した。調査によって、丘陵裾部の山手（A地区）では、中世11世紀後半に比定される掘立柱建物（A地区S B 1）や建物に附設する可能性をもつ溝（A地区S D 2）が検出された。下手（B地区）の傾斜地では、西側では弥生時代中期の上塙（B地区S K 4）と、弥生時代後期の壺棺墓3基（B地区S K 1～3）があり、東側では6世紀代（推定）の堅穴住居址（B地区S B 1）や時期推考に至らない掘立柱建物（B地区S B 2）、さらに現代に至るまでの遺構を検出した。これらの状況をみると限りでは、山手と下手とでは生活基盤に異なる時代的背景が認められる。山手では中世の集落形態が示され、下手の傾斜地では弥生時代から古代・現代へと続く複合的な遺跡構成が示されている。

B地区検出の壺棺墓は、さほど遠くない南面域に、弥生時代後期の集落が存在することを推定させる資料といえる。

松山平野における弥生時代壺棺墓の出土例は、平野南部域にある重信川（伊予川）の左岸微高地の浮穴遺跡（後期）、同域の独立丘陵天山にある天王ヶ森遺跡（中～後期）、天山丘陵の南面を西流する小野川と川付川の合流地点にある西石井荒神堂遺跡（後期）が知られている。

B地区堅穴住居址S B 1は、細片の土師器片から6世紀代を比定し、土塙S K 5と共に存するものと考えている。

このほか時期・性格不明の遺構では、S A 1はS B 2の南面にあって、ともに南北軸がみられ、性格は不明ながら古墳時代の遺構を想定している。なお、遺物中には布目瓦もみられた。

今回の調査及び2次調査によって、当地域には绳文時代後期から中世まで継続する集落があったことが明らかとなったといえる。

朝美澤遺跡1次調査地

遺物観察表一凡例一（梅木謙一・松村 淳・水口あさい）

(1) 以下の表は、本調査出土遺物観察一覧である。

(2) 各記載について。

法量欄 () : 復元推定値

形態・施文欄 土器の各部位名称を略記。

例) 口→口縁部、胴中→胴部中位、柱→柱部、把部、胴底→胴部底部。

胎土・焼成欄 胎土欄では混和剤を略記した。

例) 砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→粘製土。() 中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例) 砂・長(1~4) 多→「1~4 mmの大の砂粒・長石を多く含む」である。

焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良。

表2 A地区SB1出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外面) 色調 (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
1	灰窓	残高 2.0	左開きのヘラケズリ瓶	ヘラケズリ	回転ナテ	灰色 灰色	長(1~2) ○	P45	13
2	壺	口径(9.5) 残高 2.5	口縁部は、断面方形となる。	回転ナテ	回転ナテ	濃灰色 灰色	密 ◎	P43	13
3	高杯	口径(11.0) 残高 3.0	器壁や手厚い、厚く丸みのある口縁瓶	回転ナテ	回転ナテ	灰色 灰色	長0~1.9 ◎	P43 自然種	13
4	高杯	口径(12.2) 残高 2.8	わずかに外反する口縁型。	回転ナテ	回転ナテ	青灰色 青灰色	引 ◎	P43	13
5	高杯	残高 2.4	高杯であるかは疑問が残る。	回転ナテ	マメツ	灰色 灰色	砂粒 ◎	P42	13
6	皿	口径(11.3) 残高 1.8	ミガキ瓶は盗取されず。	ナテ	ナテ	茶褐色 茶褐色	砂粒 ◎	P45	13
7	瓶	底径(9.7) 残高 1.5	「ハ」の字状の高台をもつ。	マメツ	マメツ	茶褐色 茶褐色	砂粒 ◎	P41	13
8	瓶	底径(8.5) 残高 1.5	「ハ」の字状の高台をもつ。	マメツ	マメツ	淡灰色 淡灰色	密 ○	P42	13
9	瓶	底径(10.4) 残高 1.7	「ハ」の字状の高台をもつ。	ナテ	マメツ	褐色 褐色	密 ◎	P31	13
10	瓶	底径(10.0) 残高 2.4	「ハ」の字状の短い高台をもつ。	マメツ	マメツ	黄褐色 黄褐色	密 ○	P41	13
11	瓦		軒丸瓦、布目、細織目。	萬目模	布目痕	灰色 灰色	密 ◎		13

出土遺物観察表

●表3 A地区SD1出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
12	研石	1/2	粘板岩	5.0	3.5	0.9	14.3		

●表4 A地区SD2出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		(外面) 色調 (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
13	塊	11径: 8.7 高: 4.3 底径: 2.7	口唇の開か、小さい高台をもつ。	無	無	白色 白色	密 ◎		

A地区SD2出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
14	研石	1/2	砂岩	9.3	4.7	4.5	302.2		

●表5 A地区SD3出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		(外面) 色調 (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
15	平蓋	残高: 2.4	へラ切り痕ある。	ヘラケズリ	刮削ナテ	淡灰色 灰白色	砂粒 ○		
16	蓋	底径(5.3) 残高: 2.8	やや上辺底の底部。	ナテ	ナテ	茶褐色 茶褐色	砂粒 ◎		

●表6 A地区包含層出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		(外面) 色調 (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
17	盃	口径(11.0) 残高: 3.3	口縁下端間に刻目を施す。	マツフ	マツフ	黄褐色 黄褐色	砂粒(0~3) ◎		
18	盃	口径(26.0) 残高: 2.3	断面「円形」の内面内巻、4本脚の山形文。口縁に邊縫目。	ココナテ	ココナテ	褐色 褐色	砂粒(0~4) ◎	里窯	14
19	盃	残高: 4.9	腹部の押圧凸發火。	ナテ	ナテ	茶褐色 茶褐色	砂粒(0~3) ◎		
20	盃	底径(7.0) 残高: 3.0	わずかに立ち上がり半球の底部。	ナテ	ナテ	褐色 褐色	砂粒(0~3) ウシモ ◎		
21	盃	底径(8.0) 残高: 3.7	丸みのある半球の底部。	ミガキ(ナテ)	ナテ	褐色 褐色	砂 ◎		

朝美澤遺跡 1次調査地

A地区包含層出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外面) 色調 (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
22	鉢	底径 3.0 残高 4.5	工具により、穴状の底部をつくる。	マメツ	マメツ	黄褐色 黄褐色	化粧 ○	三成	
23	高杯	横径 2.9	組み合せ技法。脚内は中空。	マメツ	マメツ	黄褐色 黄褐色	素 ○		
24	高杯	残高 1.3	脚部との結合部で剥離し、板は接着が施される。	マメツ	マメツ	黄褐色 黄褐色	心土色~D ⑤		
25	不明	底径 6.7 残高 2.6	ヘラ切り。中央の高台。 裏剥。	ナデ	ナデ	黄褐色 黄褐色	ナ・食母~茶 ⑥	14	
26	把手		コシキの把手。	マメツ	マメツ	黄褐色	心土色~D ○		
27	把手		コシキの把手。	ナデ	ナデ	黄褐色	石・土色~D ⑥		
28	羽垂	残高 2.0	瓦質。長いツバをもつ。	ナデ	ナデ	灰色 灰色	素 ⑥		
29	臼	底径(3.2) 残高 0.7	圓盤状なり。	ナデ	ナデ	黒褐色 黑色	素 ⑥		

A地区包含層出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
30	焼古	完成品		5.0	5.1	1.1×0.7	32.8		14

A地区包含層出土遺物観察表 土製品

(3)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外面) 色調 (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
31	壺	口径(14.0) 残高 4.2	方形の口縁端部は、切妻か十字内凹。	円軸ナデ	円軸ナデ	灰色 灰色	石・瓦(1)		
32	壺	底径 9.2 残高 2.6	「+」の字状の高台。 右付長直立か。	円軸ナデ	円軸ナデ	灰色 灰色	素 ⑥		14
33	壺	底径(4.0) 残高 3.8	ヘラ切り底。ゆるやかに外反する口縁部。	円軸ナデ	円軸ナデ	灰色 灰色	素 ⑥		
34	把手	残高 3.3	ヘラ切り底。やや厚い器壁。	ヘラケズリ	円軸ナデ	青褐色 灰色	素 ⑥	自然袖	

出土遺物観察表

A地区包含層出土遺物観察表 土製品

(4)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外面)色調 (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
35	高杯	口径(8.4) 底高 3.0	水平に開く深部に平底に立つ脚壺底。	マメツ	マメツ	淡褐色 淡灰色	胎焼 ○		
36	巻	底高 3.8	口縁部に1条の凹頭文をもつ。内側で立ち上がる口縁部。	回転ナゲ	① 回転ナゲ ② タタキ	灰褐色 灰褐色	胎 ④		
37	仄身	口径(8.7) 底高 2.0	匂い高台の脚壺底は水平となる。	ナゲ	ナゲ	灰色 灰色	胎 ④		
38	巻	底高 6.2	「車輪」状のあて具痕あり。	カキ替	タタキ	灰色 灰色	長(1~3) ④		14
39	馬蹄	口径(16.4) 底高 2.4	内側する脚壺底、若狭か呼い。	回転ナゲ	回転ナゲ	灰色 灰色	胎 ④		14
40	仄身	底高 1.5	へら切り。	回転ナゲ	回転ナゲ	三色 黑色	胎 ④		

●表7 B地区 SK 4 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外面)色調 (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
41	杯	口径 24.5 底高 23.0 底径 15.2	大きい平底、芯壁厚い。口縁部少々内凹み、口縁内側に横合模。	⑪ ヨコナゲ ⑫ ミカキ(タテ)	⑪ ヨコナゲ ⑬ ミカキ(コ)	素褐色 素褐色	石・灰(1~3) ④	三斑	16
42	甕	口径(21.0) 底高 2.8	折り曲げ口縁。口縁内側にゆるやかな模をもつ。	ナゲ	ナゲ	素褐色 素褐色	石・灰(1~3) ④		
43	甕	口径(22.1) 底高 7.5	折り曲げ口縁。横合模有。	ミカキ(タテ)	マメツ	素褐色 素褐色	石・灰(1~3) ④	深	16
44	甕	口径(6.0) 底高 6.5	折り曲げ口縁の複合模有。43と同。か。	ミカキ(タテ)	ナゲ	素褐色 素褐色	石・灰(1~3) ④		
45	甕	口径(22.5) 底高 12.0	折り曲げ口縁。内側に模をもつ。	ハケ→ミカキ	マメツ	素褐色 素褐色	石・灰(1~3) ④		
46	甕	口径(25.2) 底高 3.0	底下口縁。口縁裏面斜削した口元。底部に深い底模文(?)。	ヨコナゲ	ヨコナゲ	素褐色 素褐色	石・灰(1~3) ④		16
47	甕	底径(6.0) 底高 6.7	やや上げ底。	ハケ(タテ)	マメツ	黑色 褐色	石・灰(1~3) ④		
48	こしき	底径 6.4 底高 9.0	焼成後穿孔。やや上げ底。	マメツ	マメツ	素褐色 素褐色	石・灰(1~3) ④		16
49	甕	底径(7.0) 底高 6.0	やや上げ底。丸みをもつち上り。	ミカキ(タテ)	マメツ	素褐色 素褐色	石・灰(1~3) ④		
50	甕	底高 2.0	外底する口縁部。口縁を施す船り付け凸部。	ナゲ	ナゲ	褐色 褐色	石・灰(1~3) ④		

朝美澤遺跡 1次調査地

B地区SK4出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
51	石鋸	4/5	サヌカイト	3.6	1.3×0.2	0.6×0.2	2.73		
52	作業台	完形	花崗岩		31.0	11.0	4.0kg		
53	石鋸	3/4	花崗岩	23.6	14.5	3.5	3.5kg		

●表8 B地区SK1出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		(外面) 色調 (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
54	立	底径(10.6) 残高 61.4	体部下半に削込みをもつ。 丸みのある平底。	ハケ	頂上 ナデ 四中 ハケ 側面 マメワ	茶褐色 茶褐色	胎土(1-4) ④		13
55	甕	口径(14.4) 残高 3.7	口縁端部は削をもち、今や立 ちよりぎみ。	ハケ(テテ)	ハケ(ヨコ)	暗茶色 黒 暗褐色	砂粒 ④		
56	勾玉	径各 2.5	玉部分。	ナゲ	ナゲ	黒灰色	胎土 ④	粗粒	16

●表9 B地区SK2出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		(外面) 色調 (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
57	甕	残高 24.8	大型壺。胎土袋の接合部あり。	タタキ→ハケ→ミガキ	ハケ	黄褐色 黄褐色	胎土(1-3) ④		
58	立	残高 21.2	大型立。粘土袋の接合部が 段階取られる。	タタキ→ハケ	ハケ(1部ナゲ)	黄褐色 黄褐色	胎土(1-3) ④	無底	

●表10 B地区SK3出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		(外面) 色調 (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
59	甕	口径(19.7) 底高 60.5 底径 9.5	複合山字底。斜削子口文光底 の山形文。底部に刻目凸巻文。 突出する底部。	ハケ	ハケ	褐色 褐色	胎土(1-3) ④	無底	15
60	甕	口径 8.3	丸みのある平底。深溝は丁寧。	ハケ→ミガキ	ハケ(1部ナゲ)	褐色 褐色	胎土(1-3) ④		13

●表11 B地区SK5出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		(外面) 色調 (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
61	甕	残高 3.0	内面に5段の接合部。	ナゲ	ナゲ	茶褐色 茶褐色	胎土 ④		16
62	高杯	口径 15.5 残高 6.0	わずかに外反する口部部。唇 壁が厚い。	ナゲ	ナゲ	黄褐色 黒褐色	胎土(1-3) ④		16

出土遺物観察表

●表12 B地区用水地(SE1)出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外側) 色調 (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
63	壺	口径(25.0) 残高 2.5	直下口縁。マメツ有し。	マメツ	マメツ	黄褐色 黒色	石長田~B ◎		
88	瓦	幅 13.0	軒丸瓦。瓦頭を欠損する。	ナテ	板底	灰色 灰褐色	南 ◎		

B地区用水池(SE1)出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
64	砾石		頁岩	7.5	7.7	4.8	485.0		
65	砾石		頁岩	6.2	7.6	2.2	287.0		
66	石斧		緑色片岩	13.5	4.2	1.8	178.3		
67	工具	一部欠損	緑色片岩	12.3	5.0	1.2	167.9		

●表13 B地区柱穴・褐色土出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外側) 色調 (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
69	壺	残高 3.0	口縁塗部に割目。	ナテ	ナテ	加灰褐色 黒灰色	石長田~B ◎		
70	壺	残高 3.3	底部に斜格子目文をもつ貼り付け凸部。	ハケ	ハケ	黄灰褐色 黄灰褐色	石長田~B ◎		
71	壺	底径(6.5) 残高 3.9	碧玉の上げ底。	ミガキ(タテ)	ナテ	茶褐色 茶褐色	石長田~B ◎	馬鹿	
72	高杯	残高 3.7	脚部部。	マメツ	マメツ	褐色 褐色	石長田~B ◎		
73	杯	残高 2.2	突出する丸みのある手すり。	ナテ	マメツ	暗褐色 暗褐色	南 ◎		
74	高杯	口径(14.0) 残高 4.5	外折する口縁部。杯底部との 接合部は墨跡を石取。	コロナテ	マメツ	褐色 褐色	石長田~B ウソモ ◎		
75	把手	長さ 7.5	コシキの把手。	ナテ	ナテ	黄褐色 黄褐色	石長田~B ◎		
76	把手	長さ 7.3	コシキの把手か、75と同一個 体に付くものかもしれない。	ナテ	ナテ	黄褐色 黄褐色	石長田~B ◎		
77	壺	口径(18.0) 残高 2.4	先みをもち、垂下する口縁部。 5 条以上の波状文。	マメツ	マメツ	褐色 褐色	石長田~B ○		
78	壺	残高 7.2	6 条の波状文。	同軸ナテ	同軸ナテ	黄褐色 褐色	南 ◎		
79	壺	口径(11.3) 基高 2.0	同軸系切り。	ナテ	ナテ	暗褐色 暗褐色	南 ◎		
80	灯明皿	口径 8.0 基高 1.5 底径 3.2	同軸系切り、内面に擦、平底。	ヘラケズリ	無	黃褐色 黃褐色	南 ◎		

朝美澤遺跡 1次調査地

B地区柱穴・褐色土出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外面) 色調 (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
B1	打削皿	口径 6.5 底高 1.4 残高 2.7	底部は円形、内面に鉗。	同軸ナデ	胎生	黄灰色 黄灰色	白 ◎		
B2	打削皿	口径 6.6 底高 1.1 底径 3.0	立ち上りをもつ、立ち上りは口となる、内面に鉗。	抹面	胎生	黄灰色 黄灰色	白 ◎		
B3	碗	口径(12.6) 底高 7.3 残高(4.5)	細壁、内外に細か苔壁の厚い 高台。	胎生	胎生	黄緑色 黄緑色	白 ◎		
B4	碗	底径 5.0 残高 2.3	表面は全て胎。	抹面	胎生	淡黄色 淡黄色	白 ◎		

●表14 試掘調査出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外面) 色調 (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
B5	甕	残高 2.5	口縁下端部に鉗目。	ヨコナデ	マメツ	黄褐色 黄褐色	砂粒 ◎		
B6	甕	残高 2.0	外反する口縁部、口縁部と 内部に鉗目。	ヨコナデ	マメツ	暗褐色	粘褐色	砂粒 ◎	
B7	甕	残高 4.1	多条のへら掛け模様による 本施文(?)。	ミガキ	ナテ	暗褐色 暗褐色	石長(1) ◎		15
B8	甕	残高 2.5	無施文の斜削内壁。	ヨコナデ	ヨコナデ	黄褐色 黄褐色	石長(1) ◎		
B9	甕	口径(21.0) 残高 8.8	ゆるやかに外反する口縁部。	ナテ	ナテ	黄褐色 黄褐色	石長(1) ◎		
B10	甕	口径(18.9) 残高 3.0	口縁前面に斜削子目文。	ヨコナデ	ミガキ	褐色 褐色	石長(1) ◎		
B11	甕	底径(8.8) 残高 3.4	大きい平底。	マメツ	マメツ	褐色	褐 ◎		
B12	甕	底径(8.9) 残高 5.0	外接する立ち上りをもつ底 盤。平底。	マメツ	マメツ	茶褐色 茶褐色	石長(1-2) ◎		
B13	支脚	残高 9.4	支脚。二片の突起が欠損する。	ナテ	ナテ	黄褐色 黄褐色	砂粒 ◎	無記	
B14	高坏	残高 6.0	8曲体の脚柱部。	ナテ	マメツ	茶褐色 茶褐色	褐 ◎		16
B15	高坏	残高 6.0	円孔を1ヶ看取。	マメツ	マメツ	茶褐色 茶褐色	石長(1) ◎		
B16	甕	底高 6.7	底盤器。2条の回線。	同軸ナデ	同軸ナデ	褐色 褐色	褐 ◎	自然物	

試掘調査出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
B17	石斧	1/2	安山岩?	7.5	5.1	4.0	200.0		

第3章

客谷古墳群

—B地区—



第3章 客谷古墳群B地区

1. 調査の経過

(1) 調査に至る経緯

松山平野には独立丘陵が各所に点在する。大峰ヶ台丘陵もその一つで、平野北部にある松山城（独立丘陵「勝山」）の西方に位置する。広域な面積をもつ大峰ヶ台丘陵は、松山市が指定する『32・33 大峰ヶ台弥生遺跡・大峰ヶ台古墳群』にあたり周知の遺跡群として知られる。昭和49年に調査が行われた頂上部八合目付近では弥生時代中期の集落が検出され（松山市 1980）、丘陵支群中では古墳時代中期から後期の古墳群である岩子山古墳（人物・動物埴輪出土 1975 名本二六雄）や御産所古墳群11号墳の調査（検体数7体までの人骨が確認されている 1976 森光晴）が知られるところである。

近年、松山市は、大峰ヶ台丘陵の主丘陵を拠点とする総合公園整備を計画した。これをうけ、松山市教育委員会は公園整備に先立ち分布調査を行った。分布調査の結果、整備地には古墳が数基存在することが明らかとなった。よって、関係各機関（松山市公園緑地課、建築課、道路課、市教委）は、遺跡調査についての協議を行い、緊急調査を行うこととした。

(2) 調査組織

遺 蹤 名 客谷古墳B地区

調 査 地 松山市南江戸6丁目1586他

調 査 面 積 面積 900 m²

調 査 期 間 昭和63年2月22日～同年8月17日

調 査 協 力 松山市公園緑地課・建設課・道路課

調 査 担 当 西尾幸則・松村淳

調査作業員 高尾和長（現、勤松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター）

山本健（現、勤松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター）

大森一成（現、勤松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター）他

〔参考文献〕

松山市史料集編集委員会 1980 「松山市史料集 第1巻 考古編II」

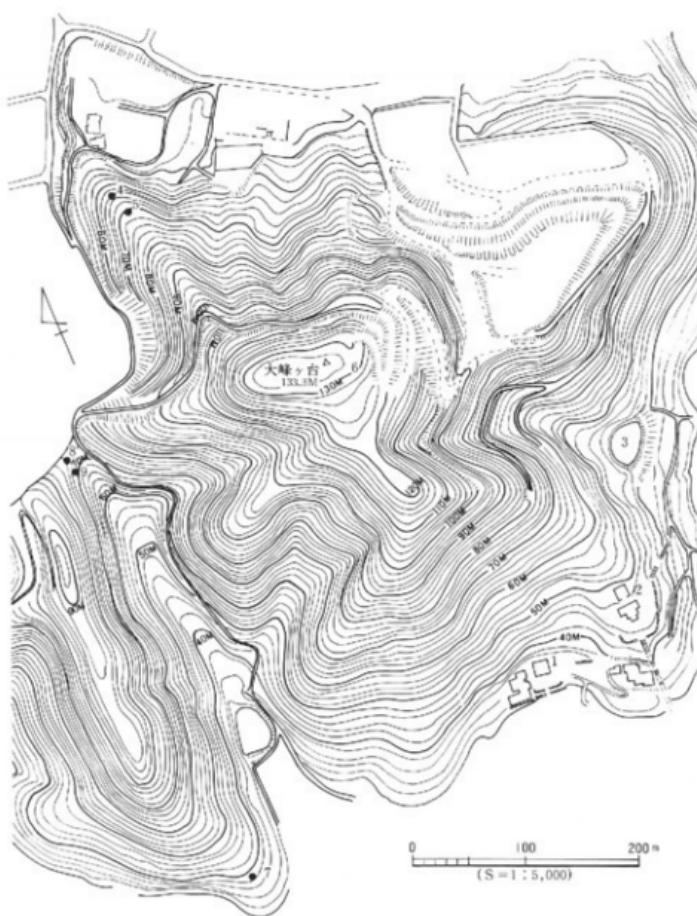
名本二六雄 1975 「岩子山古墳」松山市教育委員会

森光晴 1976 「御産所11号墳・忽那古墳・久万ノ台古墳」松山市教育委員会

〔備考〕本調査に関しては、概要が報告されている（『松山市埋蔵文化財調査年報II』）。本報告に際しては、用語や測量値等に一部、修正・改変したものがある。

例）小石室→土壇に改変した。

客谷古墳群B地区



- | | | | |
|----------------|----------------|--------------|-----------|
| 1. 国宝太宝寺 | 2. 朝日八幡神社 | 3. 朝日谷造 | 4. 朝日谷1号墳 |
| 5. 朝日谷2号墳 | 6. 大峰ヶ丘頂上通路 | 7. 客谷古墳(A地区) | |
| 8. 客谷古墳群B地区2号墳 | 9. 客谷古墳群B地区1号墳 | | |

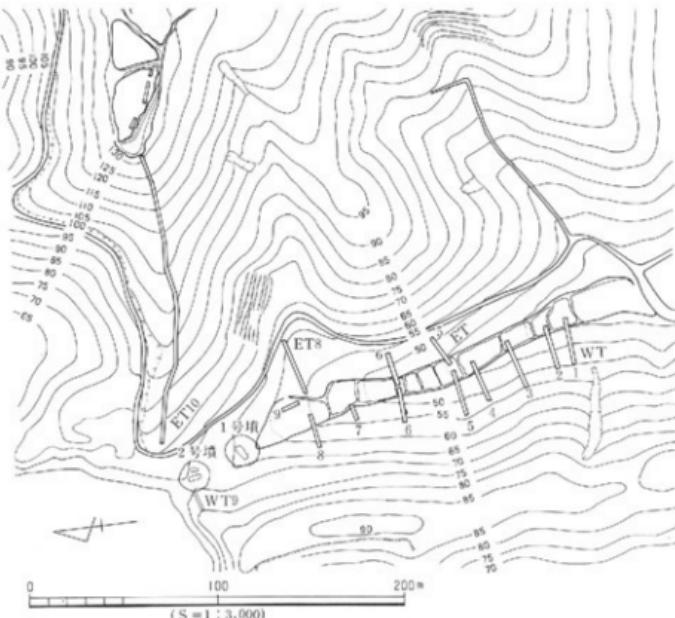
第28図 遺跡分布図

(3) 経過

本調査地は、大峰ヶ台丘陵の西麓にある谷部に位置する。谷部の西側には分岐丘陵が南方に向延び、この丘陵の南端には既に調査が終わった7世紀前半の群集墳である客谷古墳A地区が所在する。調査地は、東側は主丘陵の傾斜地、西側は分岐丘陵の傾斜地、中央は谷部という立地である。

谷部の地形は南に開口し、北上がりを示す。調査地の南 $\frac{2}{3}$ は日照の少ない湿地帯で、残る北 $\frac{1}{3}$ には谷口扇状地形が存在する。調査はまず東西の傾斜地と、南の湿地部にトレーニチを設定し調査を実施した。その結果、北部 $\frac{1}{3}$ に調査の主眼をおくこととした。トレーニチ調査では東部側をEトレーニチ、西部側をWトレーニチとし、調査順に数字を付した。その結果、東側のET8（第29図）で集石2基と配石を伴う溝1条、ET9（第29図）で現代建物址を検出した。西側ではWT2・3・5で南北に走る水路（第29図）を検出し、更に北端部のWT9（第29図）で周溝状の掘り込みの一部を確認した。

一方、北部の扇状地では、南北に並んで2基の円墳（第30図）と、墳丘に併存する土塁3基（第30図）、祭祀遺構2基、集石2群、その他性格不明の掘り込み5基、柱穴3基を検出した。



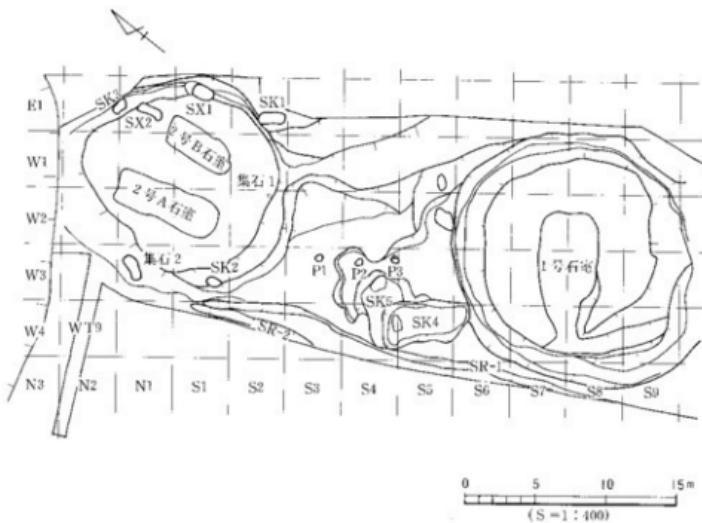
第29図 調査地位置図

2. 北部の調査

(1) 北部の概要

墳丘が確認された谷口扇状地の地目は竹林である。表土は筍採りによって随所に小穴が掘られ攪乱されている。東側の傾斜地には丘陵の頂上に登る山道が走り、西側は谷筋にあたり自然流路が南流している。南西隅を要にし、北東に向上升する地形には、石室の石材と思える破片が散乱し、石室の存在が暗示される土地であった。

北部では南と北に2基の墳丘を検出した。南の墳丘では石室を1基、北の墳丘では東西に並列した大小2基の石室が検出された(第30図)。南の墳丘を1号、北の墳丘を2号とした。古墳の他には、2号墳に付設する造構と、1・2号墳の間に性格不明の土壙や柱穴跡を数基検出している。



第30図 造構配置図

(2) 1号墳 (第30・31図)

1号墳は海拔65m、2号墳との距離は20mが測られる。墳丘は円墳で径17mを測る。

墳丘は、立地が傾斜地であるため、盛土により水平面を構築しつつ、石室をも築造するという工程をとる。I：地山を削平し水平面を造り出す。II：茶褐色土（褐色土混じり）で地山面を覆う。III：幕括を掘る。IV：石室の築造。石を積み上げながら、東側の墳丘をも築造する。この場合、石の積み上げ作業と盛土の作業がほぼ同時に遂行している。東壁のうらごめの土と東側盛土のレベルは、水平に近い値を示している（地山削削面と併行する）。

周溝は南部を欠くが比較的遺存は良く、幅2.5mが測られる。

墳丘中央に位置する石室は主軸方位をN53°Eを指向し、西に開口する。両袖式横穴石室で、全長6.4m、玄室長3.9m、幅1.8~1.9m、玄門幅1.0m、羨道部長2.0m、幅1.4mを測る。羨道部は、玄門に向かって「ハ」の字状を呈する。天井部は削平されている。玄室南東部の側壁は底基石を残すだけとなっている。側壁には大振りの根石を横据えし、中段位には小振りを、上段には中段よりやや大きめの安山岩の割石を小口積している。羨道部と玄室との床面は余り段差をもたない。礎床には壁材と同質の割石と、花崗岩円礫を併用して敷きつめる。玄室南東隅はすでに荒され、盗掘入り口の様相がみうけられた。

遺物は玄室と羨道部に分けられ、玄室内からは土器類、（須恵器环身1、長頸壺1、広口壺1、短頸壺1、高环脚部1他）、鉄器（刀子4点、鉄斧1点、鐵鎌3点）、装飾品（耳環3、勾玉2、葉玉1、水晶玉4、管玉4、ガラス丸玉26、ガラス小玉20他）が出土している。羨道部では土師器椀、須恵器甕・壺の破片が出土している。また、周溝内東部からは須恵器提瓶、周溝北部からは子持勾玉が出土している。子持勾玉は検出位置からして、上部からの流入が考えられ、当古墳ないし周辺に存在する古墳のものであろう。

1) 玄室内出土品 (第36図、図版46)

1. 土器（須恵器）

环（1） 徑は小さい。たちあがりは非常に短く内傾し、口縁端部は丸くおさめる。受部は上外方へ短くのびる。

高环（2） 無蓋高环。环部の底部はやや丸みをもつ。口縁部は直立し、端部付近で外反する。口縁端部は丸くおさめる。脚部はラッパ状に開き、端部付近で大きく外に屈曲し、端部は下方へ短く屈曲する。脚部の中央付近で、1条の沈線が周開の2/3程度に巡っているが、その沈線は雜である。

短頸壺（3~5） 口頸部が短く直立し、口縁端部を丸くおさめる。5は口頸部が欠損している。体部は扁球形をしており、4・5は中位よりやや上に1条の凹線が巡っている。底部には回転ヘラ削り調査を施している。

広口壺（6） 口頭部が短く外反する。口縁端部は断面三角になり、外面に沈線が1条ある。体部は扁球形をし、体部の上位1／3程のところに刺突文を施し、その刺突文の上に1条、下に2条の沈線が巡る。

長頸壺（7） 頸部は直立し、口縁部が外反して開く。口縁端部は丸くおさめる。底部は平たく、外面は手持ちヘラ削り調整を施している。また体部下半には回転ヘラ削りの後回転ナデ調整を行っている。

壺（8） 口頭部は外反する。口縁端部ではわずかに外方へ肥厚している。端部は丸くおさめ、内外とも回転ナデ調整を施している。

2. 鉄製品（第37図、図版48）

玄室から出土した鉄製品には、刀子4点、鉄鎌3点、鉄斧1点の他、刀子装着具の木柄、鉄製の革装着具などが出土している。

刀子（9～12） 9は、刃部先端と茎の端部を欠き、遺存長15.5cm、刀身幅1.7cm、厚さ4mmが測られる。かなりの鋒化が進み残量は24.125gを計る。刃部断面は二等辺三角形状に、茎断面は長方形が示される。10は、鋒化著しく本来の形状を示さない。遺存長12cm、刀身長10cm、刀身幅最大1.5cm、重さ9.07gを計る。刀身部断面は三角形であり、反りを余りもたない直線刃の刀子が想定される。11は身部の折損品で、刃部の先端部分であろう。12は茎部で、断面は長方形から梢円へと細くなる形態を示し、現存で7.99gが計られる。

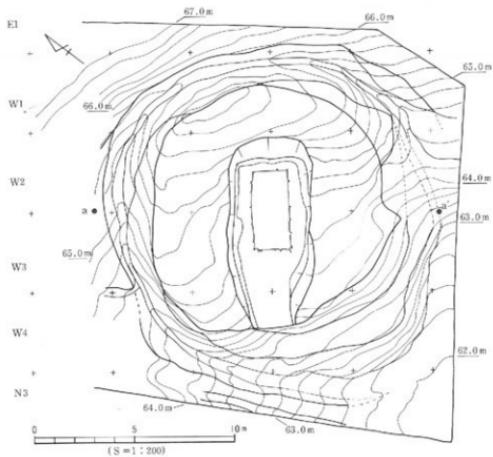
鉄鎌（13～15） 13は完形に近いものである。全長8.6cm、幅3.2cm、厚さ6mm、重さは17.12gを計る。長い茎は端部で梢円形となり、着柄部が僅かにみられる。14は、13と同形態の三角形鎌で、8.68gを計る。15は、現存長5.2cm、重さ6.34gを計る。

刀子の装着具16・17は、木柄部に装着する柄巻き？の環状鉄製品と思われる。16は、円形で径2.1cm、厚さ1.5mmを測る。16では8面体に面どりされた木柄部がみられ、金具の装着位置は切りこまれ、木柄は1段細くなる。この形状から金具の長さは、残存長1.2cmより更に長いものが装着されていたと判断される。推定長は3cm前後になると考えられる。17は、長径2.3cm、短径1.8cmで、断面は倒卵形を呈するものと思われるものである。側面がやや厚く2mm前後を計る。

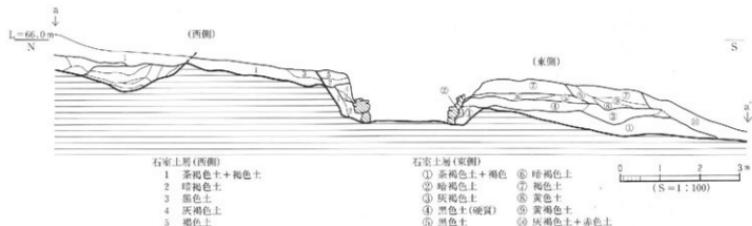
鉄斧（18） 18は、方形の袋状着柄部をもち、袋部の折り曲げは明確さがみられない。袋部の裏面下位には切りこみ状の透し孔がみられる。刃部は刃先が強く消耗している。重さ181.58gが計られる。

3. 装身具（第38図、図版49）

玄室内部から出土した装身具の出土状況は、第33図に示すように散在した状況であった。出土品には耳環3点、勾玉2点、水晶玉4点、管玉4点、樹脂丸玉4点、ガラス丸玉26点、ガラス小玉20点、樹脂質環玉1点の計62点である。

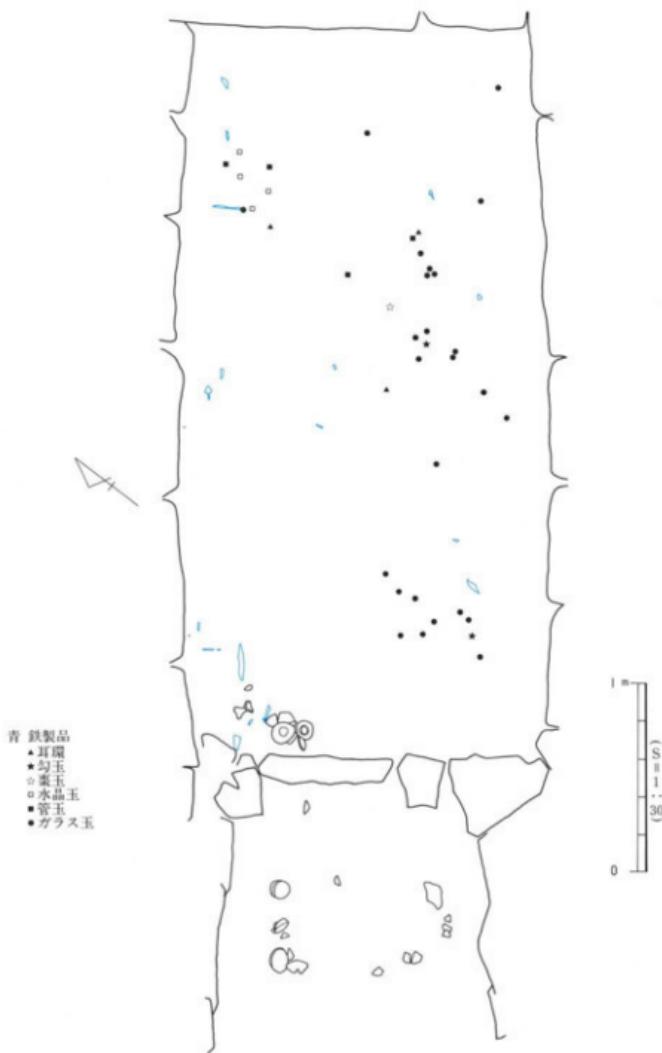


第31图 1号填测量图



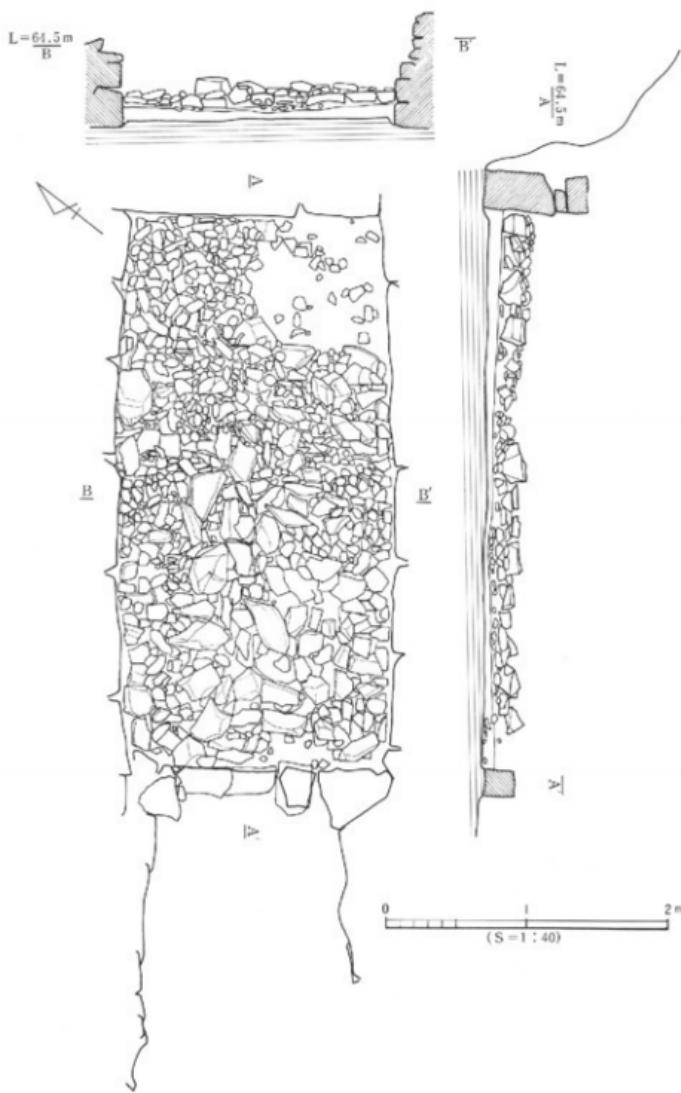
第32图 1号填土层图

北部の調査

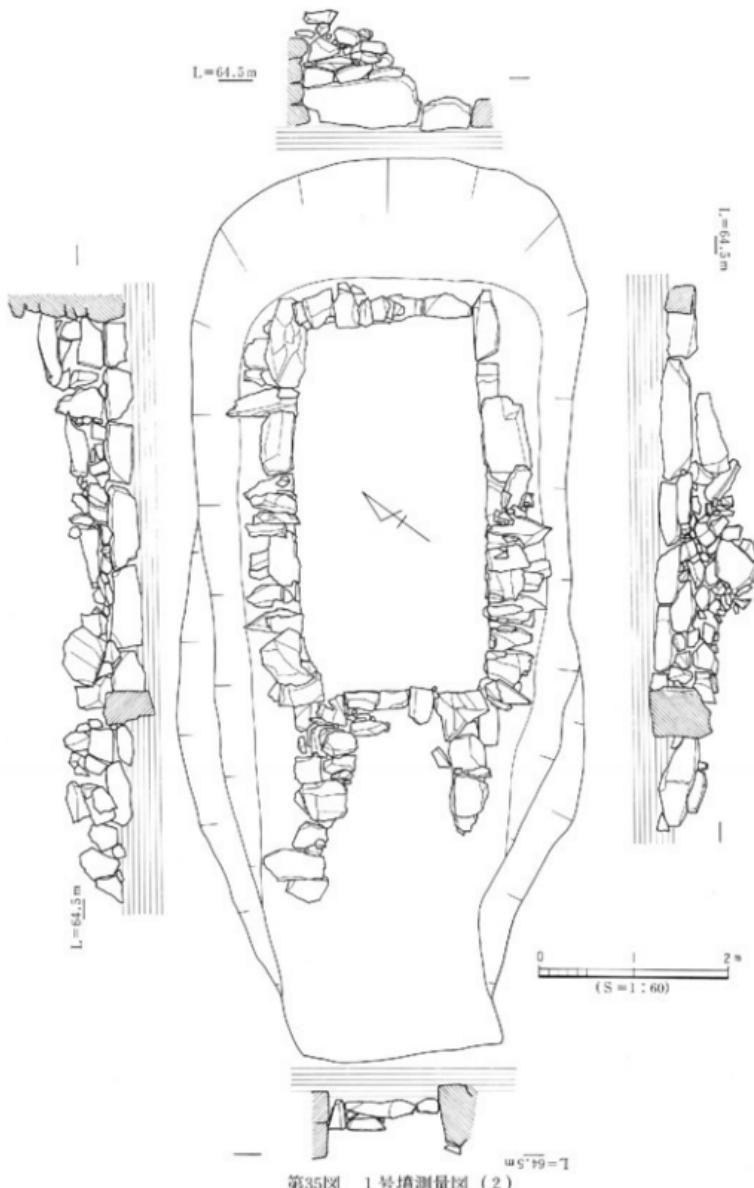


第33図 1号墳遺物出土状況

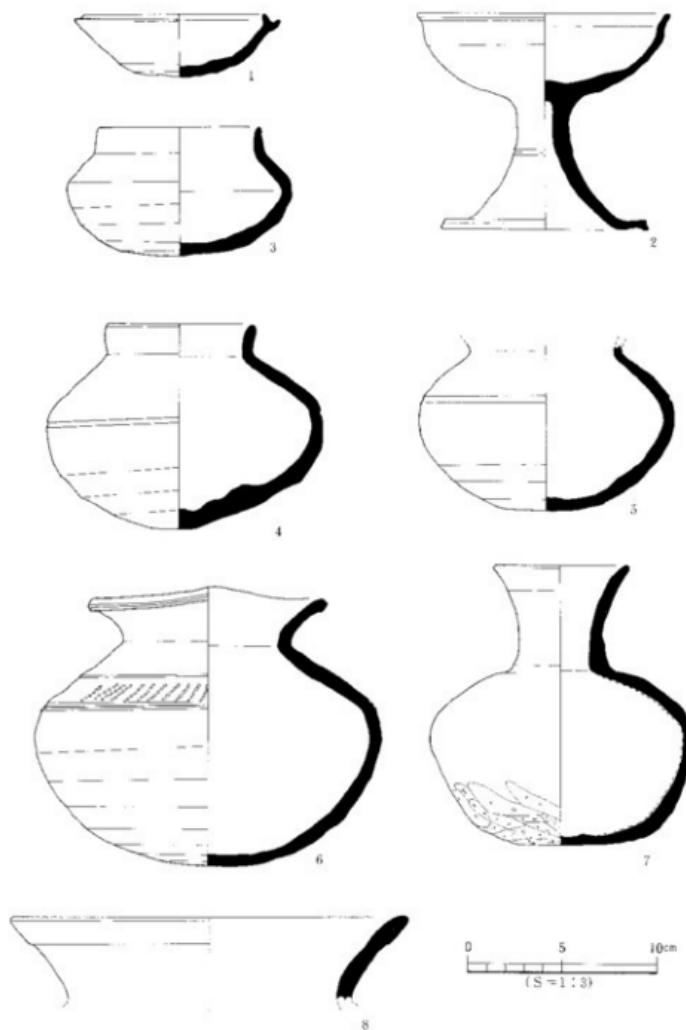
客谷古墳群B地区



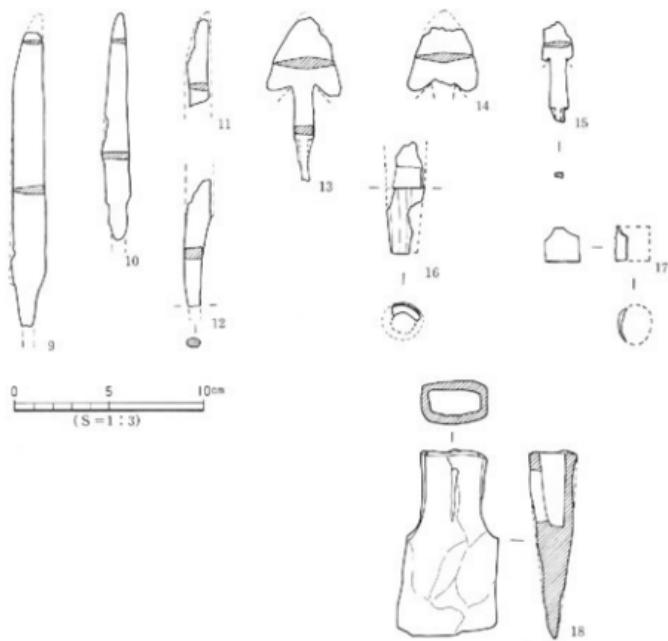
第34図 1号墳測量図(1)



第35图 1号填测量图 (2)



第36図 1号墳玄室出土遺物実測図(1)

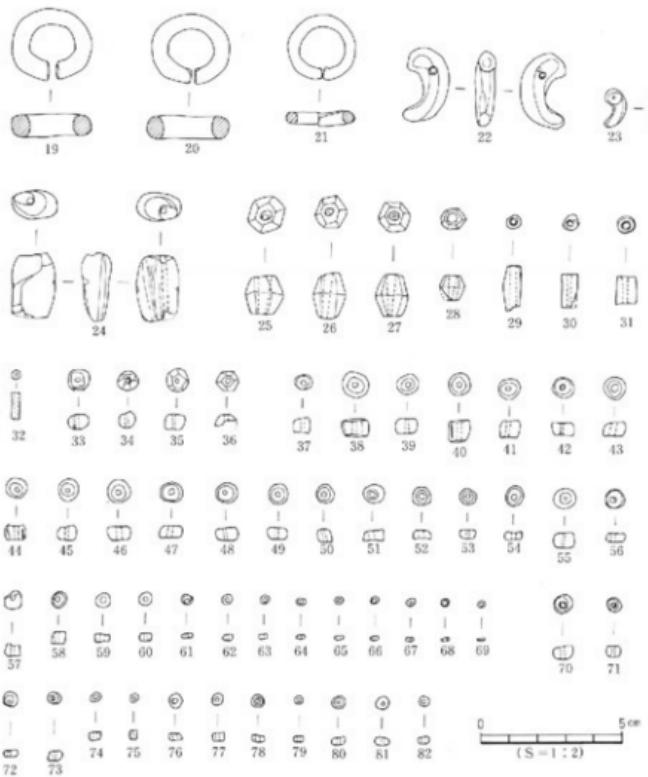


第37図 1号墳玄室出土遺物実測図(2)

耳環 (19~21) 19・20は、銅芯に金被覆がなされる。19は金色を呈し、20は鈍い光沢を示す。19は長径2.8cm、20は2.9cmで、ほぼ同径を示し、玦状部の開きはやや異なる。厚さは19・20共に径8mmを測り、両者はセットになる耳環と思われる。21は、厚さ4mmと細く、やや折れ曲り、玦状部はくい違う。長径2.4cm、短径2.25cm、重さ3.12gとなる。

勾玉 (22・23) 22は硬玉質で、濃い緑の中に薄い緑色がみられる。長さ2.6cm、頭部径1.2cm、重さ3.83gである。穿孔は両面から行われ、片面には穿孔位置を変更した穴がみとめられる。23はミニチアで、緑灰色に近い色で硬玉質である。長さ1.4cm、頭部径6mmを測る。穿孔は片面から行われ、径は1.0~1.01mmが測られる。頭部両面は研磨がなされ、厚さが減じられ平滑面がつくられる。重さは0.54gが計られる。

囊玉 (24) 1点が出土している。24は暗褐色を呈し、重さ2.32gを計る。穿孔は一方からと思われる。亀裂があり剥離が多くみられるものである。



第38図 1号墳玄室出土遺物実測図（3）

水晶玉 (25~28) 6面体をなす切子玉である。28は端部が欠如する。穿孔はすべて一方向で、重さは25から順に、3.36 g、2.71 g、2.37 g、0.69 gが計測される。

管玉 (29~32) 4点がある。29を除いては硬玉質で、29は樹脂質と思われるものである。紡錘形で、円筒の中位は膨らみがみられる。長さ1.6 cm、重さ0.42 gを計り、色調は黒色の鈍い光りをもつものとなる。30は濃紺、31は濃い緑、32は灰緑色を示し、31は0.61 g、32は0.14 gを計る。31はやや白形を示し、切断面に丸さがみられる。

上製丸玉（33～36） 33～36は、横割れする性質がみられる。33は1部欠損品、34・35は完形品、36は半分が欠損するものである。穿孔は一方より行われる。重さは34が0.24g、35が0.36gを計る。茶褐色系の丸玉である。

ガラス丸玉（37～60・70・71） 37は紫紺色、51・70は薄青色、他は濃紺色の色調である。38・41・48・50・54・55の6点は紺色に白灰色の細かい縦線がはいる。重量は、38が最大で0.82g、以下最小の53は0.17gを計る。

ガラス小玉（61～69、72～82） 20点が出土した。大きさにおいて小玉の部類に入らない玉もみられるが、色調により小玉としたものもある。重量は、69の0.01g（最小）から、72の0.13g（最大）までがある。

2) 美道部出土品（第39図、図版46・47）

1. 須恵器

环身（83） 底部は丸みをもつ。口縁部はやや内湾し、口縁端部は丸くおさめる。底部はヘラ切りの後にナデ調整を行っている。

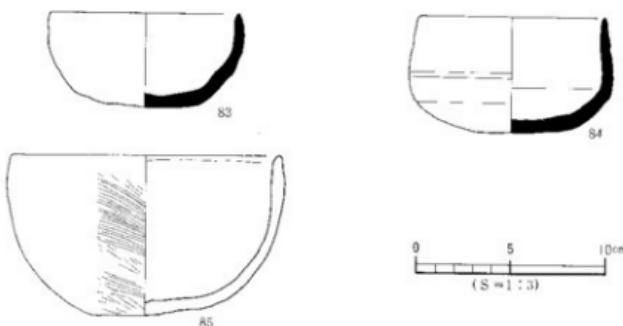
椀（84） 平らな底部から体部にかけて丸みをもちながら屈曲している。口縁部は内傾し、口縁端部は丸くおさめる。体部のほぼ中央に1条の沈線が巡る。その沈線の下から底部にかけての外面には回転ヘラ削り調整を施す。

2. 土師器

椀（85） 比較的平らな底部から体部にかけて丸みをもつ。口縁部はわずかに内湾し、口縁端部は丸くおさめる。外面には刷毛目調整（一部磨滅）、内面にはナデ調整が施される。

3) 周溝出土品（第40図、図版47）

1. 須恵器



第39図 1号墳美道出土遺物実測図

坪蓋（86） 天井部は欠損しているが、口縁部にかけてなだらかなカーブになっている。口縁部は端部付近でわずかに下方に屈曲し、内湾している。口縁端部は尖りぎみに丸くおさめている。内外とも回転ナデ調整を施す。

高环（87・88） 87は环部のみ。平らな底部から体部へかけて屈曲し、口縁部は外に開く。口縁端部は丸くおさめる。屈曲部には2条の凸線。88は高环の脚部。外反し、端部付近に1条の沈線が巡る。

越（89） 頸基部は比較的細い。扁球形の体部の最大径をはかる部分には、上下を2条の沈線ではさまれた刺突文からなる文様帶があり、その文様帶上に円孔を穿孔している。文様帶の下から底部にかけての体部外面にはカキ目調整が施されている。

台付椀（90） 脚部は外反し、端部付近でわずかに下方へ屈曲して段になる。端部は内傾し、くぼんで凹面をなしている。底部外面は回転ヘラ削りの後回転ナデ調整を施している。

提瓶（91・92） 91は鉤状の把手、92はボタン状の円板貼付が体部の肩にある。91の体部正面形は円形をし、回転ヘラ削り調整を施している。92の頸部はやや外反し、内外面とも回転ナデ調整を施している。

蓋（93～96） 口頸部はゆるやかに外反する。93は口縁端部のすぐ下に1条の凸線を巡らせている。94・95は口縁端部の下方をわずかに肥厚させる。頸部外面には沈線と波状文が施される。96は口頸部は短く、口縁端部は丸みをもつ。体部外面には平行叩き、内面には円弧叩きを施す。

2. 石製品（第41・42図、図版49）

子持勾玉（97） 97は、蛇紋岩製の子持ち勾玉である。ヒレは腹部に1ヶ、背部に3ヶ、側面に各2ヶつくられる。側面には、管状の文様が5ヶ、4ヶと左右の個数をえて施される。本体の長さは86cm、厚み2.8cmを測る。重さは150.56gである。

100は、埴丘南西部で周溝が存在したであろうと考えられる地点より出土した。縱長削片のサスカイトを使用し、周縁部は剥離調整が看取されるものである。長さ5.4cm、厚さ6mm、重さ5.4gが計測される完形品である。石鏡101は、周溝内北西部で出土した。凹基式三角形鏡で、先端部と基部を欠くものである。重さ0.657g、厚さ2.5mmを計測し、長さは2.5cmを推定している。

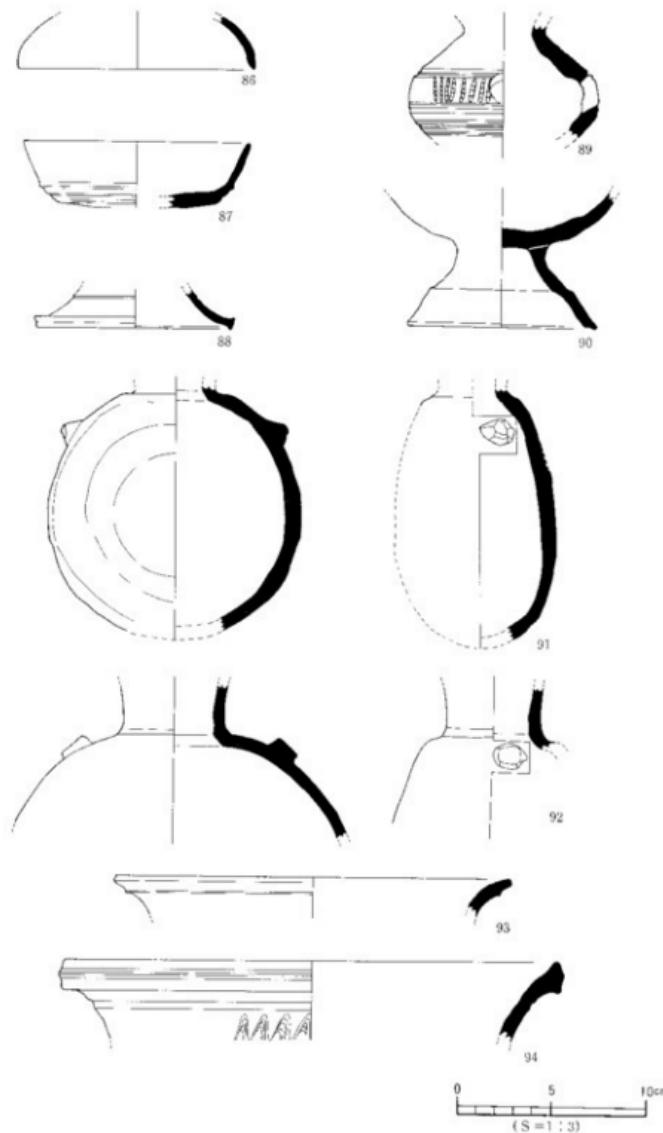
4) 1号墳地点不明の出土品（第41図、図版47）

1. 須恵器

高环（98） 口縁部はわずかに外反し、口縁端部は丸くおさめる。体部外面には2条の凸線が巡り、その下に波状文を施す。

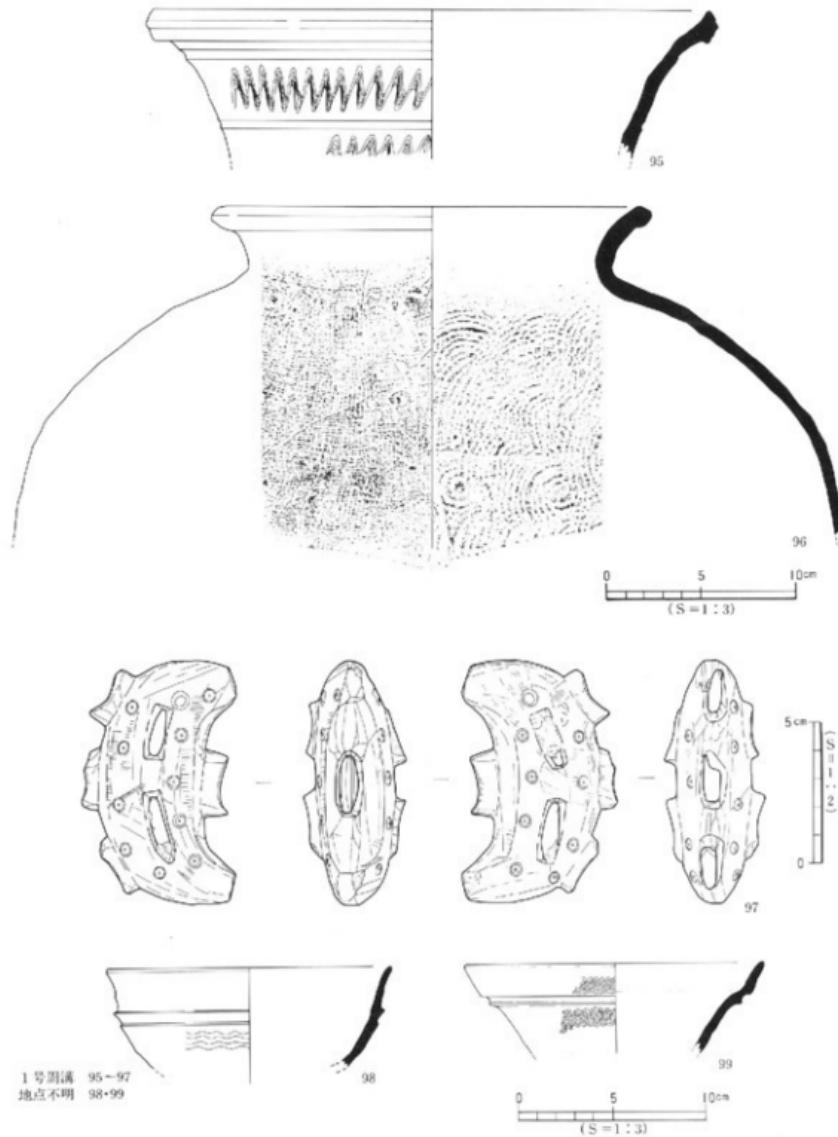
越（99） 口頸部は大きく開き、さらに段をなして外方へ屈曲させる。口縁部と頸部との境界には1条の凸線が巡る。口縁端部は尖りぎみに丸くおさめる。口縁部、頸部とも外面には波状文を施している。

北部の調査

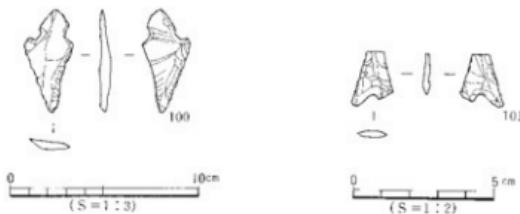


第40図 1号墳周溝出土遺物実測図

客谷古墳群B地区



第41図 1号墳周溝・出土地点不明遺物実測図



第42図 1号墳周溝出土遺物実測図

(3) 2号墳(第43・44図)

2号墳は1号墳の北20mの地点で、海拔70mに位置する。2基の石室をもち、石室は墳丘の中心軸よりやや西と東にズレて構築されている。開口は、ともに南を指向する。2号墳では、墳丘裾部外縁や、周溝内部にて土塼3基(SK1~3)、祭祀的造構2基(SX1+2)、集石2群が検出されている。さらに、墳丘外造構として、南西裾部で不定形の掘り込み(SK4+5)2基と柱穴(P1~3)3基を検出した。

墳丘は東面の丘陵中腹部をL字状にカットし、平坦部を造り、墳丘と周溝を構築している。

周溝は、北向は削平を受け、西面は谷筋を利用し、周溝にした様相が窺える。

墳丘は、現存で東西15mが測られる。墳丘の盛り土は、基底部がわずかに残存するにすぎない。

1) A石室(第45~47図)

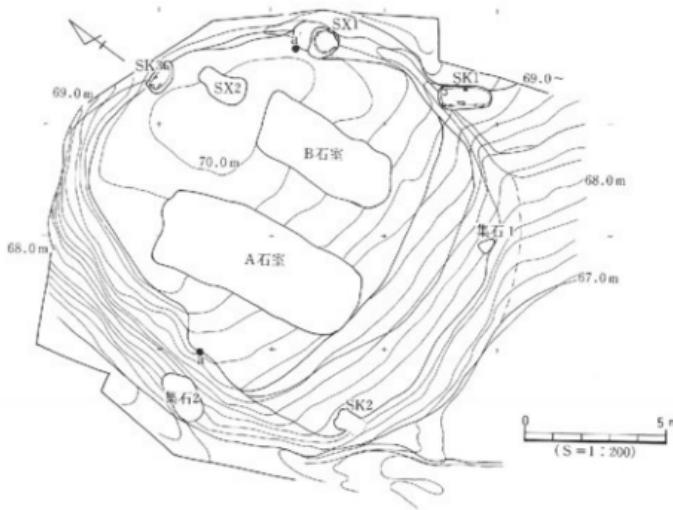
A石室は、主軸をN2°Wにとる南開口の横穴式石室である。石室長5.5m、玄室長3.0m、幅1.8m、羨道部長1.7m、幅90cmである。天井部は削平され不明で、石室はやや小振りの安山岩割石を主に小口積される。玄門柱をもたない玄門部は小口横積され、玄室床面との比高差は50cmが測られる。床面には砂岩小角礫と花崗岩円礫を併用し敷きつめられる。

羨道部は再構築した可能性があり、片袖式への移行がみられる石室である。羨道部の左側壁は内側に狹めた状況をそのまま残している。

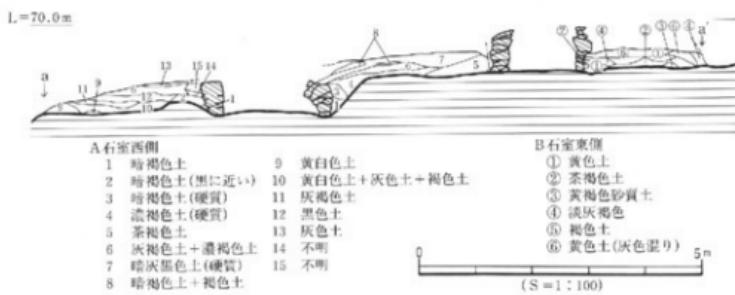
また、第47図に示すように羨道部床面には平面が二等辺三角形状の掘り込みが検出されている。掘り込みは閉塞口より更に玄室に向かって延び、掘り込みは最大で幅1.1m、深さ80cmの規模となる。南端の基底部両縁には、扁平な砂岩礫が据置きされている。この特異な状況は当地域では初見であり判断は難しく、再検討をする掘り込みである。

出土遺物は羨道部の掘り込みの北部先端で勾玉が1点出土している(第45図)。この勾玉は、本来は玄室内の遺物と考えられ、持ち出しされた様子が窺える。

客谷古墳群B地区



第43図 2号墳遺構配置図



第44図 2号墳土層図

遺物の出土状況（第45図）

遺物は第45図に示すように、玄室内中央より奥に、遺存状況があまり良くない遺骸がかたずけられた状況で検出されている。頭骨や歯は検出されず、残存する人骨の量から追葬がなされたものと思われる。人骨は白骨化しておらず、むしろ黒ずんでいる。

その他遺物は、須恵器長頸壺が玄室奥壁左隅にみられ、ほぼ原位置と思われる。その他の遺物は玄室全面に点在の状況で出土した。奥壁に近い位置に武器・工具類の鉄製品が出土した。さらにこれより左奥部に須恵器片が点在、右奥部に玉類（ガラス小玉）、中央部にやや距離をおいて三点の耳環や須恵器壺・壺、後方寄りに玉類の一群が出土した。

土器には須恵器台付長頸壺1点、須恵器高壺1点の他、須恵器片や土師器片がある。装飾品には耳環3点、滑石製白玉5点、ガラス玉9点、管玉2点、鉄製品では鍊1点がある。その他図示されない革の細片も出土している。

出土土器

須恵器（第48図、図版50）

高壺（102） 平らな壺底部から屈曲した体部は直上よりも若干外へ開く。口縁部はわずかに外反し、口縁端部は丸くおさめる。体部外面にはやや鈍い稜が2条巡っている。脚基部は細くラッパ状に開くが、端部は欠損しており不明。脚部の中位には浅い沈線が2条巡る。長方形の2段透かしは2方向にある。

短頸壺（103） 扁球形の体部から短く口頸部が直立し、口縁端部は丸くおさめる。

台付長頸壺（104） 扁球形の体部から直立した頸部は、口縁部にかけて外反する。口縁端部は丸くおさめる。頸部の中位に2条の沈線が巡り、体部には上下に1条の沈線を巡らせた刺文突が施される。脚部は外反して開き、端部付近でわずかに下方に屈曲して段をなし、端部は内傾している。屈曲部には1条の沈線が巡る。

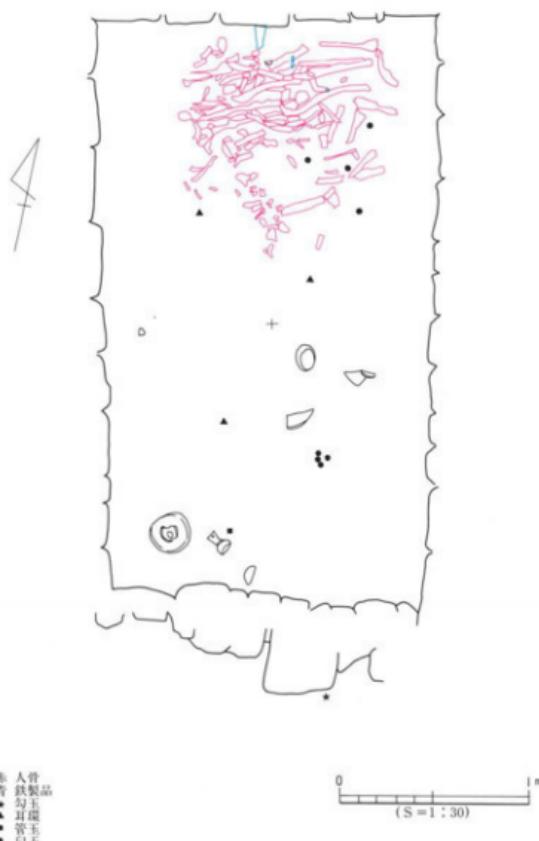
装身具（第49図、図版50）

A石室からは、耳環3点、滑石製白玉5点、ガラス玉9点、管玉2点が出土し、水洗い中に管玉と丸玉の2点が検出された。

耳環（105～107） 105・106は、セット想定の耳環で、金被覆部が僅かに残存する。鋳化が進み、剥離も著しい。105の重さは9.13g、106は10.86gを計り、両者の長径と厚さはほぼ同計となる。107は、前者2点に比べ細い耳環である。長径2.9cm、厚さ5mm、重さ10gを計る。金被覆は剥離痕を残しており僅かに看取される。

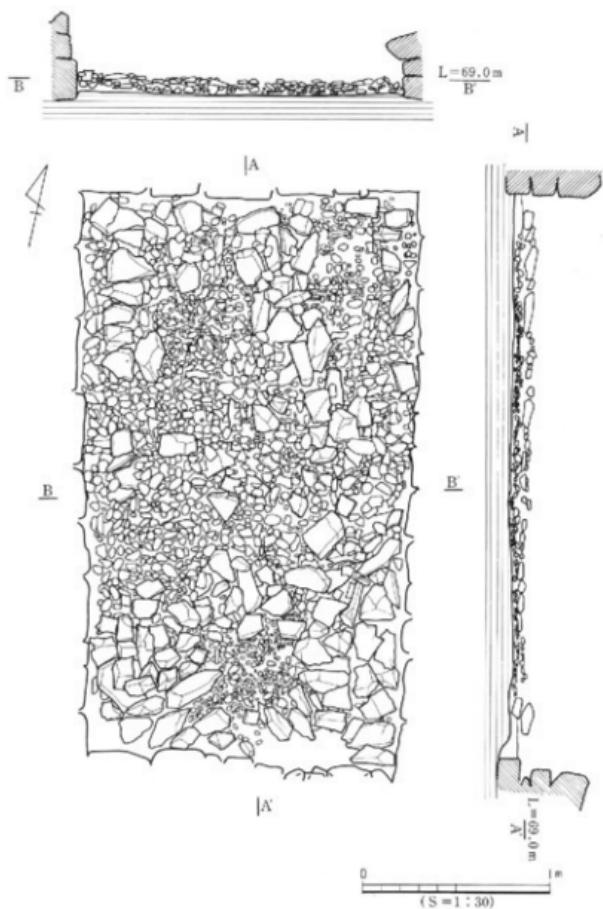
滑石製白玉（110～114） 110～114は、厚さ6～6.5mmを測る。カット面は比較的平滑となる。

客谷古墳群B地区



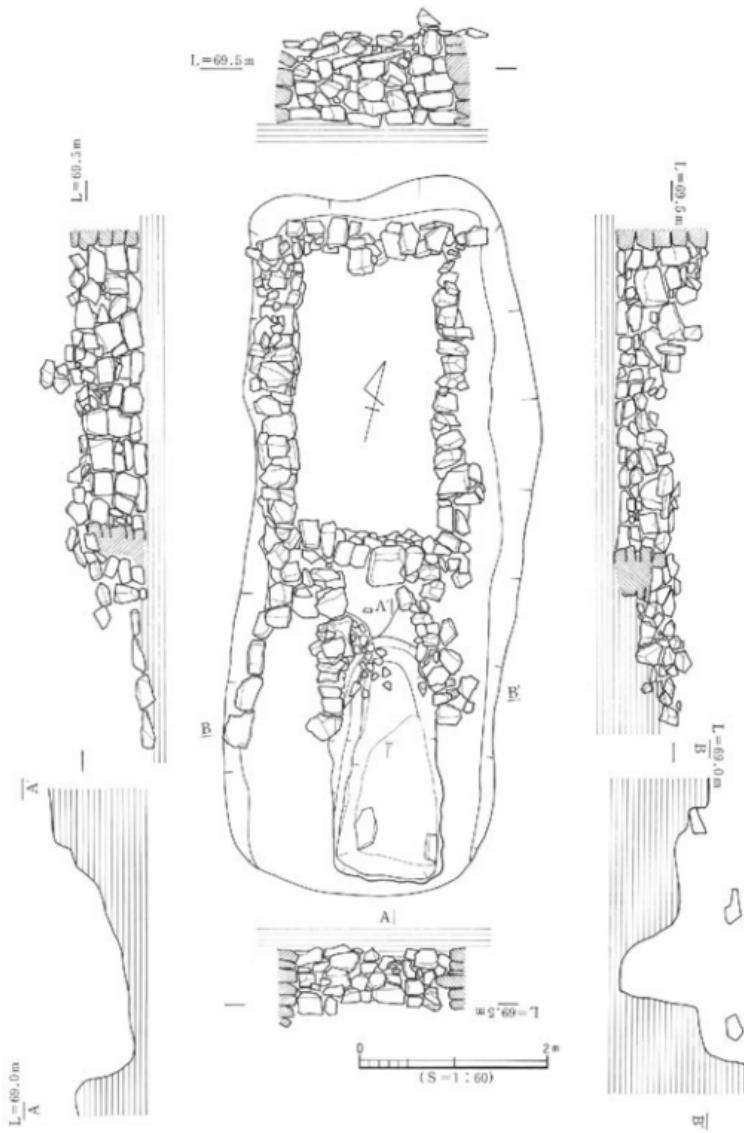
第45図 2号墳A石室遺物出土状況

北部の調査

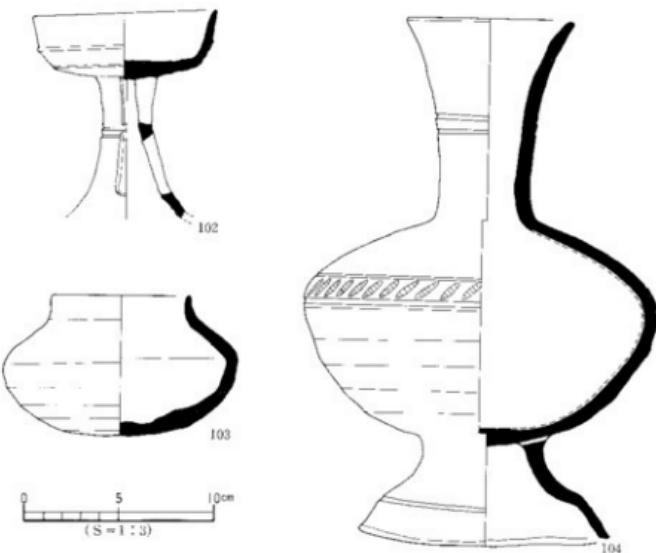


第46図 2号墳A石室測量図(1)

客谷古墳群B地区



第47图 2号墳A石室測量図(2)



第48図 2号墳A石室出土遺物実測図(1)

ガラス丸玉 (115) 115は濃紺色で、重さ 0.26 g を計り、穿孔は片面よりなされる。

ガラス小玉 (116~122) 116~122の色調は、122は緑色を呈し、その他は半透明の水色である。重さは122が最も重く 0.065 g を測り、121が最も軽い 0.038 g で、その他の重さは平均値 0.050 g となる。

管玉 (123) 123は長さ 5.5 mm、厚さ 3.0 mm、重さ 0.08 g で、淡い灰緑色を示す。穿孔は片面より行われる。

124の管玉と109の丸玉は玄室の埋土を水洗いし検出したものである。124は緑色で、端部を欠損する。穿孔径は 1.5 mm を測る。重さは現存で 0.062 g を計る。109は硬玉質で、鮮明な緑色を示す。片面には自然の凹部がみられ、形状はややイビツとなる。幅 9 mm、厚さ 7.5 mm、重さ 0.65 g を計る。側面には研磨痕がみられ、穿孔は両面から行われる。

鉄製品 (第49図、図版50)

A石室出土の鉄製品は、刀子と鎌の2点である。

刀子 (126) 126は、身部中程から刀先にかけて折損するものである。身部と茎の境には、柄巻きの金具が残存する。茎長 4.3 cm の内 1.1 cm の幅をもつ金具には、その内側に木質が

残存する。木製の柄の装着が想定される。身部は幅1.2cm、厚さ(棟)4mmで、断面形は二等辺三角形を呈し、茎断面は長方形を示す。

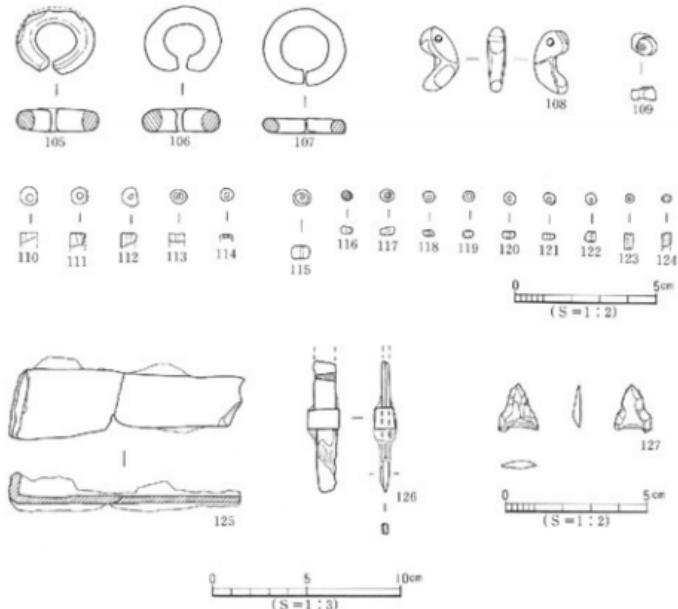
鎌(125) 125は、曲刃形と思われるが、折損し定かでない。鋒化が著しく鉄芯部も薄くなる。着柄部の折り返しは、僅かに内傾ぎみにつくられる。残存全長12cm、最大幅3.5cm、厚さ5mm、重さ69.684gをはかる。

石製品(第49図)

石鎌(127)が玄室内から1点出土している。127は凹基式三角形鎌で、長さ1.5cm、茎部1.4cm、重さ0.508gをはかる。石材はサヌカイトで、剥離は前面に偏り、背面には自然面が残される。床面直上より出土しており、石室築造時に混入したものと考えられる。

羨道部出土品

羨道部では勾玉1点(108)が出土している。108は硬玉製で、色彩は白灰色と淡緑色とかなり、色調は淡いものとなる。長さ2.25cm、頭部径8mm、重さ2.59gをはかる。穿孔は片面から行われる。



第49図 2号墳A石室出土遺物実測図(2)

2) B石室(第50・51図)

A石室に並列して東側にあるB石室(第43図)は、A石室に比べて規模は小さく、主軸は磁北に近くN2°Eをとっている。南に開口する両袖の横穴式石室は、石室長4.0m、玄室長2.75m、幅1.2m、玄門幅1.1m、渓道部長1.0m、幅1.1mが測られる。石室は前述の1号墳の石室や2号A石室に比べてやや小型である。石室は大きく削平を受けており、部分的に根石さえも抜き取られている(第50図)。側壁には割石を用い小口横積し、意識的な玄門柱はみられない。玄門部と玄室床面との比高差は15cm前後が測られる。床面には砂岩角礫と円礫が敷きつめられる。玄室床面に敷かれた円礫は、玄室の北半部と南半部では円礫の大きさに異なりがみられる。北半部はやや大きめの円礫がみられ、南半部は小型の円礫が用いられている。奥壁右隅は外に向けやや張り出している。石室のうらごめには、東側では黄色土と褐色土を用いる。A石室と接する西側は、A・B石室築造の前後関係は未確認となったが、A石室西側と同色調の暗褐色土や黒色土が検出されている。全体的にみて粗雑な造りがみられる石室である。遺物は玄室内で須恵器壺・翫・壺・提瓶・土師器壺の他、装飾品として管玉1点が出土している。

出土土器

須恵器(第52図、図版51)

壺蓋(129) 天井部と口縁部の境界は浅く凹線状にくぼむ。口縁部は端部付近でやや内弯し、端部は丸くおさめる。

环身(130・131) たちあがりは短く内傾し、口縁端部は丸くおさめる(131)か、尖りぎみに丸くおさめる(130)。受部は比較的長く上外方へのび、43は受部端がわずかに沈線状にくぼむ。

翫(132) 口頭部は外反し、頭端部で屈曲して段をなし、口縁部は外方へのびる。頭端部には1条の凸線が巡る。口縁端部は丸くおさめる。口縁部、頭部とも外面に波状文を施し、頭部はその下に沈線が2条巡る。

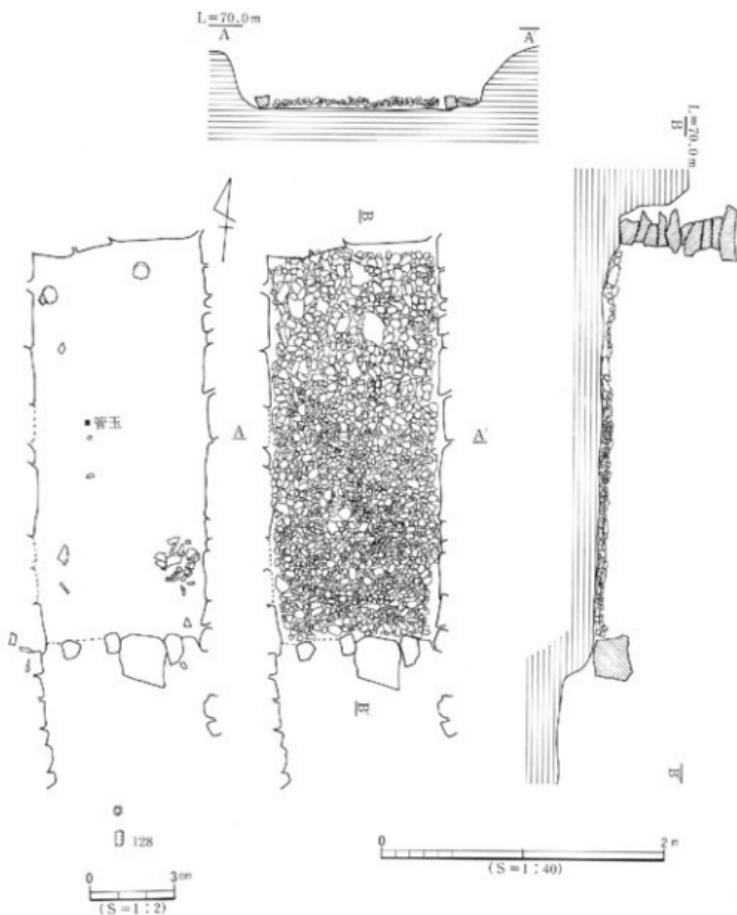
短頭壺(133) 扁球形の体部から口頭部は短く直立する。口縁端部は丸くおさめる。体部の最大径から上部はカキ目調整、下部は回転ヘラ削り調整を施している。

提瓶(134) 体部正面形は円形。側面形は片面が凸面、一方が平坦になる。肩のところに把手貼付痕がある。口頭部は外反し、さらに口縁部は外方へ屈曲する。口縁端部は下方へわざかに肥厚させ、端部外面には2条の沈線が巡る。体部の凸面は回転カキ目、平坦面は回転ヘラ削り、側面は回転ナデ調整を施している。

土師器

短頭壺(135) 体部の肩の張りは弱い。口頭部は短く直立し、口縁端部は尖りぎみに丸くおさめる。外面は磨減しているがナデ調整が認められ、内面は磨減のため調整は不明である。

客谷古墳群B地区



第50図 2号墳B石室測量図(1)・遺物出土状況

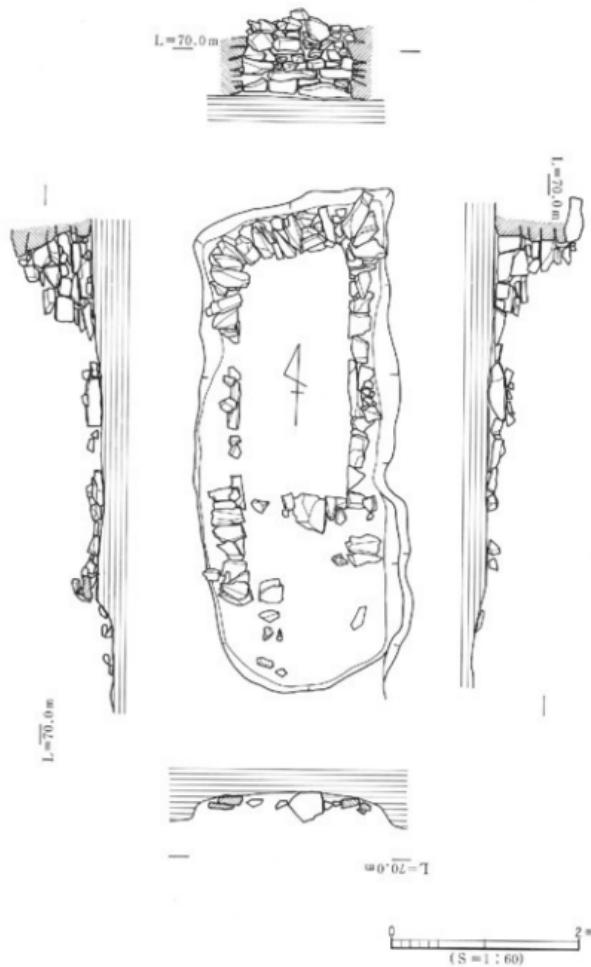
装身具

管玉 (第50図)

B石室における装身具は、図示する小型の管玉1点に限られる。

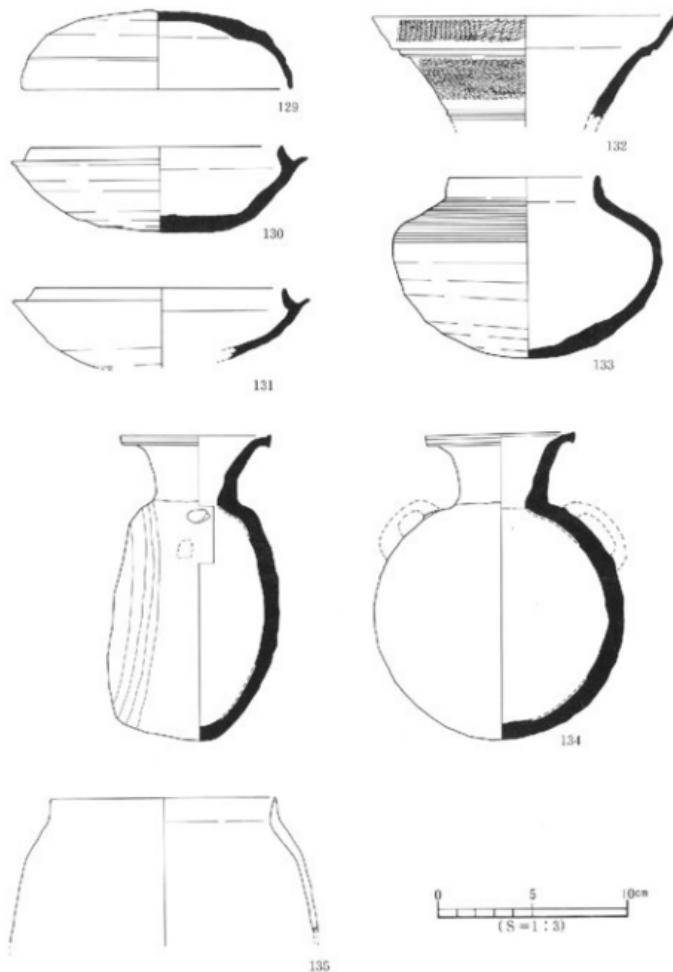
管玉128は緑色を呈し、長さ5.5 mm、厚さ3.2 mm、重さ0.075 gをはかる。穿孔は一方に向より行われ、径は1.5 mmと1.2 mmが測られる。

北 部 の 調 査



第51図 2号墳B石室測量図(2)

客谷古墳群B地区



第52図 2号墳B石室出土遺物実測図

北部の調査

2号墳丘部（周溝内かは不明）出土土器（第53図）

坏身（136） たちあがりは内傾し、端部は丸くおさめる。受部は上外方へ短くのび、端部は丸い。

広口壺（137） 扁球形の体部から口頸部は短く外反する。口縁端部は尖りぎみだがや丸みをもつ。底部外面には回転ヘラ削り調整、体部外面には回転カキ目調整を施している。

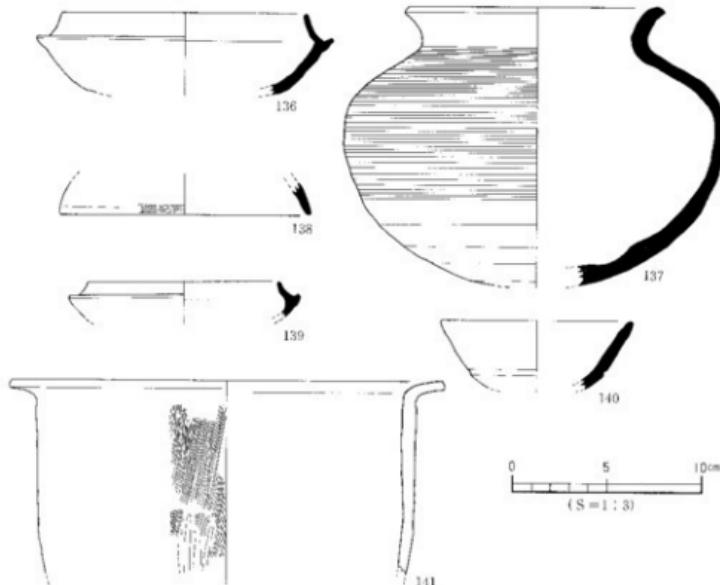
2号墳地点不明出土土器

坏蓋（138） 口縁部は外に広がり、口縁端部は丸くおさめる。口縁端部外面には幅4mm程のくし状のもので刻んだような線が認められる。

坏身（139・140） 139のたちあがりは短く内傾し、受部は上方に短くのびる。端部は丸くおさめる。体部外面は磨滅の為調整不明。140の口縁部は外に開き、口縁端部は丸くおさめる。底部と体部の境界あたりに1条の沈線が巡る。

2号B石室掘り込み部出土土器

甕（141） 残存している体部は口縁部へかけて直立ぎみに立ち上がり、口縁部は外方へ直角に近く屈曲する。体部外面の上半は縱方向の刷毛目調整、下半は磨き調整を施し、内面はナデ調整を施す。



第53図 2号墳丘部出土遺物実測図

3) 2号墳丘に伴う遺構（土壤、祭祀的遺構、集石）

土壤（第43図）

石室を中心にして周辺部検出の土壙は、墳丘東部の周溝外縁部のSK1、墳丘西裾部のSK2、北部周溝内縁部のSK3の3基である。

SK1（第54図）

SK1は長軸を南北にとる長方形の掘り込みで、長径1.8m、短径80cmが測られる。掘り込み内部には、石を使用した蓋を想定させる石が残存している。奥壁には径20cm前後の角礫を縱に据えつけ、左側壁にもほぼ同等の角礫が配置されている。右側壁は削平をうけ原形をとどめていないが、左壁と同形になるものと推定される。南では段状の掘り込みがみられる。埋土は上部に暗褐色土と褐色土の混合、下部には薄褐色土の堆積がみられる。

SK2（第55図）

SK2もSK1と同方位がみられる土壙である。南面は削平され長軸を測ることはできないが、推定値1m前後と思われる。短軸は70cmが測られ、南を除いて「コ」の字状に石積みが残存する。奥壁と左壁には30cm前後の角礫を部分的に横置きし、やや大きい礫を主体にして壁全体がつくられている。SK1に比べると粗雑さが窺えるものである。

SK3（第56図）

SK3は周溝が不明確になる地点で、墳丘北面で検出されている。長軸（1.1m）は東西方向を指し、南北短軸は60cmが測られる。方位は定かでないが掘り込みの形状から東を指向するものと推定される。壁体使用の角礫は、前者1基に比べ残存が悪い。

これら3基の土壙の深さは、残存ながらSK1が20cm、SK2が25cm、SK3が25cmとはほぼ同じ深さが測られ、遺物がみられないという共通性をもつ。

祭祀的遺構（第43図）

祭祀的遺構は、周溝内で1基（SX1）、B石室の北面墳丘上で1基（SX2）の計2基がある。

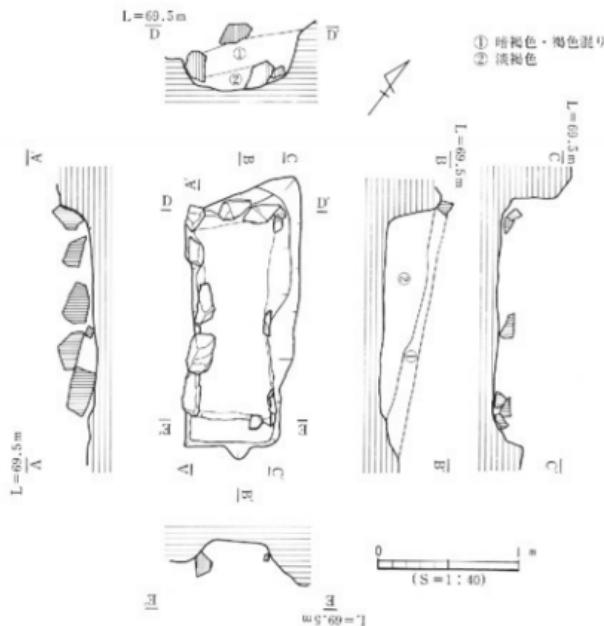
SX1（第57図）

SX1は、前述のSK1とSK3を結ぶ直線上の東寄り中間点、周溝基底部にある。梢円形の掘り込みをもち、南北1.35m、東西85cmで、深さ35cmが測られる。掘り込みからは、底部を下にした須恵器大甕（142）が出士している。甕の底部は掘り込み中心部よりややはずれ、斜めにずれた状況がみられる。甕内部には遺物はみられず、1点の角礫が内部底面で検出されている。

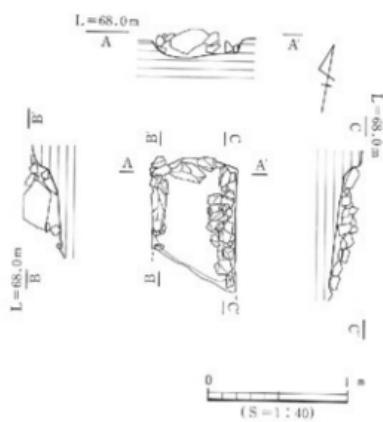
出土土器（第58図、図版52）

大甕（142） 体部はやや丸みをもち、最大径は体部の2／3以上に求められる。残存した頸部は外反している。体部外面は平行叩きを施し、底部はその後、半スリケシ調整を行い、内面は叩き後スリケシ調整を施している。

北部の調査

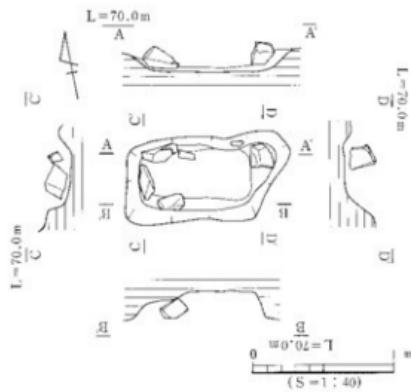


第54図 SK 1測量図

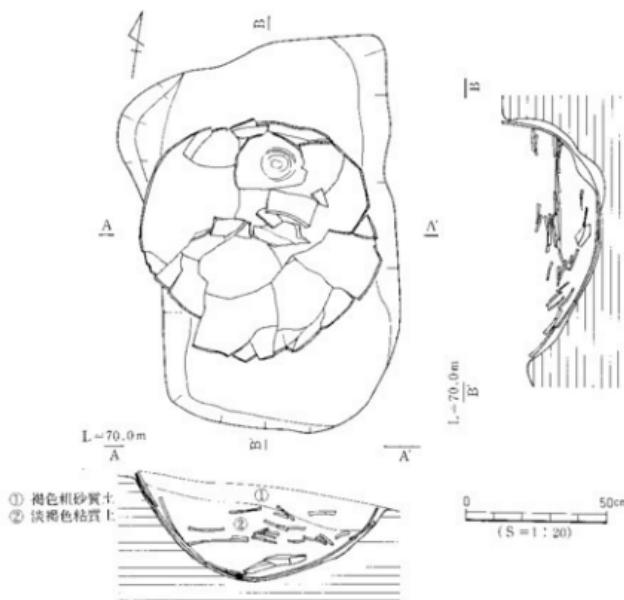


第55図 SK 2測量図

客谷古墳群B地区

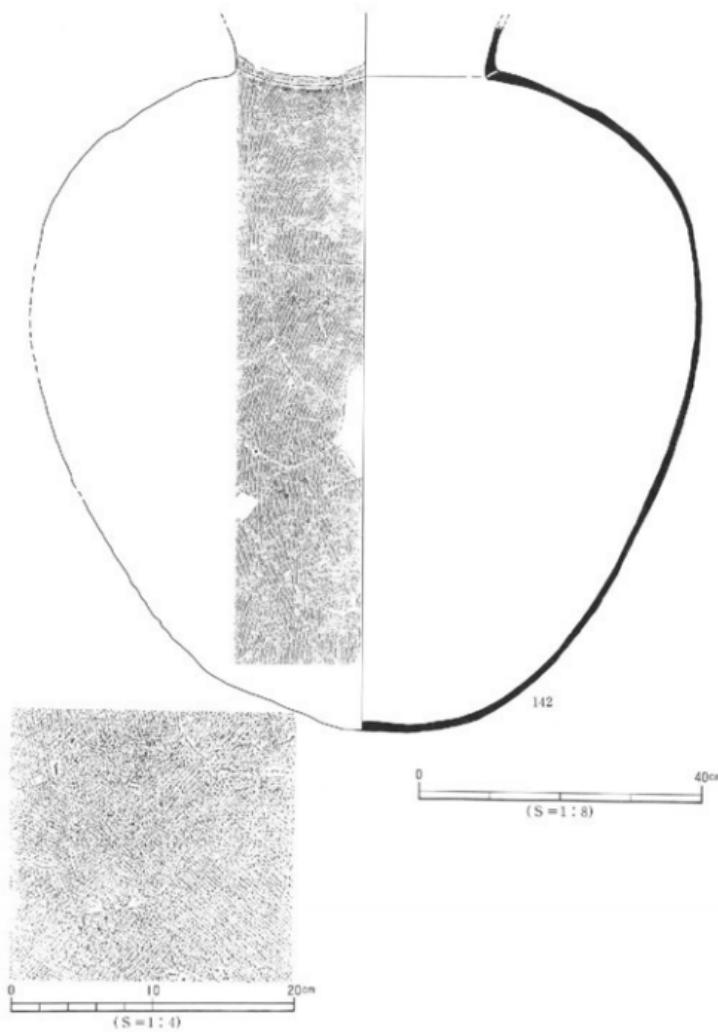


第56図 SK 3 測量図



第57図 SX 1 測量図

北部の調査



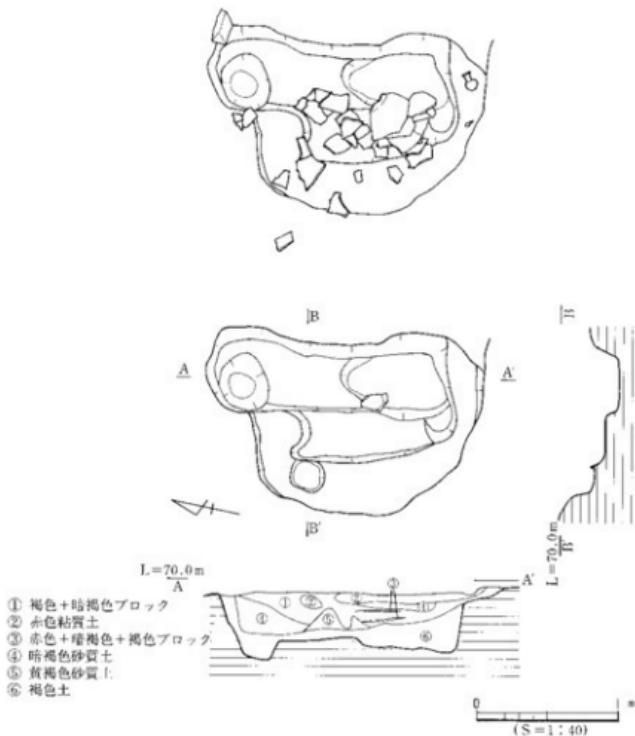
第58図 SX 1 出土遺物実測図

客谷古墳群B地区

S X 2 (第59・60図、図版53・54)

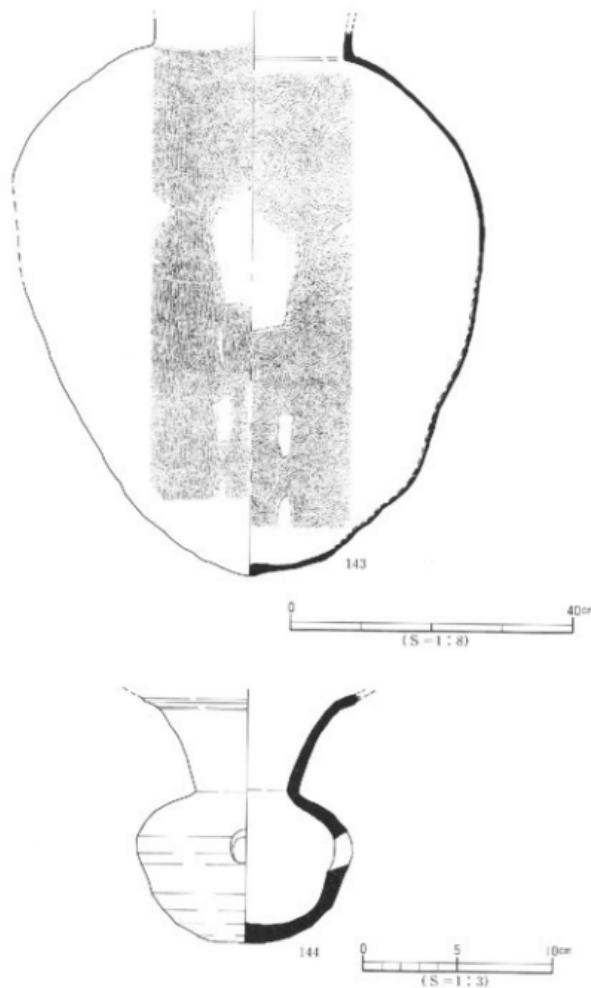
S X 2 は、2号B石室の北方の墳丘面にて検出された。不定形上端で、南北1.9m、東西1.2mを測る。上端は東半部は長方形、西半部は不定形な半円形の掘り込みとなる。東半部は南北1.7m、東西45cm、深さ30cm、西半部は東半分の掘り込みより浅いものとなる。從つて上端は、東半部の長方形の掘り込み部分が1段深く下る形状となる。長方形の掘り込み基底部には、北と南に小穴が2基検出された。西半部の半円形の掘り込みからは須恵器の大甕(143)と甕1点(144)が出上している。東半部からは遺物の出土がない。

大甕(143) 体部はやや細長く、最大径は体部の $2/3$ 以上に求められる。残存している頭部は直立ぎみ。体部外面には平行叩き、内面には円弧叩きを施している。

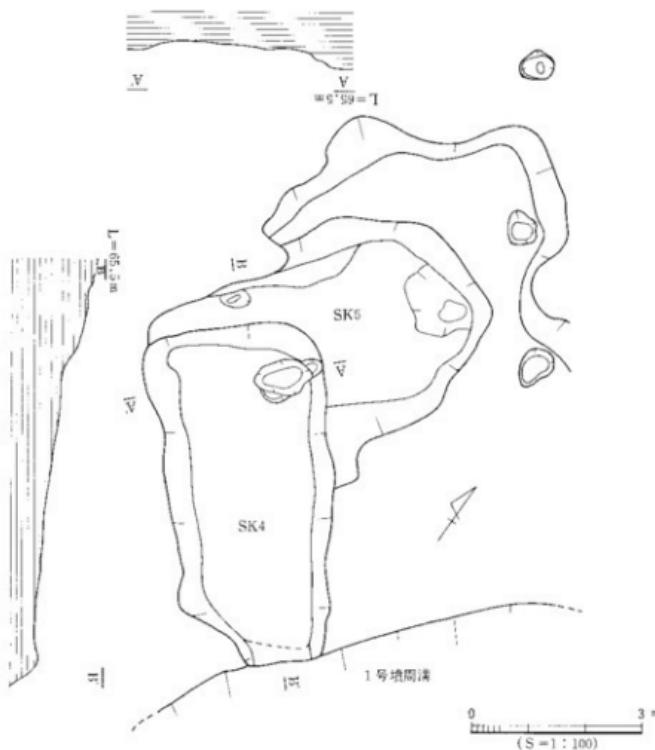


第59図 S X 2 測量図・遺物出土状況

北部の調査



第60図 SX 2 出土遺物実測図



第61図 SK4・5測量図

鰐(141) 口頭部は外反する。端部付近には1条の沈線が巡り、その上に1条の凸線が巡る。体部の最大径をはかるところに1個の円孔が穿孔される。最大径より下位の外面には回転ヘラ削りが施される。

集石（第30図）

集石は、墳丘南面と、墳丘西面の傾斜部で検出された。明確な掘り込みはない。集石はとともに墳丘盛土を除いて検出されている。前述の3基の土壙（SK1～3）との位置関係より、人為的行為の産物と解釈したものである。

(4) その他の遺構 (第61図)

上記の遺構の他、埴丘部に共存しない遺構がある。1号墳の周溝北縁と、2号墳丘の南西裾部の傾斜地に不定形の掘り込み (SK 4・5) が検出された。

SK 4は、1号墳の周溝の北縁に接している。不定形な長方形を呈し南北5m、東西2・3mを測る。なお、土壌群の西北域では、第67図に示す石製品、石斧、石鎌、サヌカイト、土師器、須恵器、弥生上器片が出土している。

2号墳丘外南西裾部 (グリット) 出土土器 (第66図、図版54)

須恵器

环身 (146) たちあがりは短く内傾し、端部は尖りぎみに丸くおさめる。受部はやや上方に短くのびる。

臺 (147) 口頭部は短く外反し、口縁端部は下方に屈曲する。頭部外面にヘラ記号らしきものがみられる。

甕 (148~150) 148・149の口縁部は外に開き、口縁端部は下方へ屈曲する。150は口頭部が外反する。端部から外方へ屈曲させ肥厚し段になる。体部外面には叩き、内面には円弧叩きを施している。

3. トレンチ調査区

(1) トレンチ調査区の層位

トレンチは、第62・63図に示すように東側に5本 (ET 5~9)、西側に9本 (WT 1~9) の計14本を設定した。東側の本数が西側より少ないので、東側部に雑廐棄物投棄場が拡散する理由による。

東側斜面 (Eトレンチ)

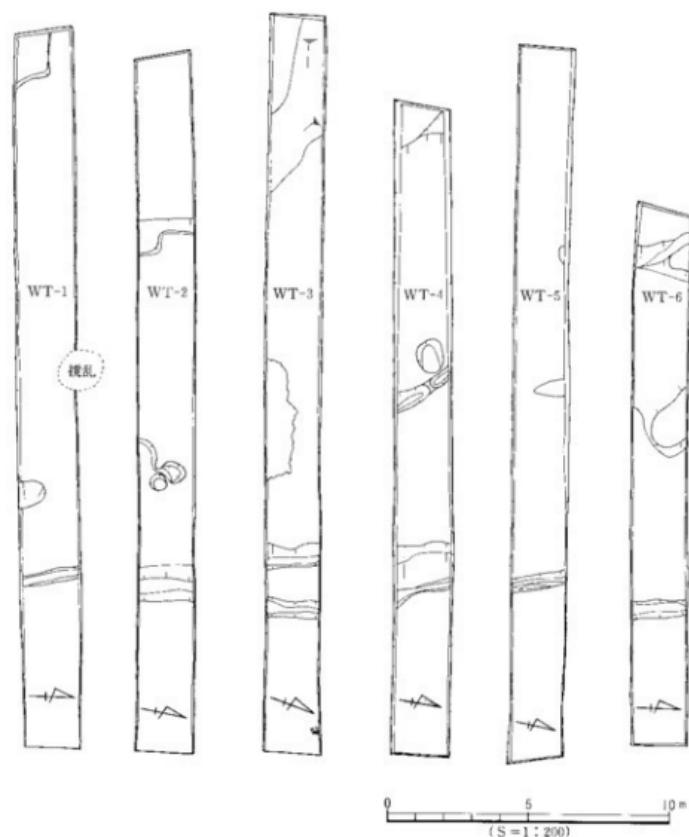
東斜面の堆積土は北域に薄く、南域に厚い状況にある。北のET 8では5層、南のET 5では8層の堆積がみられた。

ET 5 ET 5では、表土 (掘削土と腐葉土) 20cm、褐色土35cm、礫を含む赤褐色土30cm、同じく礫を含む黄褐色土25cm、灰褐色土 (帶状) 8cm、褐色土30cm、礫を含む黒色土20cm、暗褐色土5cmの8層が地山上に堆積している。

ET 8 ET 8の層位は、上から順に暗灰色表土25cm、黄褐色土20cm、茶褐色土30cm、淡褐色粘性土15cm、青灰砂質土10cmの堆積下部に地山が存在する。

また、斜面裾部の一部では小礫が混在する状況が多くみられる。記述を省略したET 6を含めた東側の傾斜地では、近世陶磁器片に混じって土師器 (10点)、須恵器 (7点)、弥生土器 (4点) が採集された。これらは、遺構に伴わず、磨滅した小片である。

客谷古墳群B地区



第62図 トレンチ測量図（1）

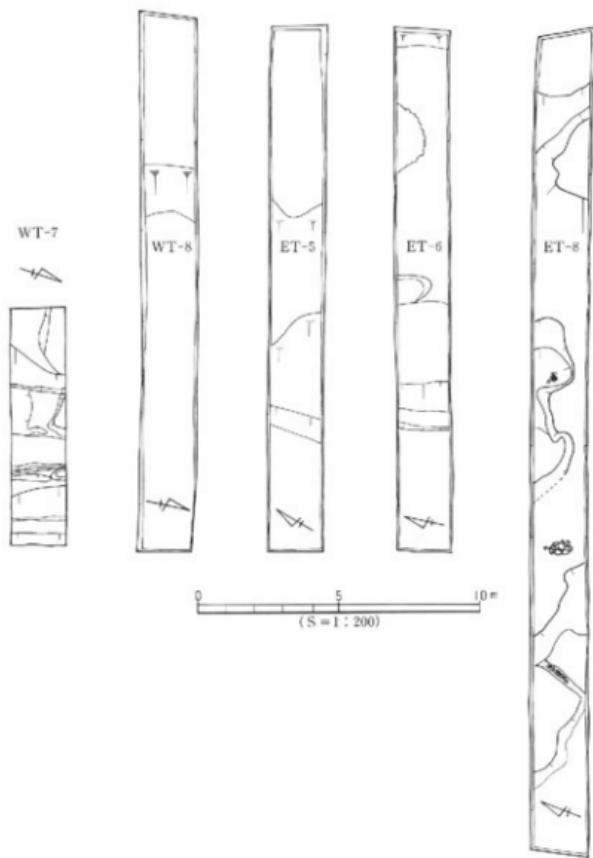
西側斜面（Wトレンチ）

西側も東側に類似した堆積状況が示された。南端のWT 1では7層の堆積がみられたが、上層は北に向かって減少し、北のトレンチでは平均5層の堆積となっている。

WT 1 WT 1（第62図）の層位は、上から耕作土15cm、疊混り灰褐色土15cm、黄褐色土30cm、礫を含む黄褐色土25cm、黃白色土15cm、疊混じり褐色土30cm、褐色粘質土25cmの7層が地山上に堆積している。

WT 4 西側の中央に位置するWT 4（第62図）では、WT 1でみられた3層黄褐色土が消え、変わって泥岩盤の地山となり、土壤堆積の違いがみとめられる。

トレンチ調査区



第63図 トレンチ測量図 (2)

WT 5 東側 E T 5 に相対する WT 5 の層位は、上部より腐葉土 8 cm、礫を含む黄褐色土 28 cm、黄茶褐色（混合土）30 cm、赤褐色土 35 cm で地山である赤褐色を呈する泥岩上に堆積する。

低湿地 E T 5 と WT 5 を結ぶ低湿地の層位は、上部より褐色砂質土 20 cm、褐色土 8 cm、褐色砂質土 10 cm、灰色混合の茶褐色粘性土 10 cm がみられ、東西両斜面とは異なる土壤堆積がみられる。

(2) トレンチ調査区の遺構

トレンチ調査区では、東側で集石2基、石を伴う溝1条、現代建物址1棟、西側で現代の境界溝1～2条、周溝状の掘り込みを検出した。

1) 東側斜面の遺構

E T 8 (第63図)

E T 8 は全長28.7m、幅2.0mで、東高西低となる。海拔は62～55mを示し、比高差7.0mが測られる。E T 8 西側では集石及び石を伴う溝が検出された。

東部のものをA、中央部のものをBとした。集石Aは径10cm前後、集石Bは径20cm前後の砂岩礫が不整然な状況で検出された。

石を伴う溝は、集石Bより更に西に位置し、南北方位をとる。検出長2m、幅25cm、深さ20cmが測られ、溝内部には10cm前後の角礫がみられた。石は溝全域にみられず、部分的に検出された。集石と同様に性格は不明である。

E T 8 出土の遺物は、遺構に伴わない。近世陶磁、土師器6点、須恵器4点、弥生土器1点が採集された。いづれも細片である。

E T 9 (第65図)

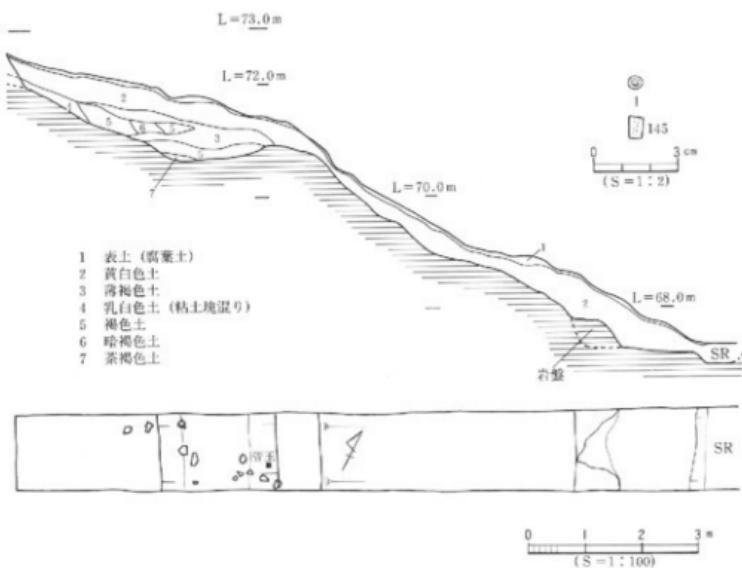
E T 9 では現代の建物址が検出された。建物址は湿地帯と扇状地形が接する地点にあり、傾斜地を削平した平坦な造成地にある。なお、この造成地を南北方向10m、幅1.9mの区画で調査したところ第65図に示すように地表下50cmの地山面で、北と南に溝2条、柱穴1基、角礫2群と不整形な掘り込み1基を検出した。溝2条のうち北の溝は、雨落ちを兼ねた排水溝、南の溝は湿地帯を巡る水路の一部と考えられる。掘り込みは中央部が浅い掘り込みで、壁部は不明確である。壁部には石もみられるが、意図的とは考えられない状態を示している。遺物は不整形掘り込みより古銭2枚がブリキ板とともに出土している。これ等の遺構は、近現代の遺構と考えられる。

2) 西側斜面の遺構

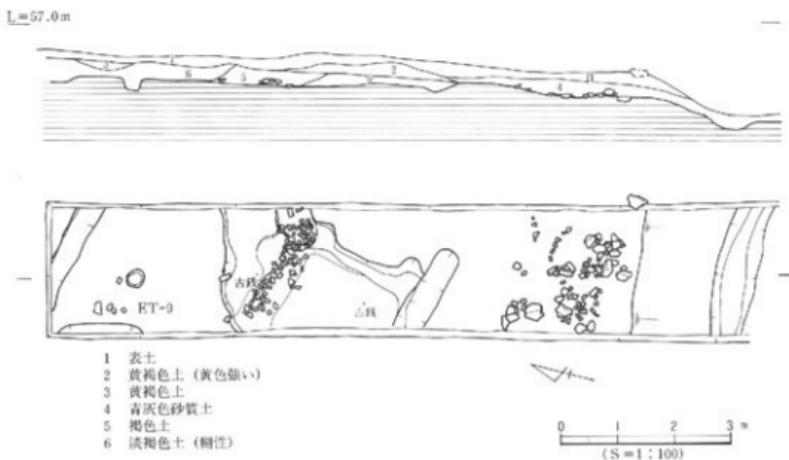
西斜面の遺構には、現代の境界溝2条と、古墳に関連すると思われる周溝状の掘り込みがある。境界溝はWT 2～3、WT 5で検出され、周溝状の掘り込みはWT 9にて検出されている。

溝は、谷部の湿地平坦部と西側段丘部との境界をなす溝であり、さらに配水を兼ねた側溝と思われるものである。WT 2・3 (第62図) の2条の溝は、南側裾部では1条化するものであると考えられる。溝は幅50cm、深さ10～30cmで、埋土は褐色砂質上の単一層である。伏流水を集めて現在も活用がみられるものである。

トレンチ調査図



第64図 WT 9 測量図・出土遺物実測図



第65図 ET 9 測量図

WT 9 (第64図)

WT 9は調査地北端部から南西に延びる分岐丘陵にあり、全長13.0m、幅1.3mの範囲である。西高東低で比高差5.2mを測る。周溝状の掘り込みは地表面より70cm下で検出し、幅2.0m、深さ30cmを測る。この掘り込みの基底面からは、角礫に混じって6世紀後半代の須恵器の环身と管玉1点が出土している。环身(151)は、たちあがりは短く内傾し、端部は尖りぎみに丸くおさめる。受部は短く、受部端には沈線状のくぼみがある。蓋(152)は、短頸壺の蓋。天井部から口縁部にかけて丸くなだらかになる。口縁端部は内傾して段になっている。この掘り込みの性格は、古墳の周溝が推定されるが断定できなかった。

なお、トレンチ調査区の北側は開発によって断崖状に削りとられているが、南側は手つかずで残されている。南側地域は今回の工事からはずされ現状保存されている。

3) 試掘溝出土土器

ET 10出土品 (第66図)

壺(155) 口部は短く外方へ開き、口縁端部は丸くおさめる。口縁部から体部にかけての外面には横方向の、体部にはナメの刷毛目調整を施している。

(3) その他の出土物 (第66図、図版54)

SK 4・5の北西部で出土した遺物である。

須恵器

高环(153) 脚部の端部付近のみ。大きく屈曲して広がり、端部は丸みをもつ。内外面とも回転ナデ調整を施す。

甕(154) 頸部はラッパ状に外反し、体部は球形をなす。頸部・体部とも外面には沈線を巡らせ、刺突文を施している。口縁部と底部が欠損。

この他、第67図に示す石器が採集されている。

伐採斧(156・157) 156は基部を欠損するものである。重さは246gである。157は伐採斧の刃部片である。重さは31gである。

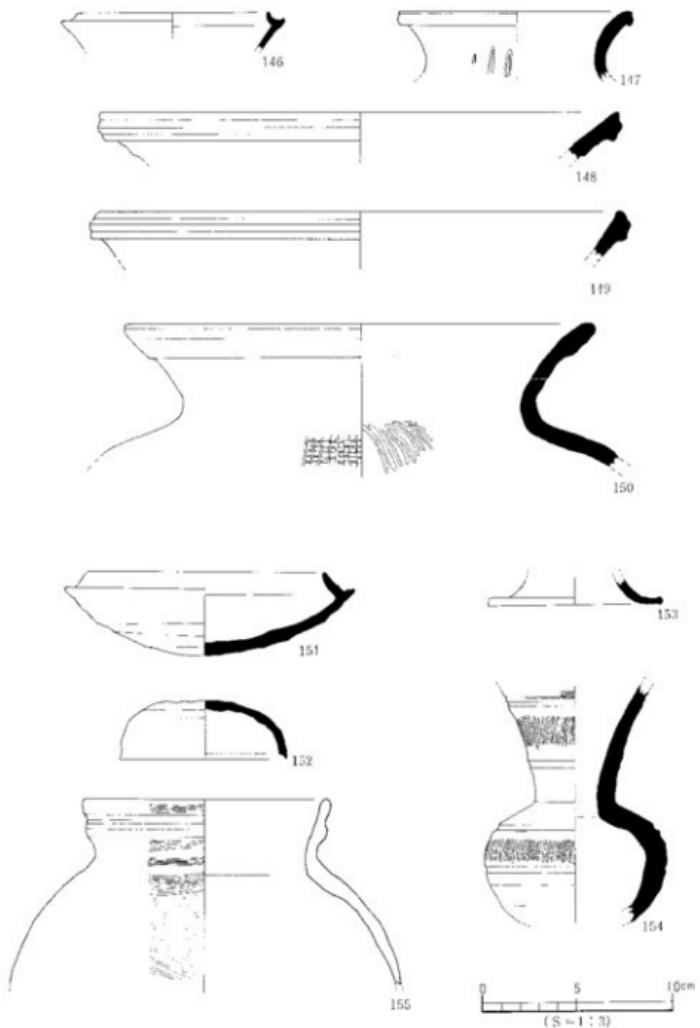
石鎌(163~168) 164は姫島産黒耀石で、他はサヌカイトを石材とする。

剝片(158~160) 158~160はサヌカイトの剥片である。158は刀器として使用可能な石器である。

チップ(161・162・169~175) 161・162・172はサヌカイト、169~171・173~175は姫島産黒耀石である。

以上のように客谷B地区の2/3をしめるトレンチ調査では、東西の傾斜地に古墳が存在しないことが明らかとなった。ただし、採集された遺物(現代陶磁器約120点及び瓦質土器15点、上飾器12点、須恵器18点、弥生土器6点)によって、周囲の遺跡の状況が想定される。弥生時代から古墳時代の遺物が東側に多く、西側に少ないという結果より、東側にある大峰ヶ丘陵の主丘陵部には弥生時代集落が広く展開していると推察される。

トレンチ調査区



第66図 出土遺物実測図 (1)



第67図 出土遺物実測図(2)

4. 結 び

客谷古墳B地区の調査は、支丘陵の傾斜面に包まれた湿地帯の谷部について調査を行った。その結果、斜面部では僅かながら、性格不明の集石や石を伴う溝と、暗褐色土や黒色土の上層を検出した。採集された土器は、谷底部を軸に東面と西面とでは、時期差が顕著に現われている。弥生土器は、主丘陵の裾部である傾斜地に多く、相対する分岐丘陵の裾部の傾斜地には須恵器が多く出土している。よって、主丘陵部には弥生時代集落が、支丘陵部には古墳群が存在することが想定される。

一方、湿地帯の谷部では、古墳2基とそれ等に伴う遺構等を検出した。

1号墳

1号墳は、谷部の最深部に立地するものであった。この立地は、墳丘の築造に大きく影響を与えていたことが調査により明らかとなった。傾斜地の高所部分をゆるやかに削り取り、盛土により段々に水平化し、石室を構築する方法を取るものであった。

石室は、床面より高さ約1m以上の部分は既に削平されているため、上部構造については明らかにすることはできなかった。平面形態をみると、両袖式の横穴式石室であることが分かり、羨道部は玄室床面よりわずかに上っていた。奥壁と側壁の最下段の石は、やや大きめで整然とした築造となるが、二段目以上はやや粗雑となっていた。これ等の築造は、平野の後期古墳に普遍的にみられるもので特別な構造をしたものではなかった。

遺物は、埋葬最終時の形態は既に残っていないかった。装飾器・鉄器等の小物品は玄室内に散在しており、須恵器は玄門の内外付近に集中していた。なお、土師器碗は玄室内と羨道部で出土したものが接合されたもので、追葬時の「カタツケ」の所産と考えられ、追葬であることを裏づける一つの資料である。

2号墳

2号墳は、一墳丘2石室という特異な石室構造をもっていた。さらに、墳丘内外に埋葬用の土壠と考えられるもの（SK1～3）や祭祀的性格の強い遺物（SX1・2）が検出されるなど、後期古墳についての資料が数多く明らかとなったことで評価されるものであろう。

一墳丘2石室は、松山平野では平野南にある砥部町大下田古墳2号墳で検出されている。また、客谷古墳群A地区にても、ややその様相は異なるが墳丘に2石室が存在している。今後、山間部や丘陵上の調査が進めば、類例は増加するものと思われる。今後の調査においては、2石室の築造方法特に、構築工程が明らかにされることを期待している。

各石室については、A石室は羨道部の改築と玄室奥に人骨が集められ所謂「カタツケ」的状況にあることより、追葬が行われていることは明らかであろう。ただし、出土物が散在し、須恵器は出土数が少なく、破片も多いため、最終埋葬の状況をとどめるものではないと思われる。羨道が改築されている状況が確認できたことは一つの成果と考えている。

客谷古墳群B地区

B石室は、石室の奥壁が側壁に対し直角に築造されず、よって石室平面形がやや異形となっている。これは、石室の掘り方が既に変形しており、それに準じたことによるものであり、築造にやや難な感がうかがえるものであった。

2号墳では、B石室の周辺で各種の遺構が検出された。SK1～3は、長方形の上墳で、側壁に沿い石がつめられていることより、埋葬施設と考えられる。ただし、出土物もなく各石室との時間的関係は明らかにできなかった。SX1・2は、大型甕と甕を出土しており、掘り方は墳丘を切っていることを確認したため、墳丘築造中もしくは築造後に、古墳ないしB石室に対して行われた祭祀的行為の所産と考えられた。当平野の古墳調査は、石室に主要な視点がおかれていたため、周辺部や墳丘祭祀についての資料が不足している。今回の資料は、稀少な資料として貴重なものであろう。

この他出土遺物として特筆されるものは子持ち勾玉があげられる。出土地点は、1号の北側周溝から出土している。この位置は、2号墳の石室開口地点でもあるため、子持ち勾玉の埋納古墳については2号墳であった可能性も充分にある。出土状況は良好ではなかったが、平野出土での例は数例であり、貴重なものといえるだろう。

今回の調査によって、客谷古墳群はA地区を含めると広範囲に渡り墓域が形成されていたことが想定されよう。各々の古墳についての比較分析はA地区の調査報告を待たなければならぬが、後期古墳の埋葬形態が知れる古墳群になり得るものと考えている。また、調査方法については、反省と課題を提示する結果となった調査であり、今後の調査に期待するところは大きい。

出土遺物観察表

遺物観察表一凡例一（松村 淳・平岡直美）

(1) 以下の表は、本調査出土遺物観察一覧である。

(2) 各記載について。

法量欄 () : 復元推定値

形態・施文欄 土器の各部位名称を略記。

例) 口→口縁部、胴中→胴部中位、柱→柱部、裾部、胴底→胴部→底部。

胎土・焼成欄 胎土欄では混和剤を略記した。

例) 砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土。() 中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例) 砂・長(1~4) 多→「1~4 mmの大砂粒・長石を多く含む」である。

焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良。

●表15 1号墳玄室出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		(外面) 色調 (内面)	土 焼成	備考	国版
				外 面	内 面				
1	16舟	口径 9.4 基高 3.4	たちあがりは唇部に現く、輪郭は丸くおさめる。基高のひずみが大きい。	④回転ナゲ ⑤回転ヘラ削	回転ナゲ	浅褐色	良 ○		46
2	無蓋 萬字	口径 13.3 基高 11.6 底径口1.0	輪郭口縁端部は外反する。輪郭はラッパ状と削き、外側には複数の凹条ある。	回転ナゲ	回転ナゲ	灰色	良 ○		46
3	被頭蓋	口径 8.6 基高 5.8	輪郭形の体部から口縁部は丸く直立し、口縁底部は丸くおさめる。	①直立 ②丸く直立 ③口縁底部は丸くおさめる。	回転ナゲ	灰褐色	良 ◎		46
4	被頭蓋	口径 7.9 基高 10.8	口縁部は板で直立する。輪郭部には1条の回転。	④直立 ⑤回転ナゲ ⑥直立 ⑦回転ヘラ削	回転ナゲ	灰褐色	良 ◎		
5	被頭蓋	基高 8.75	輪郭形の体部の中段や口縁部に1条の凹條。口縁部は欠損。	⑧直立 ⑨直立 ⑩直立	回転ナゲ 回転ヘラ削	灰褐色 赤褐色 青灰色	良 ○		
6	広口壺	口径 12.26 基高 14.2	口縁部は外反し、体部外側には洗跡を残し、刻文突起を残している。	⑪直立 ⑫直立 ⑬直立	回転ナゲ 回転ヘラ削 ナゲ	褐灰色	良 ○	口縁部に自然 剥離	46
7	長颈甌	口径 7.1 基高 14.9	底部は平ら。颈部は直立し、口縁部は外反して開く。口縁端部は丸くおさめる。	⑭直立 ⑮手持ちヘラ削	回転ナゲ 回転ナゲ	青灰色 灰色	良 ◎		46
8	甌	口径(21.2) 基高 4.5	口縁部は外反し、口縁端部で外方へわずかに肥厚している。	回転ナゲ	回転ナゲ	褐灰色	良 ◎		

客谷古墳群B地区

1号墳玄室出土遺物観察表 鉄製品・装飾具

(1)

番号	器種	残存	材質 色	法 量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
9	刀子	ほぼ完形	鉄製	15.5	1.7	0.4	24.13		48
10	刀子	ほぼ完形	鉄製	12.0	1.5	0.2	9.02		48
11	刀子	1/3	鉄製	4.2	1.0	0.2			
12	刀子	1/3	鉄製	6.8	1.0	0.6	7.99	裏	48
13	鍔頭	ほぼ完形	鉄製	8.6	3.2	0.6	17.12		48
14	鍔頭	2/3	鉄製	8.1	3.0	0.6	8.68		48
15	鍔頭	2/3	鉄製	5.2	1.7	0.5	6.34		48
16	刀子	1/3	鉄製・木製	6.0	1.6	0.2		裏	48
17	刀子	1/5	鉄製	2.8	1.8	0.2			48
18	鉗子	完形	鉄製	9.7	5.0	1.8	181.08		48
19	耳環	完形	銅芯に金被覆	2.8	2.5	0.8	17.06		49
20	耳環	完形	銅芯に金被覆	2.9	2.4	0.8	15.27		49
21	耳環	完形	銅芯に金被覆	2.4	2.3	0.4	3.12		49
22	勾玉	完形	碧玉 透明白	2.6	1.2	0.7	3.82		49
23	勾玉	完形	碧玉 透明白	1.4	0.6	0.4	0.54		49
24	糸玉	ほぼ完形	透明白 薄褐色	2.4	1.5	0.5	2.32		49
25	切子玉	完形	水晶 透明	1.4	1.3	0.5	3.36		49
26	切子玉	完形	水晶 透明	1.6	1.7	0.5	2.71		49
27	切子玉	完形	水晶 透明	1.5	1.2	0.4	2.37		49
28	切子玉	4/5	水晶 透明	0.9	0.8	0.3	0.69		49
29	管状	ほぼ完形	半透明白	1.6	0.6	0.2	0.42		49
30	管玉	2/3	黒縞	1.2	0.5	0.2	0.63		49
31	管玉	完形	ガラス 水	1.0	0.7	0.2	0.61		49
32	管玉	完形	緑縞	0.9	0.3	0.1	0.14		49
33	丸玉	ほぼ完形	土紫 出	0.8	0.8	0.3	0.30		49
34	丸玉	完形	土紫 出	0.5	0.6	0.3	0.24		49
35	丸玉	完形	土紫 出	0.6	0.7	0.3	0.36		49
36	丸玉	1/2	土紫 出	0.8	0.8	0.3	0.45		49
37	丸玉	完形	ガラス 空縞	0.5	0.6	0.2	0.78		49
38	丸玉	完形	ガラス 空縞	0.6	1.0	0.4	0.92		49
39	丸玉	完形	ガラス 空縞	0.5	0.6	0.3	0.45		49
40	丸玉	完形	ガラス 空縞	0.8	0.8	0.3	0.78		49
41	丸玉	完形	ガラス 空縞	0.6	0.7	0.3	0.510		49
42	丸玉	完形	ガラス 空縞	0.5	0.8	0.3	0.39		49

出土遺物観察表

1号墳玄室出土遺物観察表 装飾具

(2)

番号	器種	残存	材質 色	法 量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
43	丸玉	完形	ガラス 透明	0.5	0.8	0.2	0.30	49	
44	丸玉	完形	ガラス 透明	0.45	0.8	0.3	0.41	49	
45	丸玉	完形	ガラス 透明	0.4	0.7	0.3	0.46	49	
46	丸玉	完形	ガラス 透明	0.5	0.8	0.3	0.32	49	
47	丸玉	完形	ガラス 透明	0.4	0.8	0.3	0.33	49	
48	丸玉	完形	ガラス 透明	0.4	0.8	0.4	0.36	49	
49	丸玉	完形	ガラス 水色	0.4	0.7	0.3	0.31	49	
50	丸玉	完形	ガラス 透明	0.5	0.5	0.5	0.30	49	
51	丸玉	完形	ガラス 水色	0.3	0.7	0.3	0.30	49	
52	丸玉	完形	ガラス 水色	0.3	0.6	0.2	0.18	49	
53	丸玉	完形	ガラス 透明	0.3	0.6	0.2	0.17	49	
54	丸玉	完形	ガラス 水色	0.2	0.6	0.3	0.20	49	
55	丸玉	完形	ガラス 水色	0.5	0.8	0.3	0.50	49	
56	丸玉	完形	ガラス 水色	0.3	0.7	0.3	0.25	49	
57	丸玉	完形	ガラス 水色	0.4	0.5	0.3	0.28	49	
58	丸玉	完形	ガラス 水色	0.4	0.5	0.2	0.23	49	
59	丸玉	完形	ガラス 水色	0.3	0.5	0.2	0.10	49	
60	丸玉	完形	ガラス 水色	0.3	0.4	0.2	0.11	49	
61	小玉	完形	ガラス 水色	0.2	0.4	0.15	0.04	49	
62	小玉	完形	ガラス 水色	0.2	0.4	0.2	0.03	49	
63	小玉	完形	ガラス 水色	0.15	0.3	0.1	0.02	49	
64	小玉	完形	ガラス 水色	0.15	0.3	0.1	0.01	49	
65	小玉	完形	ガラス 水色	0.2	0.3	0.1	0.02	49	
66	小玉	完形	ガラス 水色	0.2	0.3	0.1	0.01	49	
67	小玉	完形	ガラス 水色	0.15	0.3	0.1	0.01	49	
68	小玉	完形	ガラス 水色	0.1	0.3	0.1	0.01	49	
69	小玉	完形	ガラス 水色	0.1	0.3	0.1	0.01	49	
70	丸玉	完形	ガラス 水色	0.4	0.7	0.3	0.27	49	
71	丸玉	完形	ガラス 透明	0.4	0.5	0.2	0.14	49	
72	小玉	完形	ガラス 透明	0.2	0.5	0.2	0.13	49	
73	小玉	完形	ガラス 水色	0.4	0.3	0.2	0.11	49	
74	小玉	完形	ガラス 水色	0.3	0.4	0.1	0.09	49	
75	小玉	完形	ガラス 水色	0.35	0.2	0.1	0.05	49	
76	小玉	完形	ガラス 水色	0.2	0.5	0.2	0.10	49	

客谷古墳群B地区

1号墳玄室出土遺物観察表 装飾具

(3)

番号	器種	残存	材質 色	法 量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
77	小玉	完形	ガラス 水色	0.3	0.4	0.15	0.07		49
78	小玉	完形	ガラス 水色	0.3	0.5	0.2	0.07		49
79	小玉	完形	ガラス 水色	0.3	0.2	0.1	0.04		49
80	小玉	完形	ガラス 水色	0.3	0.5	0.2	0.06		49
81	小玉	完形	ガラス 黄	0.3	0.5	0.2	0.05		49
82	小玉	完形	ガラス 黄	0.2	0.4	0.1	0.06		49

表16 1号墳表土出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外 面) 色 調 (内 面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
83	环身	口径(10.2) 残高 5.0	底部は丸味があり、口縁部はやや内側に、口縁端部は丸くおさめる。	⑥ 向転ナデ ⑤ ナデ	⑥ 向転ナデ ⑤ ナデ	淡灰色 乳白色	密 △		47
84	柄	口径(16.0) 残高 6.2	底部と端部の境界は広く屈曲し、口縁部はやや内側に、端部には丸くおさめる。	① 向転ナデ ② 向転ヘラ割り ③ ナデ	① 向転ナデ ② ナデ	白色	密 ○		47
85	柄	口径(14.2) 残高 8.5	底部から体部にかけて丸味がある。口縁部は内側に、口縁端部は丸くおさめる。	ハケ	ナデ	乳白色	むらなぎ ○		46

表17 1号墳周溝出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外 面) 色 調 (内 面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
86	环垂	口径(12.4) 残高 2.6	首部部は端部付近でわずかに屈曲し、内側込み、底部は夷りぎみに丸くおさめる。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色	密 ◎		
87	基环	口径(11.9) 残高 3.5	單らな底部から屈曲して口縁部へかけて外へ開く。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 黄灰色	密 ◎	口縁部 に 自然船	47
88	高环	口径(10.2) 残高 2.1	脚部は外反し、底部は弧になっている。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 灰色	密 ◎		
89	通	口径 5.9	底基部に比較的細い。 脚部の体部外縁の文様上に凹孔を空す。	脚上 ① 向転ナデ 脚下 カキ目	回転ナデ	青灰色 黄灰色	密 ◎		
90	台付	底径 30.0 残高 6.9	脚部は外反し、端部付近でわずかに屈曲する。底部は内側に、開口をなす。	⑥ 回転ヘラ割り一部 転ナデ ⑤ 向転ナデ	回転ナデ	暗灰色 青灰色 灰色	密 ○		
91	提携	体部最大径 (13.3) 残高 12.6	体部正面は円形をし、肩に鉤状の把手。 把手の先端は欠損。	回転ヘラ割り	回転ナデ	赤褐色 珠灰色	密 △		
92	提瓶	残高 6.9	體部はやや反出し、体部の肩にはホタク模の内板付。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 灰色	密 ○		
93	度	口径(20.0) 残高 2.5	自縫部は外反し、底部外面に上条の凸起が走る。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 黒灰色	密 ◎		47
94	裏	口径(26.2) 残高 4.2	自縫部は外反し、底部外面には沈線と波状文を施す。	回転ナデ	回転ナデ	灰色	密 ◎		
95	度	口径(29.6) 残高 7.9	自縫部は外反し、底部外面には沈線と波状文を施す。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 黒灰色	密 ◎		

出土遺物観察表

1号墳周溝出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外面) 色調 (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
96	大鉢	口径 23.5 鉢底径 19.3 残高 18.0	口縁部は近く外反し、口縁部は丸味をもつ。 縁部はわざかに外反し、口縁部は丸くおさめる。	(口縁) 向軸ナゲ (内面) 円弧申き	(口縁) 向軸ナゲ (内面) 円弧申き	灰黄色 薄灰色	密 ◎		47
98	高杯	口径(15.1) 残高 5.9		向軸ナゲ	向軸ナゲ	青灰色	密 ◎	出土地 点不明	
99	甌	口径(15.9) 残高 4.8	口縁部は大きく開き、さらに 段をなして外方に屈曲させる。	向軸ナゲ	向軸ナゲ	暗灰色 淡褐色	密 ◎	出土地 点不明	47

1号墳周溝出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
87	丁持切玉	完形	蛇紋岩	8.6	1.7	2.8	130.56		49
100			サヌカイト	5.4	2.2	0.6	5.40		
101	石瓶	2/3	サヌカイト	2.0	1.4	0.3	0.66		

●表18 2号墳A石室出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外面) 色調 (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
102	高平	口径9.7 底高11.0	平部は浅く、底部は比較的平ら。腹部部は傾い。底は2方向。	向軸ナゲ	向軸ナゲ	青灰色	密 ◎		50
103	短筒瓦	口径7.3 底高7.4	扁球形の形態から、近く口縁部が立ち、口縁部は丸くおさめる。	(口縁) 向軸ナゲ (内面) 向軸ナゲ (内面) 向軸ナゲ	向軸ナゲ	青灰色	密 ◎	口縁部 に自然積	50
104	丸付 長筒瓦	口径 8.65 底径 13.25 残高 27.9	腹部は直立し、口縁部にかけて外反する。底部は底部附近で屈曲して段をなす。	(口縁) 向軸ナゲ (内面) 向軸ナゲ (内面) 向軸ナゲ	向軸ナゲ	青灰色 灰色・青 灰色	密 ◎		50

2号墳A石室出土遺物観察表 石製品・鉄製品・装飾具

(1)

番号	器種	残存	材質 色	法 量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
105	月面	(112) 完形	金被覆	2.7	2.3	0.7	9.13		50
106	月面	完形	金被覆	2.7	2.3	0.7	10.86		50
107	月面	完形	金被覆	2.9	2.6	0.5	10.00		50
108	勾玉	完形	淡緑・乳白	2.3	1.1	0.6	2.59		50
109	丸玉	完形	透青 青白	0.5	0.9	0.75	0.65		
110	白玉	ほぼ完形	透青 青白	0.4	0.6	0.15	0.19		50
111	白玉	ほぼ完形	透青 青白	0.5	0.5	0.2	0.25		50
112	白玉	ほぼ完形	透青 青白	0.5	0.5	0.3	0.23		50
113	白玉	ほぼ完形	透青 青白	0.2	0.6	0.2	0.13		50
114	白玉	(112) 完形	透青 青白	0.1	0.4	0.1	0.03		50
115	丸玉	完形	ガラス 空組	0.5	0.6	0.2	0.26		50

客谷古墳群B地区

2号墳A石室出土遺物観察表 石製品・鉄製品・装飾具

(2)

番号	器種	残存	材質 色	法 量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
116	小玉	完形	ガラス 水色	0.3	0.35	0.1	0.06		50
117	小玉	完形	ガラス 水色	0.3	0.36	0.2	0.06		50
118	小玉	完形	ガラス 水色	0.2	0.37	0.1	0.04		50
119	小玉	完形	ガラス 水色	0.3	0.4	0.1	0.06		50
120	小玉	完形	ガラス 水色	0.2	0.4	0.1	0.05		50
121	小玉	完形	ガラス 水色	0.2	0.35	0.1	0.04		50
122	小玉	完形	ガラス 銀線	0.3	0.4	0.2	0.07		50
123	管玉	完形	銀+	0.6	0.3	0.1	0.10		50
124	管玉	ほぼ完形	銀系 銀灰	0.3	0.3	0.1	0.06		50
125	輝	Z/R	鉄製	12.0	3.5	0.5	69.68		50
126	月子	1/2	木製	4.3	1.1	0.3		基	50
127	石鏡	完形	ヤヌカイト	1.5	1.4	0.2	0.51		

●表19 2号墳B石室出土遺物観察表 装飾具

番号	器種	残存	材質 色	法 量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
128	管玉	完形	銀系 銀灰	0.6	0.3	0.3	0.08		

2号墳B石室出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外) 色調 (内) 色調	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
129	耳珰	口径 14.2 高さ 6.1	天井部と口縁部の境者は斜 く四輪底に凹む。口縁底部は 丸く封きめる。	⑦回転ヘラ削り	⑩ ナテ ⑪ 回転ナヂ	灰褐色	密 ○		51
				⑫回転ナヂ					
130	耳珰	口径 13.2 高さ 4.0	たちあがりは短く内側し、裏 部は尖りぎみ。	⑬回転ナヂ ⑭回転ヘラ削り	⑮回転ナヂ ⑯ ナテ	褐色	密 ○		51
				⑮回転ナヂ					
131	耳珰	口径 13.3 高さ 4.3	たちあがりは短く内側し、裏 部は丸くおきめる。	⑰回転ナヂ ⑱回転ヘラ削り	同軸ナヂ	灰褐色	密 ○		51
				⑲回転ナヂ					
132	埴	口径 16.4 高さ 5.9	口縁部は外反し、粗面部で崩 れて段々なし。口縁部は外 方へ伸びる。	回転ナヂ	回転ナヂ	暗灰色 褐色	密 ○		51
				口縁 回転ナヂ 脚 脚下	カギ目 回転ヘラ削り				
133	埴輪	口径 8.0 高さ 9.0	埴輪部の体部から短く口縁 部が直立し、口縁部を丸く おきめる。	回転ナヂ 脚 脚下	回転ナヂ カギ目	灰色 青灰色	密 ○		51
				脚					
134	埴輪	口径(7.9) 高さ 16.1 脚筋幅 2.1 脚筋高 8.7	体部正面形は四角、肩と把 手結合部より、口縁部は外反 する。	回転ナヂ 脚 脚下	回転ナヂ カギ目	青灰色	密 ○		51
				脚					
135	埴輪	口径(12.0) 高さ 7.7	口縁部は強く直立し、口縁部 部は尖りさみに丸くおきま る。	ナヂ(摩滅)	摩滅の有無不明	赤褐色。 埋葉 赤褐色	赤(0-3.5) ○		51

出土遺物観察表

●表20 2号墳丘部出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外面) 色質 (内面)	胎 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
136	环身	口径(12.8) 残高 4.3	たちあがりは内傾し、縁部は丸くおさめる。受部は上外方に近くのびる。	⑦ 同軸ナゲ ⑧ 同軸ヘラ割り	同軸ナゲ	灰色	密 ◎		
137	広口唇	口径(13.7) 残高 14.9	口縁部は近く外傾する。底部は輪廻形をしている。	⑨ 口頭 ⑩ 同軸ナゲ カキ目 ⑪ 同軸ヘラ割り	同軸ナゲ	灰青色	密 ○		54
138	环底	口径(13.2) 残高 1.7	口縁部に外に内傾し、縁部は丸くおさめる。	同軸ナゲ	同軸ナゲ	灰白	密 ◎	出土地 点不明	
139	环身	口径(10.2) 残高 1.9	たちあがりは近く内傾し、受部は上方に近くのびる。縁部は丸くおさめる。	⑫ 同軸ナア ⑬ 塗装の為不明	同軸ナゲ	灰白色 青灰色 灰色	密 ◎	出土地 点不明	
140	(环身?)	口径(10.2) 残高 3.6	口縁部は外方に開き、口縁端部は丸くおさめる。	塗装の為不明	同軸ナゲ	暗灰色 灰色	密 ◎	出土地 点不明	
141	裏	口径(23.1) 残高 10.2	口縁部は外方に近づき直角に内傾する。	⑭ ヨコナゲ ⑮ 上 ハサ ⑯ 下 ミガキ	⑭ ヨコナテ ⑮ ハサ ⑯ ミガキ	乳白色 茶褐色	長(1) ◎	呂着漆 模写込み	

●表21 S×1出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外面) 色質 (内面)	胎 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
142	大腹	腹部径37.3 幅28.0 残高 109.5	体部にやや丸味をもち、最大径は腹部の2/3以上に求められる。	① 口頭 ② 手印押 ③ 中身抜、手スリシ	同軸ナゲ 同軸ナテ 叩き後、スリケン	青灰色 白色 白色	密 ◎		52

●表22 S×2出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外面) 色質 (内面)	胎 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
143	大腹	頭部径28.9 体径28.0 残高 79.05	体部はやや細長く、最大径は腹部の2/3以上に求められる。	平行叩き	同軸叩き	同色 青灰色 青灰色	密 ◎		53
144	沿	残高 13.1 頭部径 11.4	口縁部は外傾する。輪廻状には2条の内底と1条の凸筋がある。	⑪ - ⑬ ⑭ - ⑮ ⑯ - ⑰	同軸ナゲ 同軸ナテ 叩き後	青灰色 白色 白色	密 ◎		54

●表23 W T 9出土遺物観察表 装飾具

番号	器種	残存	材質 色	法 量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
145	管	充形	透 通	0.8	0.5	0.2	0.55		

●表24 調査地内出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外面) 色質 (内面)	胎 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
146	环身	口径(10.2) 残高 1.9	たちあがりは近く内傾し、縁部は尖り奥味に丸くおさめる。	同軸ナゲ	同軸ナゲ	青灰色	密 ◎		
147	裏	口径(12.3) 残高 3.6	口縁部は外方に開き、口縁端部は下方に側曲する。	同軸ナゲ	同軸ナゲ	青灰色	密 ◎		54
148	裏	口径(27.3) 残高 3.4	口縁部は外方に開き、口縁端部は下方に側曲する。	同軸ナゲ	同軸ナゲ	暗灰色 青灰色 白色	密 ◎		

客谷古墳群B地区

調査地内出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外面) 色調 (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
149	袋	口径(27.4) 底高 2.5	口縁部は外に開き、口縁部は下方に屈曲する。	同軸ナア	同軸ナテ	灰褐色	胎 土 焼 成		
150	甕	口径(24.6) 底高 7.7	口縁部は外反し、端部から外方へ縦曲させ把手し、底にならる。	①口縁 ②同軸ナテ ④把手	③底 ⑤同軸ナテ ⑥円弧叩き	褐色	胎 土 焼 成		
151	环身	口径 12.4 高さ 4.4	たちあがりは頗く内傾し、環部は尖りぎみに丸くおさめる。	⑦同軸ナテ ⑧同軸へラ削り	⑨同軸ナテ ⑩ナテ	青灰色	胎 土 焼 成		
152	甕	口径(9.0) 底高 3.3	実非部から口縁部にかけて丸味をもたらし、縫合部は内側に凹むして段になる。	⑪同軸ナテ ⑫同軸へラ削り	同軸ナテ	青灰色 褐色	胎 土 焼 成		
153	高杯	底径(9.0) 高さ 1.4	縫合部は端部付近で大きく屈曲して広がる。	同軸ナテ	同軸ナテ	黑色 暗灰色	胎 土 焼 成		
154	甕	底径(4.25) 底高 12.6	底部はラッパ状に外反し、全体は縦跡を呈する。	⑬第一脚上 ⑭同軸ナテ ⑮下 ⑯同軸へラ削り	同軸ナテ	青灰色 褐色	胎 土 焼 成	54	
155	甕	口径(13.0) 底高 9.7	口縁部は頗く外方へ開き、口縁部は丸くおさめる。	ハケ	痕滅の為不可	青褐色	胎 土 焼 成	54	

調査地内出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
156	石斧	2/3		8.5	6.0	2.8	246.07		54
157	石斧	1/5		3.2	5.1	2.1	31.33		
158	打製石器川貝	完形	サヌカイト	8.2	4.1	0.8	35.84		
159	剥片		サヌカイト	3.2	5.0	0.4	13.86		
160	剥片		サヌカイト	4.1	3.0	1.2	15.82		
161	チップ		サヌカイト	2.1	1.1	0.3	1.24		
162	チップ		サヌカイト	1.6	0.4	0.3	0.28		
163	石錐	完形	サヌカイト	2.6	1.9	0.3	1.40	54	
164	石錐	2/3	三棱石	2.4	1.6	0.35	1.07	54	
165	石錐	2/3	サヌカイト	2.5	1.4	0.3	0.73	54	
166	石錐	完形	サヌカイト	2.6	1.6	0.3	0.96	54	
167	石錐	完形	サヌカイト	1.8	0.5	0.5	0.44	54	
168	石錐	完形	サヌカイト	1.8	1.6	0.15	0.49	54	
169	チップ		碧璫石	2.6	1.7	0.3	1.40		
170	チップ		三棱石	1.0	1.2	0.4	0.34		
171	チップ		碧璫石	2.0	2.0	0.3	1.15		
172	チップ		サヌカイト	2.5	1.8	0.2	1.06		
173	チップ		三棱石	2.2	2.5	0.4	2.86		
174	チップ		碧璫石	3.0	2.0	0.3	2.84		
175	チップ		三棱石	3.8	1.6	0.8	6.16		

第4章

朝日谷1号墳



第4章 朝日谷1号墳

1. 調査の経過

(1) 調査に至る経緯

本調査は大峰ヶ台・客谷地区に続く、総合公園整備に伴う調査である。

調査地は、主丘陵の北西に位置し、北下りの分岐丘陵上に立地する。丘陵の北面には住宅が現存しているため、防災には充分配慮がなされねばならず、調査が終了した地点は順次安全面まで切り崩しを行なながら、調査を進めることとした。調査は当平野西部域、特に丘陵部における遺跡の有無と記録保存を主たる目的とするものであった。

なお、調査は2基の古墳について実施されたが、本報告はこのうちの後期古墳である1号墳について行うものとする。前期古墳である2号墳については次年度に報告書を刊行する予定である。

(2) 調査組織

調査地 松山市朝日ヶ丘1丁目 山林

遺跡名 朝日谷1号墳

調査期間 平成元年4月1日～同年8月1日（野外調査）

調査面積 1,300m²

調査担当 西尾 幸則、松村 淳

調査作業員 高尾 和長（現、財松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター）

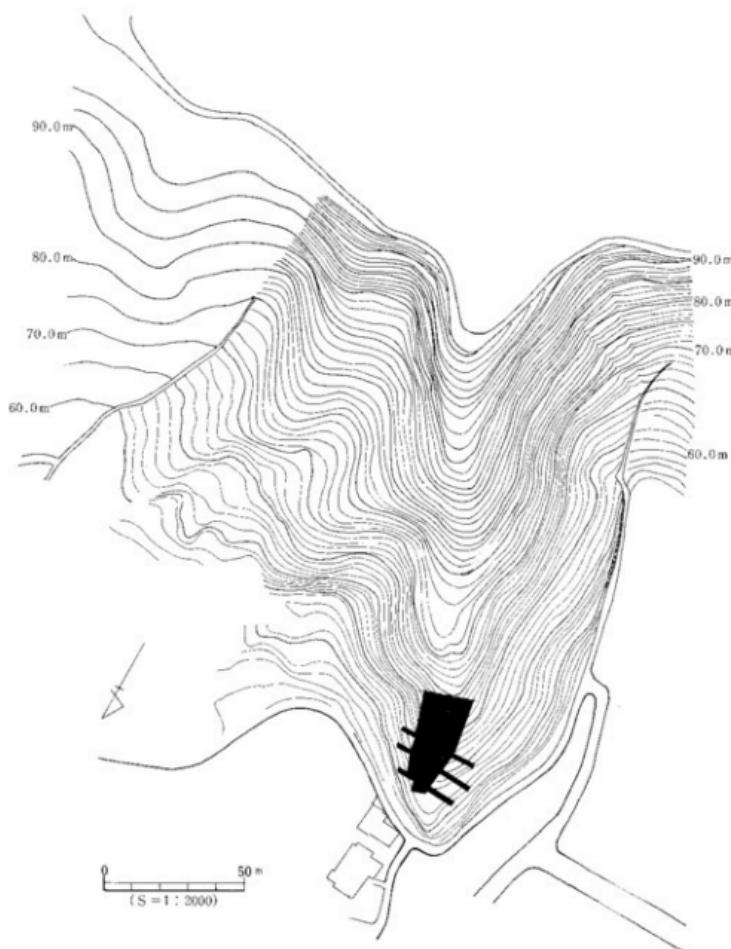
小笠原善治（現、財松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター）他

(3) 環境

大峰ヶ台丘陵は、松山平野西部に聳える独立丘陵で、和泉砂岩と領家花崗岩を母岩とし、標高は133mを測る。

広域な面積をもつ大峰ヶ台丘陵は、埋蔵文化財の包蔵地として古くから知られ、昭和49年の丘陵部八合目の調査では、弥生時代中期の高地性集落が発見され、昭和57年度の丘陵支群の調査では、粘土による木棺直葬の岩子山古墳、重葬が掘起された御産所11号墳、埴輪出土の斎院茶臼山古墳など、古墳時代前期から後期に至る古墳が検出されている。現在、丘陵を含めた周辺地域は都市化が進み大きく景観は変化している。これに呼応して調査も増加し、弥生時代前期土器や古墳時代の集落址、江戸時代の群集墓など、土に余る遺跡が確認されている。これらの遺跡は大峰ヶ台丘陵の裾部を外周する宮前川の中流域に位置しており、連續と続く古代社会の一端が窺える地域でもある。

朝日谷1号墳



第68図 調査地位置図

(4) 調査の概要

調査地は、主丘陵の北西200mに位置し、北方向に突出する支丘陵である。稜線上は高所からの水勢によってえぐられ、植生も少なく、自然流路がつくられている。丘陵北面は、鉄砲水により削平され広く窪状に崩落がみられる。丘陵南面の中腹部には、生活道を兼ねた幅2mの山道が南面から北面へと裾部を走行している。

調査は、トレンチによる確認調査と、表土を剥ぎ取り、広い範囲にわたる調査とを併行して行った。トレンチ溝（第69図）は陵線上（南北方向）に1条と、これに直行し陵線を跨ぐ東西方向のトレンチ溝を3条設定した。トレンチ溝には南北トレンチをT1、東西トレンチは裾部から頂上部に向けてT2、T3、T4と呼称した。

調査の結果、東西トレンチ（T2～4）では造構は確認されず、陵線上の南北トレンチT1で石室の奥壁部の一部が確認された。また表土の剥ぎ取りを行い実施した調査では陵線上に自然流路1条、西側傾斜地で土壇1基、さらに石室の存在が予測される地点の東方緩斜面で土壇1基が確認された。

確認された造構は、墳丘は朝日谷1号墳、自然流路はS R 1、西側土壇はS K 1、石室東方の土壇はS K 2とし調査を進めることとした。

2. 層 位（第70図）

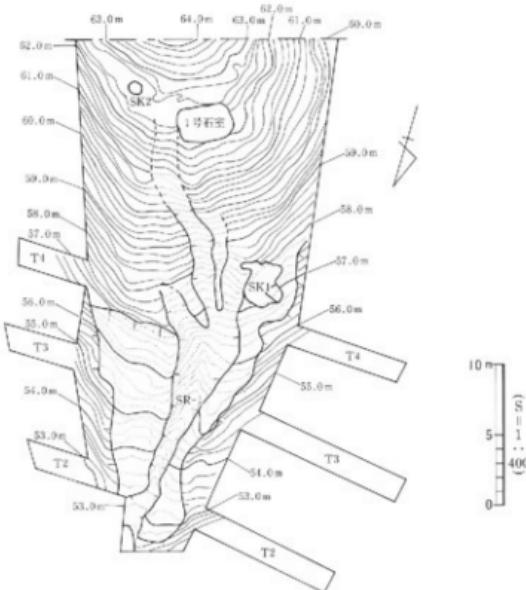
造構の確認に至らなかったトレンチ溝の層位は、総体的に擾乱堆積の様相が示され、特に陵線の東斜面は乱積状の堆積状況が示された。この乱れ現象は流水によるものと思われる。

比較的安定的なトレンチT3の層位を記述すると、第1層表土（腐葉土）、第2層灰褐色土、第3層薄褐色土、第4層赤褐色土、第5層褐色土、つづいて地山の順となる。各層には白黄色や黄褐色土などの黄色土系の土塊が混入している。

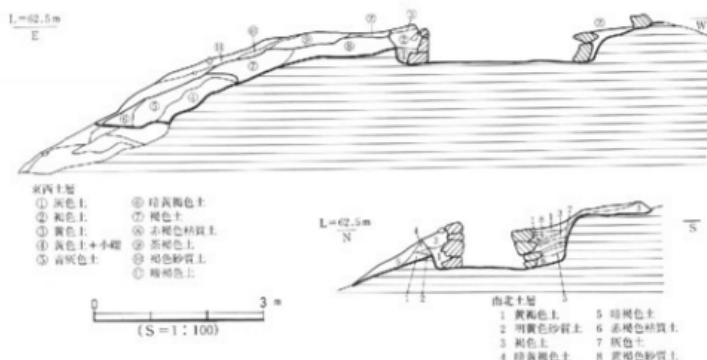
東斜面と相対する西斜面の堆積土は、東斜面と若干異なりがみられ、第1層腐葉表土、第2層褐色土、第3層黄色砂質土と赤褐色土の混合土、第4層茶褐色土、第5層赤褐色土、第6層褐色土で地山となる。

調査地の陵線を境に東側は自然崩落が多く、西側は自然崩落が少ないという現象がみうけられる。

朝日谷1号墳



第69図 造構配置図



第70図 1号墳土層図

3. 遺構と遺物

本調査で検出された遺構は、西側傾斜地で土壙1基（SK1）、陵線上で石室1基（1号墳）と自然流路1条（SR1）、1号墳の東部緩傾斜地で土壙1基（SK2）の計4基である。

(1) 1号墳（第70~73図）

1号墳は、陵線上の標高62mに位置する。墳丘はすでに大きく削平され、規模を測ることは困難な状況であった（推測する墳丘の規模は東西7m前後、南北5m前後の小型墳を想定している）。古墳は南側の高所地を削平し平坦部を造り、さらに平坦部より80cm掘り下げ墓塚がつくられる。墳丘は東西方向を広く活用し、南北方向は幅狭となる。従って墳丘の平面形は橢円形に近いものが想定される。遺存する石室は奥壁高所部が残丘の高点となる。

墳丘の盛土は、東側でわずかに堆積が看取れる状況であった。石室のうらごめには、下位に灰色砂質土、上位に褐色土を用いている。墳丘盛土は東側では、下部から順に行程I：赤色を呈する黄色砂質土で水平化する。行程II：傾斜角をもつ地山に、黄色土と小礫を混入した黄色土とで盛る。行程III：石室に向け茶褐色土と赤褐色粘質土を用い水平化を計るように盛り土を行う。行程IV：これより上部は褐色土、茶褐色土、褐色砂質土、暗褐色土、褐色砂質土を互層に用い盛り土を行う。

なお北側では、うらごめの土に黄褐色土が用いられ硬くしめられていた。北側は、東側のものとは異なり、側壁部に対して強固に築造した様相がみられる。

石室 石室は南西部開口の横穴式石室で、主軸方位は東振りにN60°Eを指向する。石室は、全長5.0m、玄室長2.5m、玄室幅1.1m、羨道部長2.0m、羨道部幅0.8mである。玄室と玄門部との比高差は30cmが測られ、段を降りる構造がとられている（第70図）。天井石はすぐではなく、奥壁高の0.9m以下の部分が残存しているにすぎない。石室使用の石材は、比較的入手が容易な和泉砂岩を主に、花崗岩を併用し横積みしている。北の側壁は直立し遺存状況がよいが、南の側壁は玄室に向かってせり出し、「く」の字状に大きく内傾しており、遺存が良くない。玄室床面は、最下部にやや扁平な入頭大の角礫を敷き、つづいて拳大の円礫で覆い水平な床面を作りだす。更に30cm大でやや厚身のある角礫を3個程度用い、ヨコ一列にしたものと約30cmおきに配置させていた。その結果、玄室は最上部の角礫列（棺台と考えられる。以下棺台と記す）がある部分（玄室奥から約2/3の部分）と、須恵器類が出土した（一段やや下がる）玄室の入口部分とからなる。玄室の入口部は、一辺約65cmの四角形を示し、床面は礫（円礫）が敷かれる。なお、床面は棺台の上面より12~15cm下っている。羨道部は北側壁は残存しないが、無袖式の構造をもつものである。

遺物出土状況（第71図、図版57・58）

遺物は入口部と、棺台が配置される部分から出土している。

入口部では北半部と、南壁にそって遺物が出上している。北半部には上陣器蓋1点、須恵器短頸壺1点、有蓋短頸壺2点、脚台付椀1点、环3点がみられ、南壁ぞいには須恵器提瓶2点と环6点が、積み重なった状況で出土している。环類はセット関係が結ばれるものがあり、环蓋5点は、环身4点と有蓋短頸壺1点に組合せがなされるものである。特に10の台付椀は入口部の中央に据え付けられた状況で出土した。一方奥にあたる棺台部には、中央部分に大尾骨が横列し、人骨を挟むように奥と手前（入口部）の角礫上に円形の紫黒斑が各1ヶ所検出された（第71図、破線部位置）。この斑痕は被葬者の頭の位置が想定され、人体数の確認は得られないものの、複数の埋葬がなされたものと思われる状況にある。さらに東側の紫黒斑の周辺より人歯3点が出土している。装飾類には耳環を含まない玉類が紫黒斑の周囲で集中して出土している。玉類には瑪瑙2点、水晶玉1点、丸玉13点、小玉43点がある。このほか鉄製の直刀が中央よりやや手前の北壁部に沿って出土し、刀子2点、鐵鍔10点、折損の茎9点などの武器類や、鉄鎌3点、鉗1点などの農工具類、轡1点が棺台上及びその狭間に出土している。

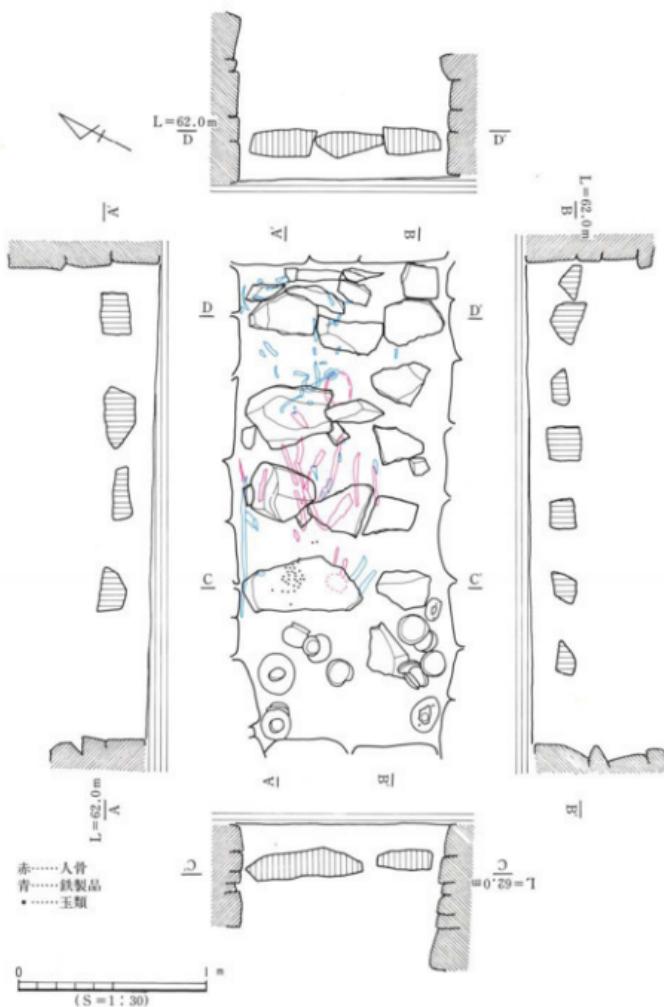
出土土器

須恵器（第74・75図、図版66～68）

环蓋（1～5） 器高が低く、天井部はやや丸みをもっている。天井部と口縁部の境界でわずかに屈曲しているもの（1～3）と、天井部から口縁部に至るまでそのまま開いているもの（4・5）がある。口縁端部は尖りぎみに丸くおさめるもの（1・3～5）と、丸くおさめるもの（2）がある。天井部外面は回転ヘラ削り調整を施し、1・3・5はその後中央部に回転ナデ調整を施している。内面は回転ナデ調整を施し、全て天井部内面はナデ調整を施している。

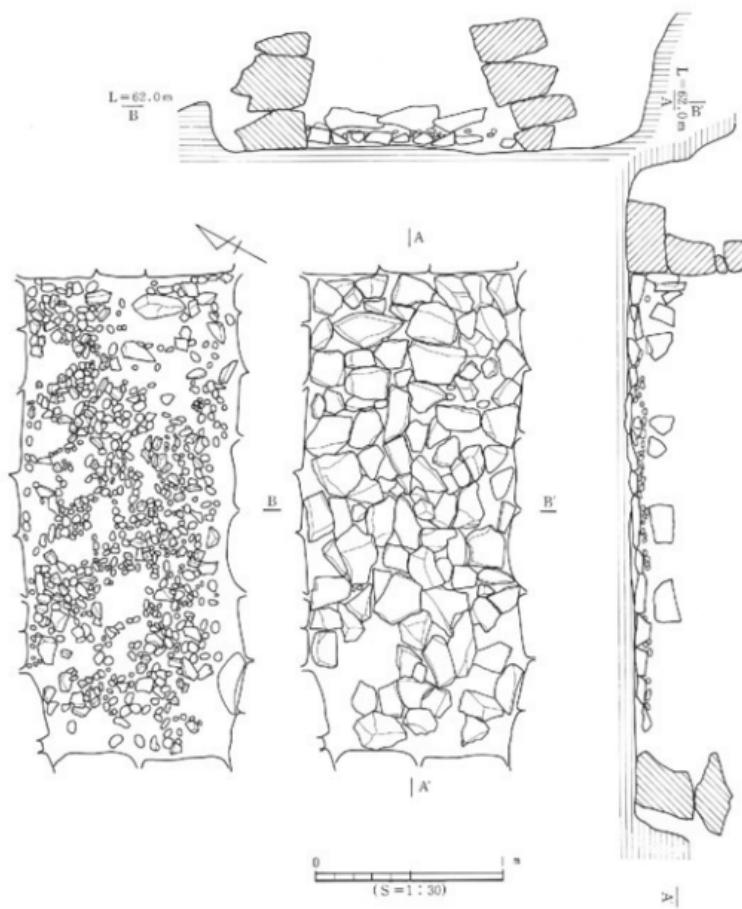
环身（6～9） 底部から体部にかけて丸みをもっている。たちあがりは短く内傾し、端部は尖りぎみに丸くおさめている。受部は上外方へ短くのび、受部端に沈線状の凹みをもつもの（6～8）がある。たちあがりはオリコミ手法によっており、底部外面の約1/2の範囲に回転ヘラ削り調整を施し、底部内面にはナデ調整がみられる。その他は回転ナデ調整を施している。

台付椀（10） 底部と体部の境界で強く屈曲し、口縁部にかけて内窓しながらたちあがる。口縁端部は丸くおさめている。体部外面には刺突文を施し、その上下に1条の沈線を巡らせている。台部は大きくハの字形に外反しながらひろがり、台端部はわずかに上方へ屈曲して段をなす。底部には回転ヘラ削り調整がなされ、その他は回転ナデ調整が施されている。



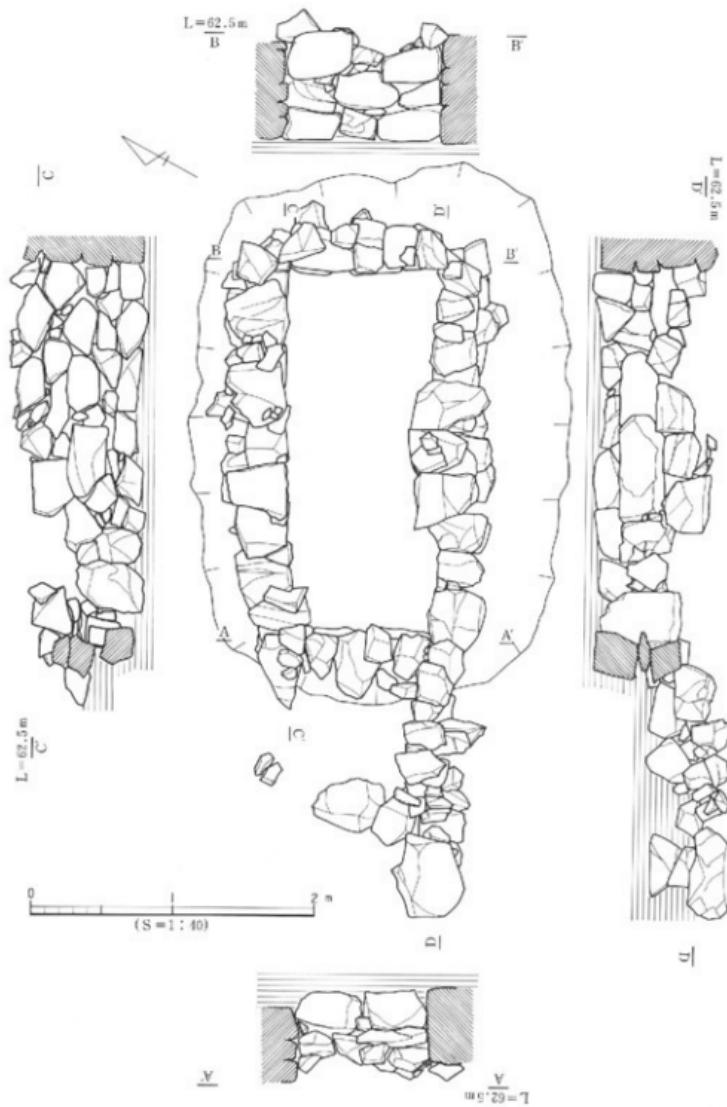
第71図 石室測量図(1)・遺物出土状況

朝日谷1号墳



第72図 石室測量図（2）

造構と造物



第73図 石室測量図 (3)

広口壺（11） 扁球形の体部から短い口頸部が外反しており、口縁端部には丸みがある。底部外面には回転ヘラ削り調整を施し、頸部から胴部にかけてはカキ目がみられるが、頸部はその後口縁部からの回転ナデ調整によりカキ目がうすくなっている。内面は回転ナデ調整を施し、底部内面にはナデ調整がなされている。

短頸壺（12・13） 口頸部は短く直立し、端部は丸くおさめられるが、12は端部内面でわずかに段らしきものがみられる。12の体部は球形をしており、13の体部は扁球形をしている。底部から胴部下半の外面は回転ヘラ削り調整をしているが、12はその後底部に回転ナデ調整を施している。胴部上半には12はカキ目調整、13は回転ナデ調整がみられ、内面は底部にナデ調整、その他は回転ナデ調整が施されている。

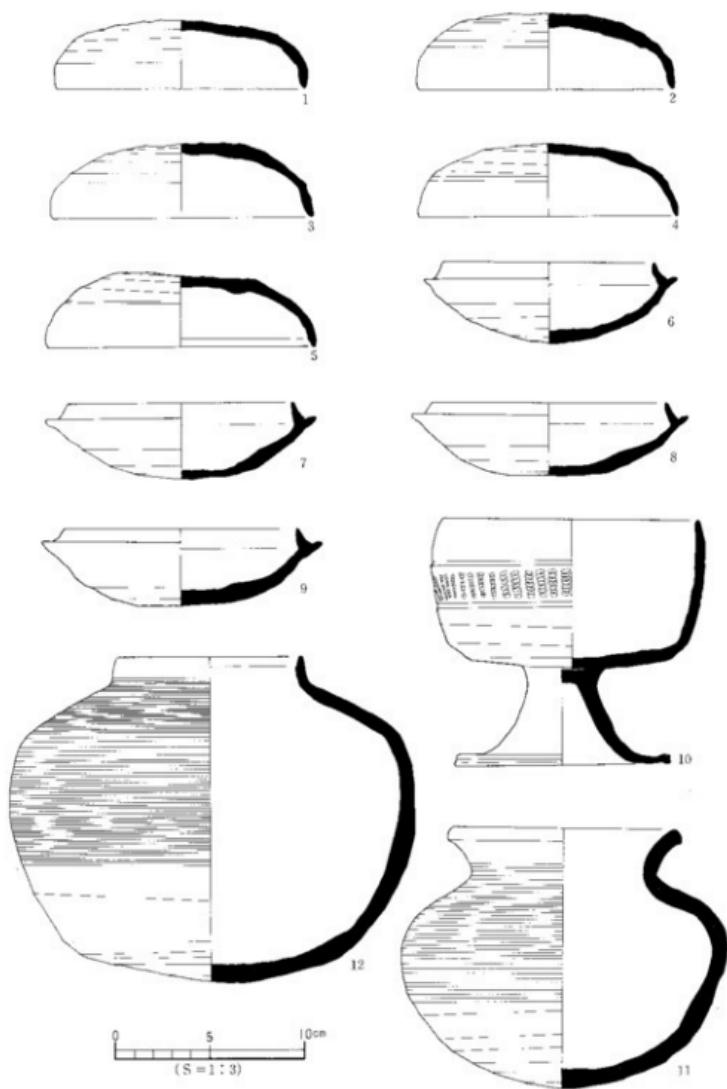
提瓶（15・16） 体部正面形は円形、側面形は前面が丸くふくれ背面はほぼ平らになる。口頸部は短く外反しながら開き、口縁端部はやや丸みをもっている。15は口縁部の下に1条の凸線を巡らせている。肩の内側には鉤状の把手が付く。15は先端が欠損しているが、16は把手の先端が尖っている。口頸部外面には回転ナデ調整、体部には全面にカキ目、内面には回転ナデ調整を施している。

土師器

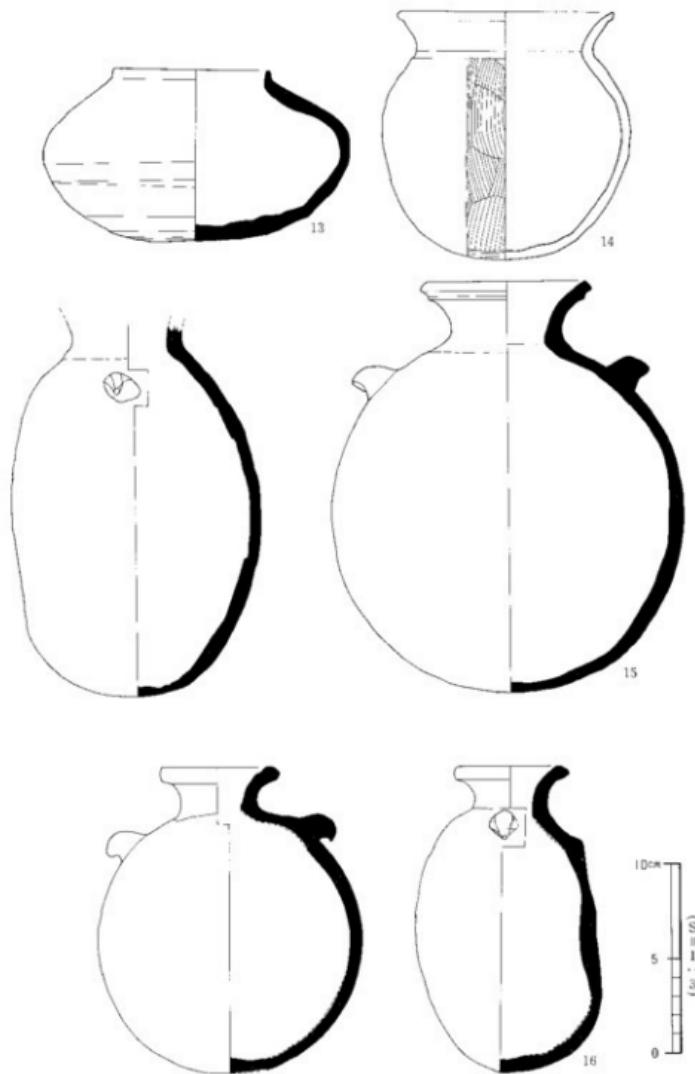
甕（14） 体部は球形をしており、口頸部は短く外反し、口縁端部は丸くおさめている。底部外面より頸部にかけてハケ目調整、それ以外はナデ調整が施されている。

鉄製品（第76・77図、図版69）

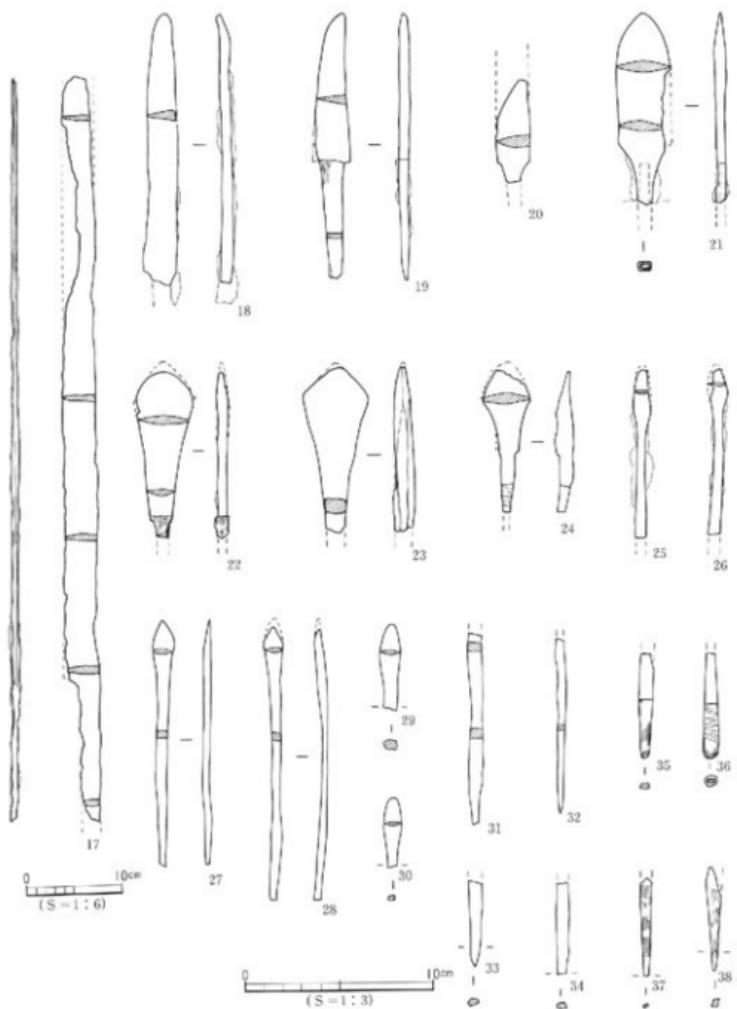
石室からは、直刀、刀子、鉄鎌、鎌、鎗が出土している。17は峰先欠如の直刀で、遺存長79.1cmを測る。刃長64.4cm、刃身幅3.4cm、厚さは刃元部0.8cm、峰元部0.6cmと切先に向け細身となる。茎部は残長14.7cm、幅2.1cm、厚さ0.8cmで棟区はなく、刃区は深く斜めに切り込まれる。断面長方形の茎部には目釘穴は認められない。18～20は刀子である。18は鍔転用の刀子と思われる。遺存長14.5cm、幅1.5cm、厚さ0.5cmを測る。19は遺存長14.2cm、茎長6.2cmを測り、茎部には鹿角装着がみられる刀子で、潤区が直角状に切り込まれ、切先部は銳利さが窺える。20は闇が斜めに切り込まれるやや厚身のものである。21は幅広の柳葉形を示し、遺存長10.2cm、刃長7.5cm、幅2.6cmを測り、刃部は両刃を示す。茎部は、木装の残存がみられ中空となる。22～24は鎌である。22は茎に木柄の残存がみられる。23は茎部を欠き、縱方向に亀裂し、厚身が不明確なものである。24は茎先端部に櫻の皮と思われる柄巻が看取されるものである。なお、22～24の鎌には縱削離する様相が強くみうけられる。25～30は細身の長頭鎌で、先端部は両刃を示す。27は完形品で13.2cmを測る。28は14.6cmの残存である。27・28の厚さはともに0.4cmが測られる。31～38は折損した茎部で、35～38は矢柄が残存し、36には樹皮の矢柄巻が残るものである。



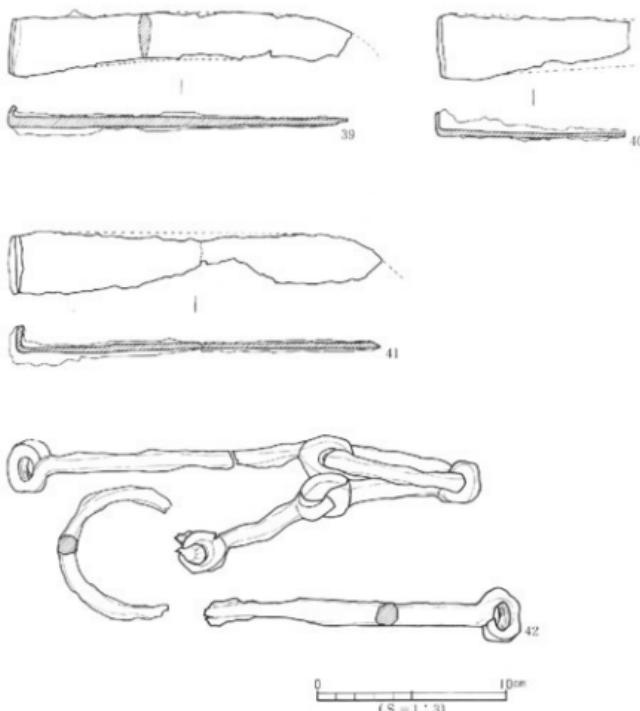
第74図 石室出土遺物実測図（1）



第75図 石室出土遺物実測図（2）



第76図 石室出土遺物実測図（3）



第77図 石室出土遺物実測図（4）

39～41は鍔である。39は曲刀を示し、40は形状不明、41は直刀が示される。装着部の折り返しは39が内傾し、他は直角の折り返しがなされる。39は現存長17.8cm、幅2.5cm（推定）、厚さ0.6cmを測る。41は現存長19.5cm、幅推定3.0cm、厚さ0.5cmを測る。いずれも銹化が著しい。

42は素環がついた柄である。柄は2本連結で柄先には径6.5cm～7.0cmの素環がとりつき、引き手へと繋がる。引手は折り曲げられる。鏡板の出上はみられなかった。

遺構と遺物

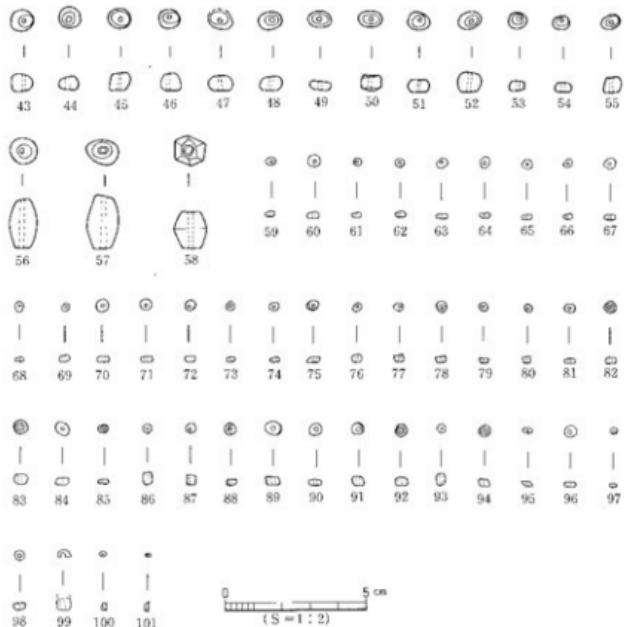
装飾品 (第78図、図版68)

ガラス玉 (43~55) 43~55は、長さ0.3~0.7cm、径0.5~0.9cmを測る。重さは0.2~0.7gである。色調は紫紺である。

棗玉 (56~57) 56・57は本質の棗玉である。56は長さ1.7cm、最大径1.0cmを測る。重さは1.2gである。57は、長さ1.9cm、最大径1.1cmを測る。重さは1.5gである。

算盤玉 (58) 58は、水晶を石材とする。長さ1.3cm、最大径1.1cmを測る。重さは2.4gである。

ガラス小玉 (59~101) 59~101は長さ0.1~0.5cm、径0.2~0.5cmを測る。重さは0.02~0.11gである。



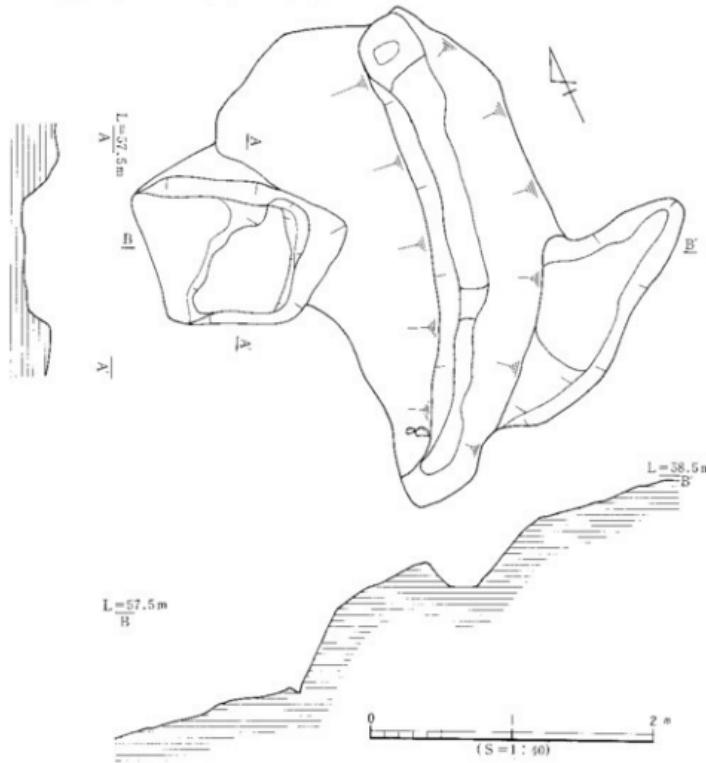
第78図 石室出土遺物実測図 (5)

(2) 土壙

SK 1 (第79図)

SK 1は、西斜面に位置する不定形の堀り込みである。堀り込みには南北3.5m、東西80cmの三日月状を呈する部分と、東西1.05m、南北1.0m、深さ10cmの長方形（上場値）を呈する部分が検出されている。

三日月状の部分は南北端が浅く、中央部が深い溜池状を示している。北側では柱穴1基が検出されたが、柱穴の性格及び遺構との関連は不明である。一方長方形の堀り込み部分は、東にV字形の溝をもち、底面は西に傾斜し、西端部は削平により消滅している。この堀り込みは、検出状況や地形から判断し、自然的発生とは思われず人₁的構造物を考える。土壙内からの遺物の出土はない。時期は不明。



第79図 SK 1測量図

遺構と遺物

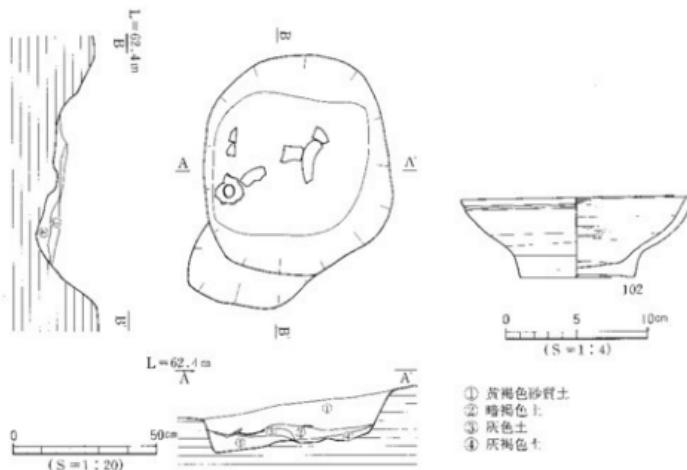
S K 2 (第80図)

S K 2 は、1号墳の東方の緩傾斜地で検出された円形の掘り込みである。規模は南北65cm、東西77cm、深さ15cmである。基底部は南高北低を示し、水平にはならない。内部には黄褐色砂質土、暗褐色土、灰褐色土の堆積がみられ、部分的に灰色土の灰を伴っている。北壁の最下部では灰褐色土が北側で厚く、中央に薄く堆積している。これを覆うように灰色土、暗褐色土が覆う。遺物は1層黄褐色砂質土下部の水平面で、1個体の土師器高台椀の破片が出土した。土師器椀102は平安時代後期10世紀後半に比定されるものである。土壙の性格は断定できないが、土壙中に灰と完形に近い土器の出土があることから、人為的行為の産物と考えられ、更に検討を加えたい遺構である。

(3) 流路

S R 1 (第69図)

流路は図示するように、尾根上を北流するもので、流水によって地山が掘り開められたものである。全長25mを測り、下流域の北部に至っては地山を深く削り小池状の溜りがつくられる。埋上からの出土物はない。



第80図 SK 2 測量図、出土遺物実測図

4. 結 び

今回の調査によって、調査地は多人の自然的被害をうけた土地であることが判った。調査地本來の地形は、南側の高所部が比較的緩傾斜な地形であり、北側は急激に下降する傾斜をもつ丘陵地であったと思われる。

1号墳は主丘陵と枝状の支丘陵との合流地点に位置する。古墳の占地条件は決して良いとはいえない。また（削平された墳丘の規模は憶測の域を出ないが）、北から見る墳形を意識し、東西面を広く誇示した様相がみられる。一方墳丘の構築においては墳丘の南側は岩盤であり、これを避けることで築造時の困難を少なくし、構築されたものと思われる状況にある。これ等の条件より墳丘は、椿円形である可能性が高いと考えている。さらに立地においては墳丘は、海陸部を見おろす位置にあり、海を意識した占地が強く感じられる古墳である。玄室内部では、頭骨想定の痕跡が二地点で検出され、追葬がなされた可能性がある。玄室部入口の遺物の出土状況は、器種による配置規制も考えられるものとして注意したい資料である。

また、玉類は頭骨部分に集中しており、埋葬時の状況を示したものと考えられるものであつた。出土遺物の状況をみると、当古墳は未盗掘である可能性が高いものを感じた。石室の年代は、出土遺物が山辺昭三氏編年のII期後葉・T K209に比定され、6世紀後葉から木に近い年代が与えられよう。

土壙SK2は、出土遺物から平安時代後期段階（10世紀代後半）に比定されるものである。性格は墓ないし、基底部堆積の灰色土から何らかの行為に用いた炉址を推考している。中世の遺構は、丘陵の東部域に検出をしており、今回の中世土壙の検出は、中世の遺構の面的広がりが丘陵の北域にまで拡大されることを裏付ける一つの資料となるものである。

この他、SK1における長方形の堀り込みは、土壙墓的性格を推定するが定かでない。流路SR1は墳丘築造後のものとして報告しておく。

また、明治38年の地形図と現在の地形図を照らし合わせると、支丘陵部や周辺部が大きく変わっていることが分かった。

今回の調査によって、大峰ヶ台丘陵の北部地域における遺跡展開の一端が明らかとなり、その資料を得たことは成果といえよう。地元民が言うには、戦後「土砂採集で多くの古墳が壊された」と言う。残された丘陵の保存に努め、新たなる調査によって松山平野西部域の集落解明がなされることを期待する。

出土遺物観察表

遺物観察表一凡例一(松村 淳・平岡直美)

(1) 以下の表は、本調査出土遺物観察一覧である。

(2) 各記載について。

法量欄 () : 復元推定値

形態・施文欄 士器の各部位名称を略記。

例) 口→口縁部、胴中→胴部中位、柱→柱部、裾部、胴底→胴部～底部。

胎土・焼成欄 胎土欄では混和剤を略記した。

例) 砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土。() 中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例) 砂・長(1~4) 多→「1~4 mmの大砂粒・長石を多く含む」である。

焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良。

●表25 石室出土遺物観察表 土器

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		(外側) 色調 (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
1	円壺	口径 13.2 基高 3.6	口縁部と大肩部の境界は屈曲している。口縁部は丸くおさめる。	⑨ 回転ヘラ削り ⑪ 回転ナテ	⑨ ナテ ⑪ 回転ナテ	青灰色	密 ○		66
2	环壺	口径 15.6 基高 4.0	口縁部と天井部の境界は、わずかに屈曲している。口縁部は丸くおさめる。	⑦ 回転ヘラ削り ⑪ 回転ナテ	⑨ ナテ ⑪ 回転ナテ	青灰色	密 ◎		66
3	円壺	口径 13.7 基高 3.9	口縁部と大肩部の境界は屈曲している。口縁部は丸くおさめる。	⑨ 回転ヘラ削り ⑪ 回転ナテ	⑨ ナテ ⑪ 回転ナテ	青灰色	密 ◎		66
4	平壺	口径 13.7 基高 3.85	口縁部は、天井から丸くなだらかに開き、腹部は丸くおさめる。	⑩ 回転ヘラ削り ⑪ 回転ナテ	⑨ ナテ ⑪ 回転ナテ	淡青灰色 所色	密 ◎		66
5	坪壺	口径 14.1 基高 3.75	口縁部は、やや内側ざまに開く。口縁部は丸くおさめる。	⑨ 回転ヘラ削り ⑪ 回転ナテ	⑨ ナテ ⑪ 回転ナテ	青灰色	密 ◎		66
6	矢舟	口径 11.2 基高 4.7	たちあがりは短く内縮し、端部は丸くおさめる。	⑪ 回転ナテ ⑬ 回転ヘラ削り	⑨ 回転ナテ ⑩ ナテ	青灰色	密 ◎		66
7	环舟	口径 11.9 基高 4.0	たちあがりは短く内縮し、端部は丸くおさめる。	⑭ 回転ナテ ⑮ 回転ヘラ削り	⑩ 回転ナテ ⑯ ナテ	青灰色	密 ◎		66
8	平舟	口径 12.85 基高 3.8	たちあがりは短く内縮し、端部は丸くおさめる。	⑪ 回転ナテ ⑬ 回転ヘラ削り	⑨ 回転ナテ ⑩ ナテ	青灰色 暗青灰色	密 ◎		66
9	坪舟	口径 12.1 基高 4.0	たちあがりは短く内縮し、端部は丸くおさめる。	⑪ 回転ナテ ⑬ 回転ヘラ削り	⑩ 回転ナテ ⑯ ナテ	青灰色	密 ○		66
10	右付舟	口径 12.5 基高 13.0 基径 11.3	体部外縁に刻文と上下に乳突を施す。舟は大きく外腹して聞く。	⑨ 回転ナテ ⑪ 回転ヘラ削り ⑮ 回転ナテ	⑨ 回転ナテ ⑩ ナテ	淡青灰色 灰褐色	密 ○		68
11	広口壺	口径 11.6 基高 13.8	口縁部は短く外反し、口縁部は丸味がある。	⑪ 回転ナテ ⑨ 一括 カキ目 ⑯ 回転ヘラ削り	⑨ 回転ナテ	灰白色	密 △		67

朝日谷1号墳

石室出土遺物觀察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外面) 色調 (内面)	胎 土 燒 成	備考	回版
				外 面	内 面				
12	埴輪像	口徑 9.6 器高 17.0	口部は頗く直立し、輪郭は丸いが、内面はわずかに段らしきものがみられる。	② 回転ナゲ (斜・脱) カキ目 ⑤ 回転へり削り	⑩ 同軸ナゲ ⑪ ナテ	青灰色 茶褐色	密 ◎		67
13	埴輪像	口徑 8.3 器高 9.0	口部は頗く直立し、輪郭は丸くおさめる。体部は輪郭形をしていて。	○ 口頭 ○ 回転ナゲ ⑩ 同軸へり削り	⑪ 同軸ナゲ ⑫ ナテ	青灰色	密 ◎		67
14	蓋	口径 11.4 器高 13.1	口部は頗く外反し、口縁部は丸くおさめる。輪郭の輪郭。	○ 口頭 ○ ナテ ⑩ ハケ	ナテ	赤褐色	石・灰 0.5~2.0 ○		
15	埴輪	口径(8.3) 器高 21.7 輪郭径18.6 輪郭厚1.15	口部は頗く外反し、口縁部の下に1次の凸線。把手は均状で先端が尖錐。	○ 口頭 ○ 回転ナゲ ⑩ カキ目	回転ナテ	青灰色	密 ◎		67
16	埴輪	口径 5.9 器高 16.05 輪郭径14.1 輪郭厚0.7	口部は頗く外反し、口縁部は丸くおさめる。輪郭の把手が付く。	○ 口頭 ○ 回転ナテ ⑩ カキ目	回転ナテ	淡灰色	密 ◎	自然釉	67

石室出土遺物觀察表 鉄製品・装飾具

(1)

番号	器種	残存	材質 色	法 庫				備考	回版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
17	直刀	4/5	鉄製	79.1	3.4	0.8×0.6	370.5		69
18	刀半	3/4	鉄製	11.6	1.5	0.3	33.8	鉛用	69
19	刀子	ほぼ完形	鉄製	14.2	1.6	0.3	29.7		69
20	刀子	1/3	鉄製	5.4	1.8	0.6	13.1		69
21	鉄鍔	3/4	鉄製	10.2	2.8	0.6	23.4		69
22	鉄鍔	ほぼ完形	鉄製	8.8	2.7	0.5	21.2		69
23	鉄鍔	ほぼ完形	鉄製	8.7	3.5	0.6	32.7		69
24	鉄鍔	3/4	鉄製	7.4	2.5	0.6	12.2		69
25	鉄鍔	ほぼ完形	鉄製	8.9	1.9	0.2	5.3		69
26	鉄鍔	ほぼ完形	鉄製	8.7	1.0	0.2	8.7		69
27	鉄鍔	ほぼ完形	鉄製	13.0	1.1	0.3	10.4		69
28	鉄鍔	ほぼ完形	鉄製	14.5	1.1	0.3	12.6		69
29	鉄鍔	2/3	鉄製	4.5	1.1	0.3	2.1		69
30	鉄鍔	2/3	鉄製	3.7	0.9	0.2			69
31	鉄鍔	1/2	鉄製	10.2	0.8	0.2		苏	
32	鉄鍔	1/2	鉄製	9.3	0.5	0.4		黑	
33	鉄鍔	1/3	鉄製	4.5	0.8	0.4		黑	69
34	鉄鍔	1/3	鉄製	4.7	0.6	0.4		黑	69
35	鉄鍔	1/3	木柄	5.5	0.8	0.4		黑	
36	鉄鍔	1/3	木柄	5.6	0.8	0.6		磨光	
37	鉄鍔	1/3	木柄	5.2	0.6	0.6		黑	

出土遺物観察表

石室出土遺物観察表 鉄製品・装飾具

(2)

番号	器種	現存	材質 色	法 量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
38	鉄鍔	1/3	木柄	5.5	0.7	0.6		系	63
39	鉄鍔	1/5	鉄製	18.0	3.0	0.6	52.6		69
40	鉄鍔	1/2	鉄製	10.0	3.3	0.4	43.2		69
41	鉄鍔	2/3	鉄製	19.3	3.4	0.4	69.0		69
42	帶	1/3	鉄製	25.0	17.0	1.0	208.0		69
43	丸玉	完形	ガラス 紫羅	0.6	0.7	0.8	0.4		68
44	丸玉	完形	ガラス 紫羅	0.5	0.7	0.8	0.6		68
45	丸玉	完形	ガラス 紫羅	0.6	0.7	0.7	0.6		68
46	丸玉	完形	ガラス 紫羅	0.6	0.6	0.7	0.6		68
47	丸玉	ほぼ完形	ガラス 紫羅	0.5	0.8	0.7	0.5		68
48	丸玉	完形	ガラス 紫羅	0.5	0.8	0.6	0.5		68
49	丸玉	完形	ガラス 紫羅	0.3	0.8	0.6	0.2		68
50	丸玉	完形	ガラス 紫羅	0.5	0.7	0.6	0.5		68
51	丸玉	完形	ガラス 紫羅	0.4	0.8	0.6	0.4		68
52	丸玉	完形	ガラス 紫羅	0.7	0.9	0.6	0.7		68
53	丸玉	完形	ガラス 紫羅	0.4	0.5	0.6	0.2		68
54	丸玉	完形	ガラス 紫羅	0.4	0.6	0.5	0.2		68
55	丸玉	完形	ガラス 紫羅	0.6	0.6	0.5	0.5		68
56	圓玉	完形	木製 漆	1.7	1.0	0.9	1.2		68
57	圓玉	完形	木製 漆	1.9	1.1	0.9	1.5		68
58	草葉玉	完形	水晶 白透	1.3	1.1	1.2	2.4		68
59	小玉	完形	ガラス 黄	0.2	0.4	0.2	0.03		68
60	小玉	完形	ガラス 黄	0.2	0.5	0.4	0.08		68
61	小玉	完形	ガラス 黄	0.2	0.4	0.3	0.03		68
62	小玉	完形	ガラス 黄	0.2	0.4	0.3	0.04		68
63	小玉	完形	ガラス 黄	0.2	0.4	0.4	0.04		68
64	小玉	完形	ガラス 黄	0.2	0.4	0.4	0.04		68
65	小玉	完形	ガラス 黄	0.2	0.4	0.4	0.04		68
66	小玉	完形	ガラス 黄	0.2	0.3	0.3	0.03		68
67	小玉	完形	ガラス 黄	0.2	0.4	0.4	0.05		68
68	小玉	完形	ガラス 黄	0.2	0.3	0.4	0.03		68
69	小玉	完形	ガラス 黄	0.2	0.4	0.3	0.05		68
70	小玉	完形	ガラス 黄	0.2	0.5	0.5	0.08		68
71	小玉	完形	ガラス 黄	0.2	0.5	0.4	0.06		68
72	小玉	完形	ガラス 黄	0.2	0.4	0.4	0.05		68

朝日谷1号墳

石室出土遺物観察表 鉄製品・装飾具

(3)

番号	器種	残存	材質 色	法 量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
73	小玉	完形	ガラス 黒	0.2	0.3	0.3	0.04		68
74	小玉	完形	ガラス 黒	0.2	0.4	0.3	0.03		68
75	小玉	完形	ガラス 黒	0.2	0.4	0.4	0.05		68
76	小玉	完形	ガラス 黒	0.3	0.4	0.3	0.05		68
77	小玉	完形	ガラス 黄緑	0.3	0.4	0.3	0.04		68
78	小玉	完形	ガラス 黄緑	0.2	0.4	0.4	0.07		68
79	小玉	完形	ガラス 黄緑	0.2	0.4	0.3	0.04		68
80	小玉	完形	ガラス 黄緑	0.2	0.3	0.3	0.03		68
81	小玉	完形	ガラス 水色	0.2	0.4	0.3	0.04		68
82	小玉	完形	ガラス 水色	0.2	0.4	0.4	0.08		68
83	小玉	完形	ガラス 水色	0.4	0.5	0.5	0.13		68
84	小玉	完形	ガラス 水色	0.3	0.4	0.5	0.09		68
85	小玉	完形	ガラス 水色	0.2	0.4	0.3	0.03		68
86	小玉	完形	ガラス 水色	0.4	0.3	0.3	0.07		68
87	小玉	完形	ガラス 水色	0.4	0.3	0.3	0.06		68
88	小玉	完形	ガラス 黄緑	0.2	0.4	0.5	0.07		68
89	小玉	完形	ガラス 水色	0.3	0.5	0.4	0.11		68
90	小玉	完形	ガラス 水色(透明)	0.2	0.4	0.4	0.06		68
91	小玉	完形	ガラス 黒	0.3	0.4	0.4	0.09		68
92	小玉	完形	黒	0.3	0.4	0.5	0.09		68
93	小玉	完形	茶	0.4	0.3	0.3	0.08		68
94	小玉	完形	ガラス 黒	0.3	0.4	0.4	0.07		68
95	小玉	完形	ガラス 黄緑	0.2	0.3	0.2	0.02		68
96	小玉	完形	ガラス 黄緑	0.2	0.4	0.4	0.05		68
97	小玉	完形	ガラス 水色	0.1	0.3	0.2	0.02		68
98	小玉	完形	ガラス 水色	0.2	0.4	0.4	0.06		68
99	小玉	1/2	ガラス 水色	0.5	0.5	0.4	0.11		68
100	小玉	完形	ガラス 黄緑	0.3	0.2	0.2	0.02		68
101	小玉	完形	ガラス 黄緑	0.3	0.2	0.1	0.02		68

●表26 SK2出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外側) 色調 (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
102	瓶	口径 16.5 器高 5.6 底径 8.0	外表面埋蔵下が向む。 円盤高台。	ハラ開き ヨコナギ	ヨコナギ	赤褐色	青 ○	3/3	

第5章 調査の成果と課題

朝美澤遺跡、客谷古墳群B地区、朝日谷1号墳の調査では、大峰ヶ台丘陵における弥生時代から中世にいたる集落構造の一端が明らかとなったといえる。以下、各遺跡で注目される資料を取り上げ、調査成果と今後の課題点を記述するものとする。

朝美澤遺跡 1次調査

朝美澤遺跡が立地する大峰ヶ台丘陵東麓では、辻遺跡（栗田茂敏 1989）において、谷部の包含層中より朝美澤遺跡の壺棺墓と同じく後期後葉に比定される多量の後期土器が出土している。また、平成3年調査の朝美澤遺跡2次調査においても同時期の土器が出土している。今回の壺棺墓の検出は、当地域の生活域の想定をより狭範囲にするものであり、朝美澤遺跡の集落解明に重要な資料を得られたものとして評価される。

一方、壺棺墓を取り上げるならば、墓が群集することや墓址に対し傾斜をもたせ壺棺を埋納することは、当平野にて検出されるものと同様であり、松山平野の弥生時代後期の墳墓形態の一つであることが追認されたといえるだろう。今回特筆されるのは、壺棺の固定のために棺底に粘質土を用いていたことが確認されたことと、壺棺内より遺物が出土したことがあげられる。前者は調査方法の留意点を示したものであるといえ、後者は当平野において壺棺中からの出土遺物の例は少なく（福音小学校構内遺跡の壺棺中に鉄鏃が1点出土した例がある）一貴重な資料といえる。壺棺墓における被葬者や埋葬方法等については不明な点が多く、本例は課題解決の一つの資料になるものといえよう。

客谷古墳群B地区

客谷古墳B地区の調査では、古墳の築造に一つの発見と課題を提起するものとなった。2号墳は、一墳丘に石室を2つもつ古墳である。一墳丘2石室の構造をもつ古墳は、同じ客谷古墳群のA地区（6号墳）や平野南部にある砥部地域の古墳（大下田2号墳他）にみられるものである。客谷古墳A地区的ものは、先こうする石室の一部を壊し新しく石室を構築しており、大下田古墳では墳丘中の異なる部分に、並列し開口方向を同じくする形で石室が構築されている。本事例は、後者に類似するものである。さて、石室の構築順とそれに伴う墳丘構築方法については両事例においても解明されておらず、大きな課題といえる。この他、2号墳は一墳丘2石室に加え、A石室の羨道部において改変された跡が検出されており、二石室の意図や追葬について一つの問題を提起するものであるといえる。

さらに、客谷古墳B地区2号墳では、墳丘の内・外部において祭祀的行為の産物である大甕や甕を埋納した施設や、墓の可能性が強い甕を設置した土壙が検出されている。客谷古墳A地区においても同様な事例が検出されており、大峰ヶ台丘陵の6世紀後半から7世紀前半における古墳構造の解明に一つの資料を得たものといえる。

朝日谷1号墳

一方、特記される出土遺物は、1号墳周溝内出土の子持ち勾玉であげられる。平野内では、本例を含め4例が確認されている。稀少資料としてその出土の意義は大きい。

朝日谷1号墳

当墳は、遺物の出土状況より未盗掘の可能性が非常に高い古墳である。調査においては埋土はフルイにかけ遺物を収集しており、よって、当時の副葬品について、資料を充分に得られたものといえるだろう。その結果、馬具は轡が一对分出土せず、部分品の出土に限られたことや、副葬の器類は多数の須恵器中に1点の土師器が伴うという資料が得られている。前者は、馬具における部分品の副葬を提示する資料といえる。後者は客谷古墳B地区1号墳羨道部に1点の土師器碗が出土しており、大峰ヶ台丘陵の北にある船ヶ谷三ツ石古墳周溝においても多数の須恵器中に1点の上師器甕が出土し、さらに、平野の数基の古墳においても類例がみられることより、古墳時代後期の古墳及び祭祀における副葬上器の規定を現したものと考えられるだろう。

石室構造においては、床と棺床の構造は注目されるところである。床構造は、まず地表面に角礫を使用し、角礫上に円礫を水平に敷きつめ、棺床を設置するものとなっている。棺床については複数の礫を組み合せ1対とし、さらに4対を配置させて棺床としたことは注目された。これ等の方法については今後類例調査を進め分析をしていきたいと考えている。

大峰ヶ台西丘陵の古墳

客谷古墳A・B地区及び朝日谷1号墳は、6世紀後半から7世紀前半に比定される古墳であり、かつ古墳群である。各古墳の出土品より、客谷古墳B地区2号墳A石室と、朝日谷1号墳は6世紀末において同時に存在し、使用されたものと考えられる。このことは、大峰ヶ台丘陵西部における6世紀後半の墓域と、その構造を解明する資料であり、今後の調査によりその全貌が明らかとされるならば、古墳群の比較分析の貴重な資料となるものと考える。

本報告作成時において、古墳の石室や埴丘の構築方法（工程）についての調査が充実したものでなければならないことを痛感した。大峰ヶ台丘陵には、弥生時代集落址や古墳群が数多く分布しており、かつ当時の姿をそのままに残す貴重な資料が数多く残されている。今後の調査に期待するところは大きい。

写 真 図 版

写 真 図 版 例 言

1. 造構の撮影は、各調査担当者が行った。

使用機材：

カ メ ラ アサヒペンタックス67

ニコンニューFM2 他

レ ン ズ ペンタックス67 75mmF4.5 他

ズームニッコール25~85mm 他

フィルム ネガカラー

ネオンパンSS

2. 造物の撮影は、大西朋子が行った。

使用機材：

カ メ ラ トヨ／ビューア45G

レ ン ズ ジンマーS240mmF5.6 他

ストロボ コメット／CA-32 2灯・CB2400 2灯(パンク使用)

スタンド他 トヨ／無影撮影台・ウェイトスタンド101

フィルム 白黒 プラスXパン4×5 カラーEPP4×5

3. 造構写真の焼き付け及び造物写真のフィルム現像・焼き付けは、大西が行った。

(白黒に限る。)

使用機材：

引 伸 機 ラッキー450MD

ラッキー90MS

レ ン ズ エル・ニッコール135mmF5.6A

エル・ニッコール50mmF2.8N

印 画 紙 イルフォードマルチグレードMRC

4. 製版150線

印刷 オフセット印刷

用紙 マットカラー110kg

【参考】『埋文写真研究』V o l . 1 ~ 4

(大西朋子)

朝美澤遺跡 1 次調査地



1 A 地区調査開始状況①（東より）



2 A 地区調査開始状況②（手前：環状線調査地東より）

朝美澤遺跡 1 次調査地

図版二

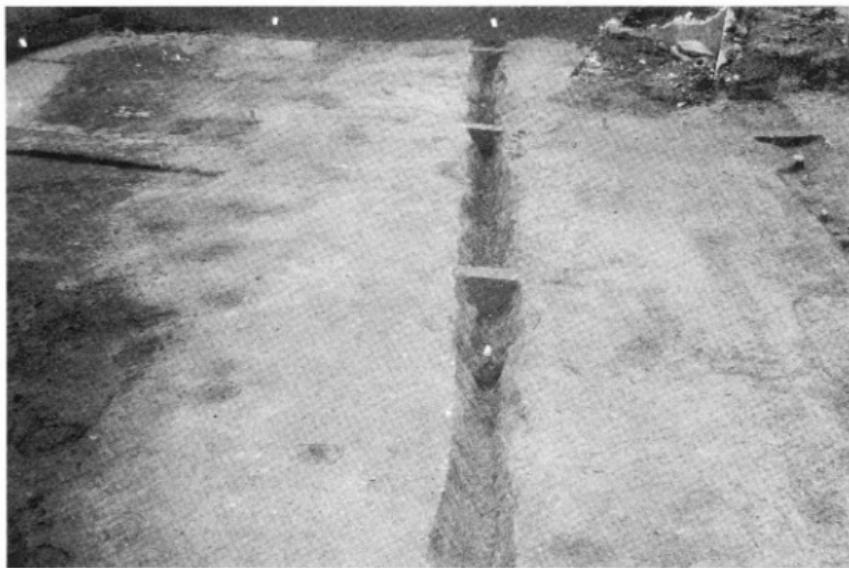


1 A 地区全景 (西より)



2 A 地区 SB 1 (北東より)

朝美澤遺跡 1 次調査地



1 A地区 S D 2 (北より)



2 A地区 S D 3 (南より)

朝美澤遺跡 1次調査地

図版四



1 B地区全景調査前遠景（西より）

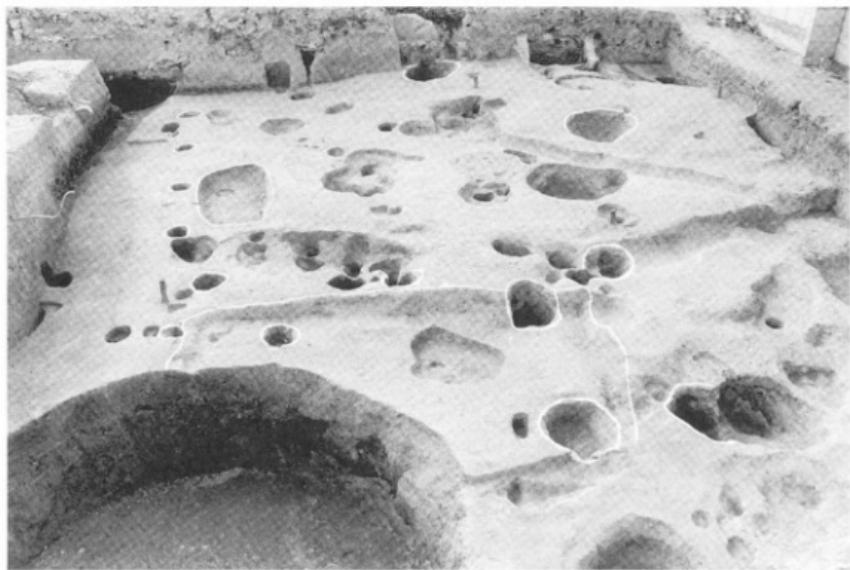


2 B地区調査前近景（西より）

朝美澤道路 1 次調査地



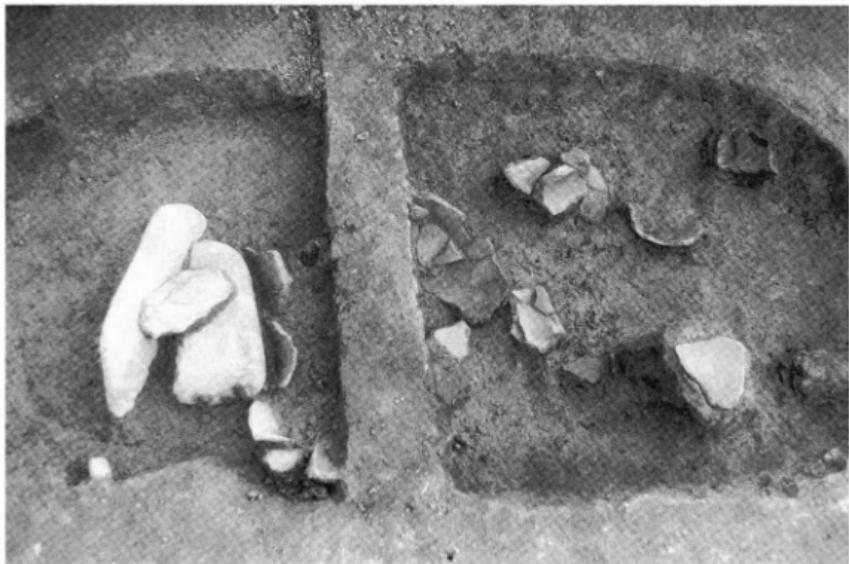
1 B 地区完掘 1 (南より)



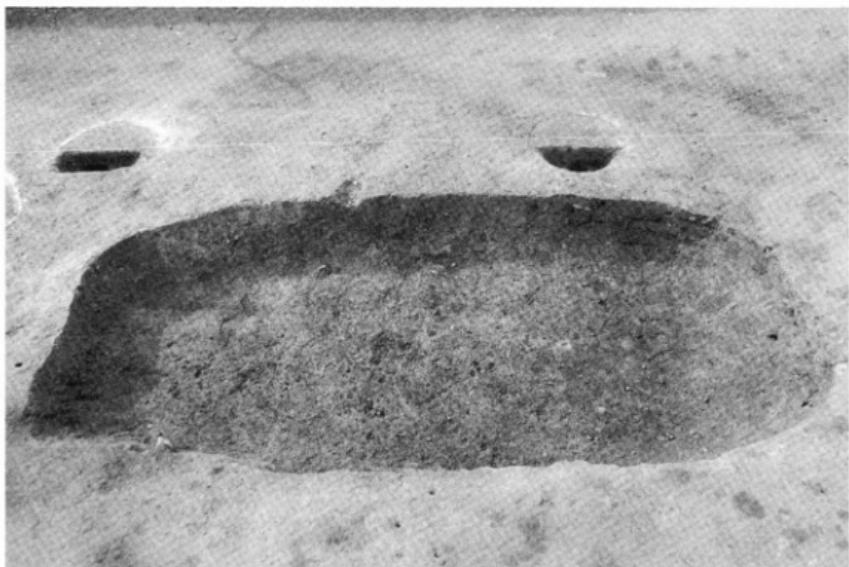
2 B 地区完掘 2 (東より)

朝美澤遺跡 1 次調査地

図版六



1 SK 4 ① (北より)



2 SK 4 ② (北より)



1 壺棺墓群検出状況①（東より）



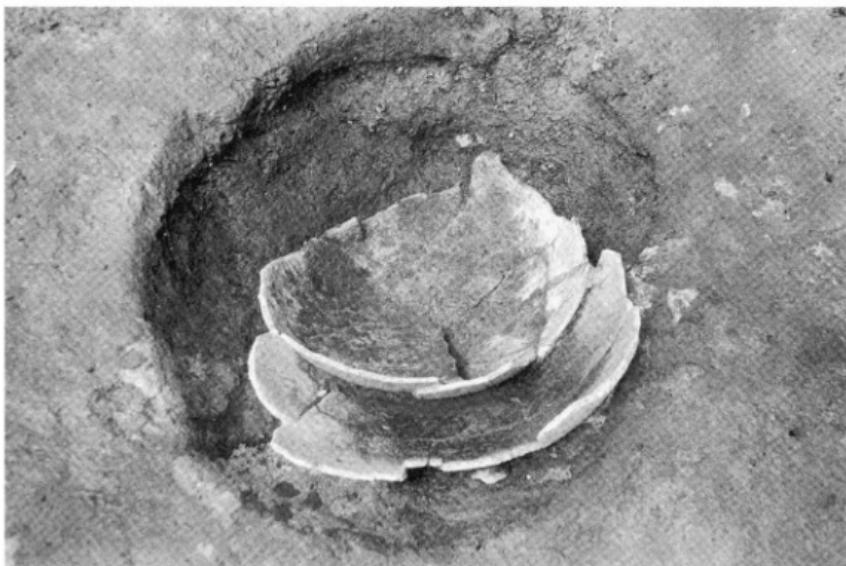
2 壺棺墓群検出状況②（北より）

朝美澤遺跡 1 次調査地

図版八



1 SK 1① (南より)

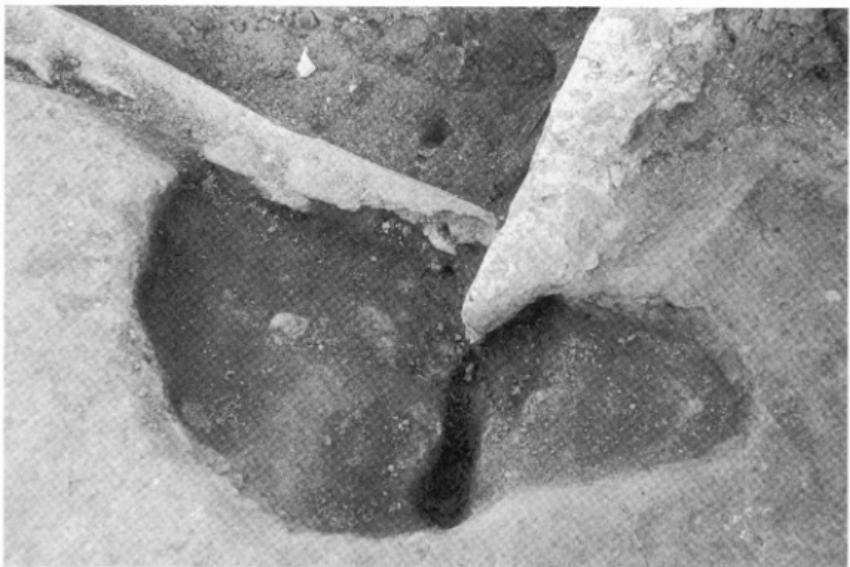


2 SK 1② (東より)

朝美深遺跡 1 次調査地



1 SK 2 ① (東より)



2 SK 2 ② (南東より)

朝美澤遺跡 1 次調査地

図版一〇

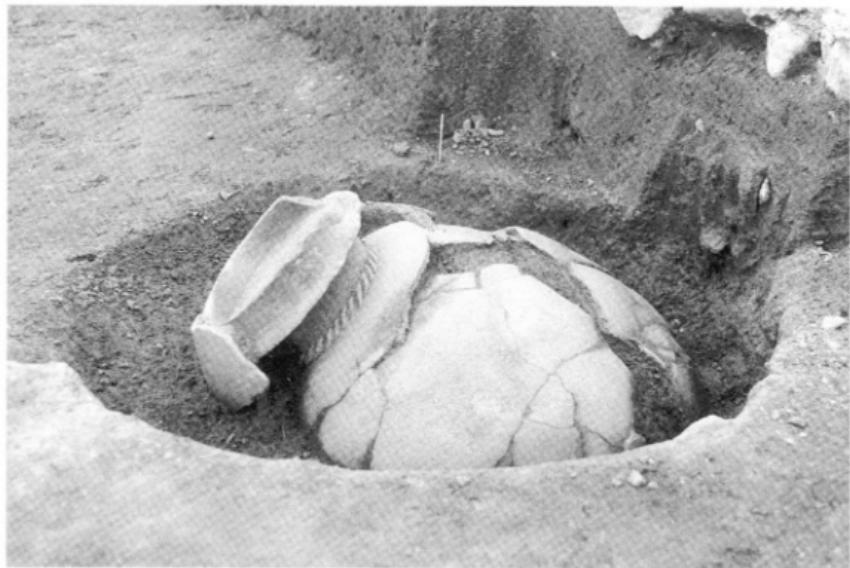


1 SK 3① (北東より)

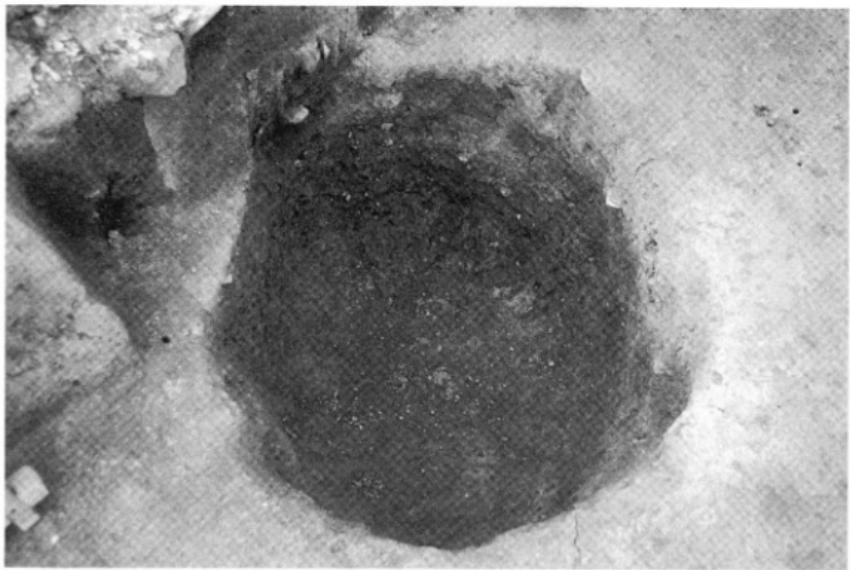


2 SK 3② (南より)

朝美澤遺跡 1 次調査地



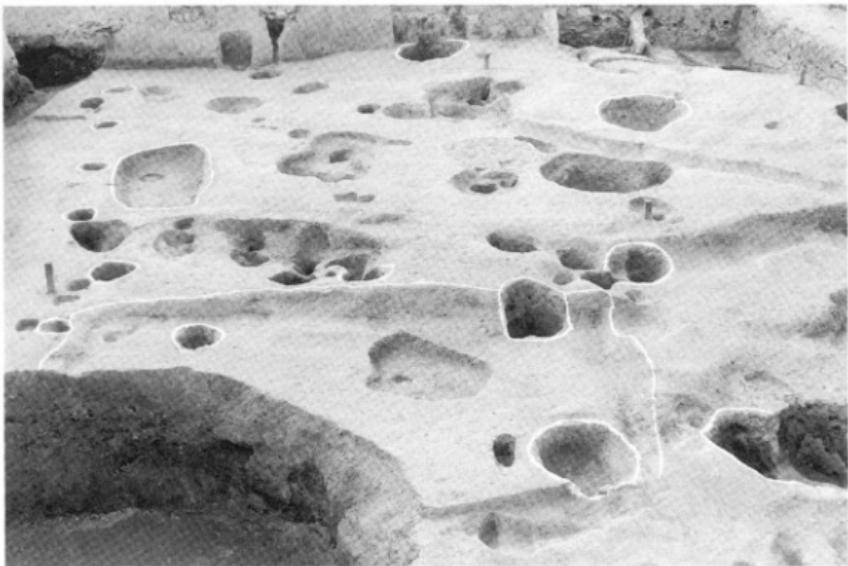
1 SK 3 ③ (北より)



2 SK 3 ④ (南東より)

朝美澤遺跡 1 次調査地

図版一二

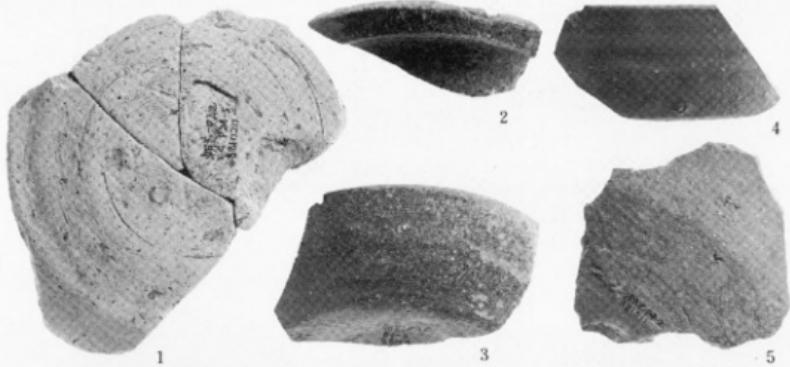


1 S B 1 (東より)



2 S B 2 (南東より)

朝美澤遺跡 1 次調査地



1 A地区 S B 1 出土遺物



18



30



25



32



38



39

1 A 地區包含層出土遺物

朝美澤遺跡Ⅰ次調査地



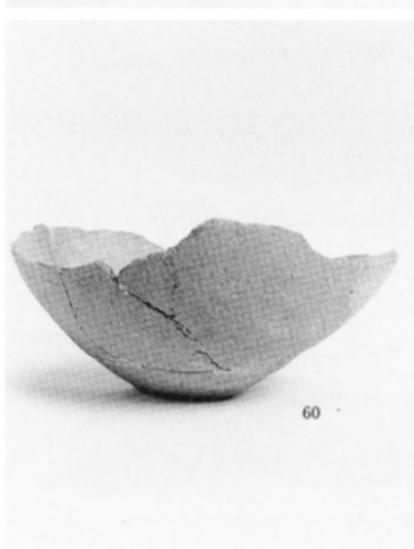
54



59



56



60

1 B 地区 SK 1 出土遺物 (54・56)

SK 3 出土遺物 (59・60)

刺美深遺跡 1 次調査地

図版一六



41



43



46



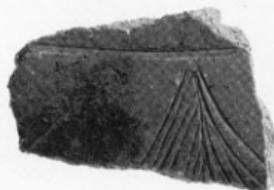
48



62



61



87



94

1 B地区 SK 4出土遺物 (41・43・46・48) SK 5出土遺物(61・62) 試掘調査出土品(87・94)

客谷古墳群B地区



1 調査地遠景（南より）



2 調査地近景（南より）

客谷古墳群B地区

図版一八

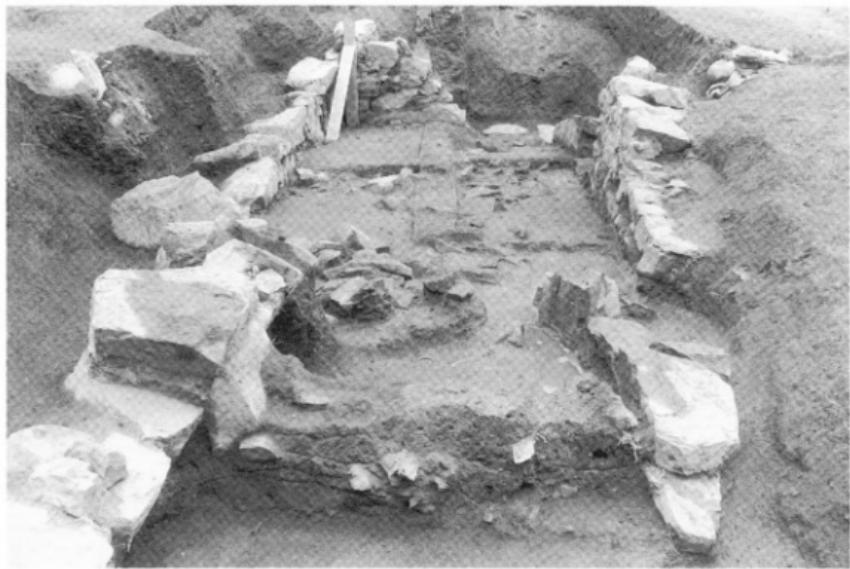


1 1号墳調査前（南西より）



2 1号墳トレンチ（東より）

客谷古墳群B地区



1 1号墳石室検出土状況①（南西より）



2 1号墳石室検出土状況②（北東より）

客谷古墳群B地区

図版二〇



1 1号墳羨道遺物出土状況①（北東より）



2 1号墳羨道遺物出土状況②（南東より）

客谷古墳群B地区



1 1号墳周溝①(北西より)



2 1号墳周溝②(南より)

客谷古墳群B地区

図版二二



1 1号墳玄室①(南西より)

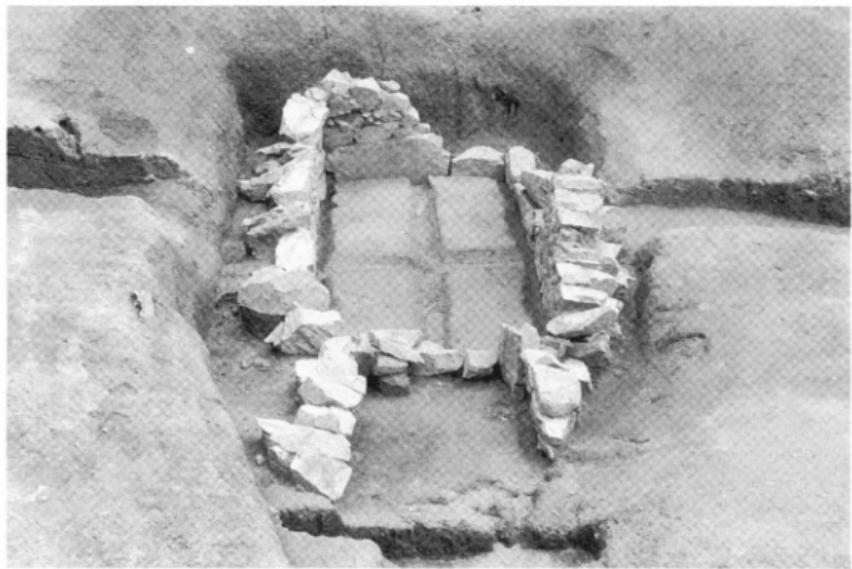


2 1号墳玄室②(南西より)

客谷古墳群B地区



1 1号墳完掘①（南西より）



2 1号墳完掘②（南西より）

客谷古墳群B地区

図版二四



1 2号墳調査前（南より）



2 2号墳トレンチ（南より）

客谷古墳群B地区



1 2号墳A石室検出状況（南西より）



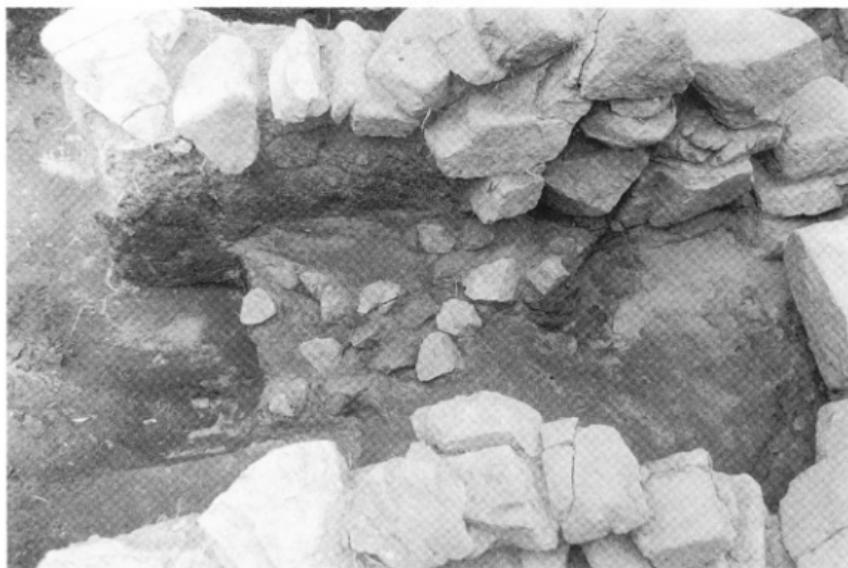
2 2号墳B石室検出状況（西より）

客谷古墳群B地区

圖版二六



1 A 石室羨道① (南より)



2 A 石室羨道② (東より)



1 A石室玄室遺物出土状況①（南より）



2 A石室玄室遺物出土状況②（北より）

客谷古墳群B地区

図版二八



1 A石室完掘①（南より）



2 A石室完掘②（南東より）

客谷古墳群B地区

図版二九



1 B石室砾床①（南より）



2 B石室砾床②（南より）

客谷古墳群B地区

図版三〇



1 B石室奥壁（南より）



2 B石室遺物出土状況①（南より）

客谷古墳群B地区



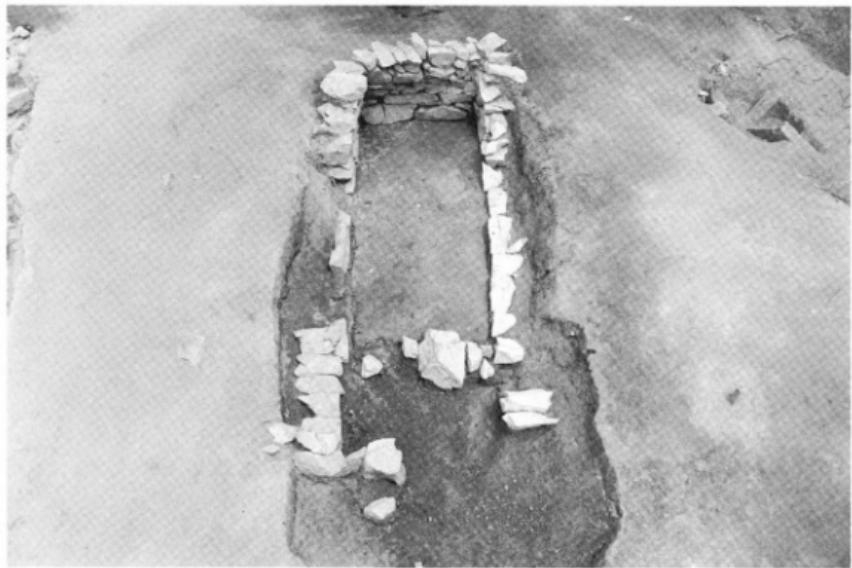
1 B石室遺物出土状況②（東より）



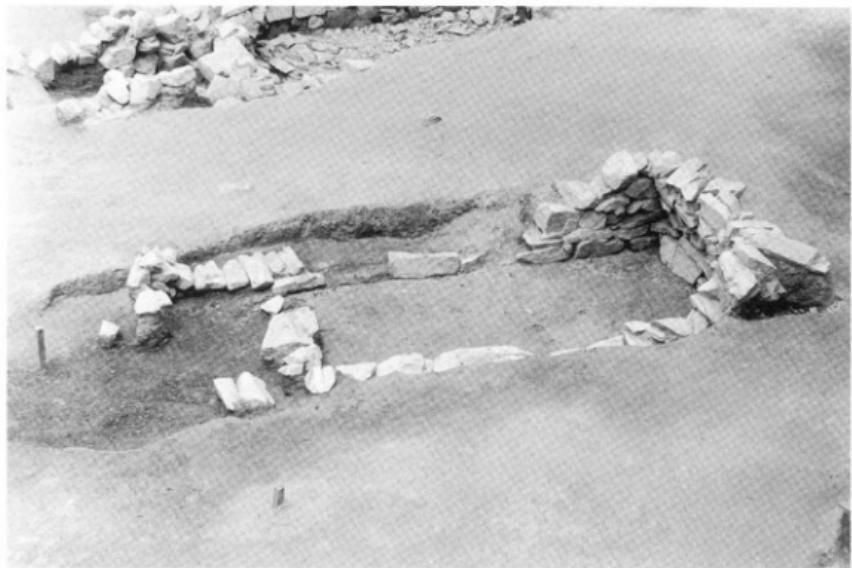
2 B石室遺物出土状況③（南より）

客谷古墳群B地区

図版三二



1 B石室完掘①（南より）



2 B石室完掘②（東より）